
アクアマリンの瞳に抱かれて

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクアマリンの瞳に抱かれて

【Nコード】

N6033T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

深夜、石神島の海で突然光に包まれる

翌朝、目を覚ますと横には、綺麗な少女が眠っていた。

水の精・退魔師・鬼　ちよっとドタバタのラブストーリー。

出会い - 1

これが、全ての始まり。

ここは石神島いしがみじまの名底湾。

新月の大潮の日、潮の引き始めに海に入り電灯で照らしながらガザミを獲りに来ていた。

もう、ガザミ獲りのシーズンも終わろうとしていた。

だいぶ暖かくなってきている。

どうしても頼まれて来たものの、まったく獲れなかった。

満点の星空、波の音と風の音しかない世界。

波間には夜光虫が星空を映した様に、水面に輝いている。

そして、時を忘れたように、宇宙を仰いだ時……

突然、激しい光に何もかもが包まれた。

その光は、とても優しく懐かしい感じがする、その色は例えるならアクアマリン色だった。

朝、いつもの様にベッドの上で目覚めると俺の目の前に、見知らぬ女の子が眠っていた。

「ん？」

「はあ？」

「誰？」

「なんなんだ？ いったいわけわからん……って？」

しばらく、まだ、覚醒していない頭をフルで回転させる。

昨夜、知り合いに頼まれたガザミ（マングローブクラブ）を獲りに名底湾に……

そこで、光に……包まれて……

その後の事は良く覚えていなかった。

『あがぁ！』

おいおい。なんなんだよまったく無言でいきなり殴るか普通。現状からすればしかたないのか？

俺がなんかしたか？

覚えてないけれど。

『ここは、何処？』

透通る様な声だった。

その女の子は、薄いストールの様なものを纏っているだけで、黒と言いか濃紺と言った方が近いだろうか。

絹の様な長いストレートの腰まである髪の毛で、宝石の様なとても澄んだ瞳をしている。

見たことも無いくらい綺麗な小柄な女の子だった。

『ここは、俺の……』

答える間もなく、また殴られた。

『違う！』

違う？ 地名を聞いているのか？

『ここは……石神島 東京から2000キロ南西の島だけど』

ものすごい形相で睨まれている、俺は何もしてないぞ。

すごく綺麗な人の怒った顔は、すさまじく怖かった。

『って、あんたこそ誰なんだ？』

『私は、海^{かい}』

『水無月^{みなつきかい} 海』

ヤバイってバイト遅れる。

しかしこじやいくらなんでもまずいだろう。

本当に勘弁して欲しい。神様、本当にごめんなさい。

この時ほど日頃の行いを後悔した事が無かった。

『痛い……なあ』

まったく朝から訳わからず、ボコボコですか？

腹が立つほど殴られた。

『貴様は名乗らんのか？』

『ハイ、隆羅^{たから}す！』

『如月隆羅^{きんげりゅう}です』

マジ、怖えええ、神様仏様、本当にごめんなさい。

とりあえず、穏便につて無理なのか何を怒っているのだろうか？

その時、枕元に置いてあった携帯が鳴ると彼女が徐に携帯を切った。

「プチッ」ってマジですか？ もしかして、店長からの電話だったんじゃない？ 殺されるな確実に。

どうしようと言いつつ訳を考えていると、「クウ」と、とても可愛いらしい音が彼女の方からしてきた。

彼女の方を見ると睨みつけられていた。

いやいや……そんな怖い顔しなくても……

『しょうがねえなあ。ちょっと待っていてくれ、何か買ってくるから』

そう告げて近くの、コンビニでとりあえずパンと紅茶なんかを買って来て彼女に渡した。

そんなに睨んで食べなくても毒なんか入ってないし。

それと、一応2人分なんですけど、俺の分はなんて怖くて聞けなかった。

全部、食べ終わると……

「スウー」と寝息が聞こえて来た。って寝ますか普通？

これで、もし起こそうものならボコボコにされるのが目に見えた。本当に泣きたくなってきた。

これから、どうすれば……バイトやばいでしょとりあえず連絡いれと。

バイト先の店長に休む事を告げた。

「スイマセンですハイ。」

もう、凹み様のなくらい嫌味言われた、あのクソ店長め。

「ゾク」と背中に悪寒が走り視線を感じる、お目覚めになられたのかしら？

振り向き恐る恐る聞いてみる。

「あの、大変申し上げにくいんですが、何故、君が俺のベッドに？」

「我は水の精」

「この世と妖かしの世をつなぐ門の番人」

「はああ？」

少し危ない人なんじゃ、この21世紀にだぞ「水の精」「妖かし」

「門の番人」ありえないって。

アニメや漫画じゃあるまいしそんな話。それとも電文かまったく。

「昨夜、大切な鍵を落とした、鍵の波動を追って来たら此処に」

つて、ここ3階なんですけど玄関には鍵かけてあったはずだし、いたいどうやって。

100万歩譲って「水の精」だとして、でも水の精ってなんなんだ？

人間にしか見えないけれど。ライン川のローレライとか？

セイレーンとか半魚人&人魚？

人魚ってこちら辺だとジユゴンとか？

ジユゴンって『ブツ』自分で言って笑ってしまった。

スパアーン また殴られた。

なんで俺が？ 何か悪い事でもしましたか？

無理絶対に無理！

お願いだから出て行ってくれないと心の中で叫んだ。

『隆羅とか言ったな、この島を案内しろ』

つて、有無を言わさずですか？ ありえないくらいありえないんですけど。

そして戸惑っていると……

『お前、1回死んでみるか？』

勘弁してください極道じゃあるまいしって、もしかして極道なの？
当たり前のように殴られたし。

『しょうがねえなあ、とりあえず、これでも着てくれ』

俺のシャツと麻のパンツを渡すと、あからさまに嫌そうな顔をされた。

『そんなに嫌そうな顔しなくても、ちゃんと洗ってあるし、その格好じゃ外に出られないだろ』

先にこいつの着替えから買い物に行くしかないのか。

俺の朝のバイト先でもあるこの島一番の大型店舗に買い物に向かう。島と言っても9つの島からなる群島で、その中でも2番目に大きく、島々の中心で一番の街な訳である。

『さあ、行くぞ。俺のポンコツ車に乗ってくれ』

『このスクラップ動くのか？』

悪かったなスクラップで。

店に入り速攻で衣料品のある2階へとエスカレーターに乗ろうとした時に捕まった。

『如月くん？』

『店長……』

『おや、バイトさぼってデートですか、いい根性していますね』

いや、デートなんてもんじゃなくて、これは拉致に近いモノだと、もちろん拉致られたのは、俺の方で……

『はじめまして、私、水無月 海と申します。如月君とは親が決めた許婚で突然押し掛けてしまい、皆様にご迷惑をお掛けして大変申し訳ございませんでした』

『えっ？』

海さん、今とんでもないこと口走りませんでした？

『店長？ あの店長』

店長の顔を見ると一瞬惚けた顔が見る間に怖い顔になった。

『如月、貴様！ このヘタレの如月に、こんな見た事も無い様な綺麗な女の子が許婚だあ？ 許さん、後から尋問と言う名の拷問だからな』

ハアゝ泣きたくなってきた意味くじ分からないし、なんですか許婚って誰がですか？

店長に尻に蹴りを一発くらい2階へ上がる。

自分に合う洋服を選んで来るように海に伝え、すでに疲労困憊気味の俺はレジの近くのベンチに体を投げ出して休んでいた。

『そう言えば、所持金あんまり持ってないけど』

などと考えていると、レジの辺りがなにやら騒がしい。

見ると店員と海が何かを言い合っていた。

何を揉めているんだ？ あれ？ カードなんか持ってたけアイツ。店員さんはなんだか駄目だししているけど、しょうがねえなあまったく。

立ち上がりレジに近づく。

『これで、お願いします。』

財布からカードを出して支払いを済ませるって、ドンだけ買ったんだよ。

レジカウンターのの上には山の様に洋服が積まれていた。

『はあ〜』

今日何度目かのため息をつく。

『後から、ちゃんと返す』

海さん、そんな哀れな人を見るような眼差しやめてください。

確かに貧乏だけどカードくらい持っているから、ネットするのに必要だしネットじゃなければこの島では手に入らない物いっぱいあるからだ。

それに俺はネットがなければ生きていけないプチ秋葉系だしな。

でも、あの黒いカードって何だったんだろう、まさかそんな訳ないか。

海の着替えを済ませて、車を東海岸沿いの道路を北へ走らせる。

出会い - 2

『海さん、あの……』

『海でいい』

外を向いたままそれ以上返事も無い、聞きたい事でんこ盛りなのに。

しばらく走らせると、そろそろ玉城崎だなと思った時。

「クウ〜」と聞き覚えがある音が車内に響いた。

『隆羅、飯!』

呼び捨てですか……

『しょうがねえなあ、この先に飯屋があるから』

この辺で、飯食えるところは、あそこしか知らない。

また許婚とか言われたらどうしよう、そんな事を考え巡らせていると視線を感じた。

えっ睨んでいます? 行きます。行かせて頂きます……

そこは、夜のバイト先のオーナーの友人で、文さん夫婦がやっている可愛らしい黄色の平屋建ての小さなお店だった。

ココの一押しはタコライスか石神牛の煮込みで文さんの腕はこの島一番だと俺は思っているのだ。

『お久しぶりです、結さん』

『おっ、きー君久しぶりだね』

『ん? その娘は』

『ただの友達です』

石神牛の煮込みをセットで二つ注文する、海は腹が減っているせいか黙々と食べている。

とりあえず一安心か。

文さん達と、他愛の無い会話をしていると、結さんの奥さんのマコ姉が興味津々な顔で聞いてきた。

『ねえ、きーちゃん、彼女？』

『マコ姉、それは、天と地がひっくり返るくらいにありえません』

そう言った瞬間、「ゴン！」と鈍い音とともに、ゴーヤに激痛が、島では弁慶の事をゴーヤって言うのだ。

お願いだからゴーヤだけは蹴らないで涙が出てきた。

文さん夫婦は、隣で笑っているし、シャレにならないくらい痛いんですよマジ蹴りだから。

『ご馳走様でした、また来ますね。』

店を後にして車へ。

『なあ、海 何も喋らなかつたな』

『鬼の気配』

『えっ鬼？』

空耳ですか？

島の最北端の平崎灯台を回って西海岸沿いを南へ下って市街へ戻る。

『橋・アーチ・青』

海が呟いた。連想ゲームかなんかですか？

『部屋からも見えるサザンウエストブリッジがそんな感じかなあ』
また、海に睨まれ車を橋に向けて走らせる。

その橋は、市街地の近くにあり橋の先には人工島の公園がある。
橋に着いた時はまだ日も高く、目の前には港が広がっていた。

欄干に腰をかけ海を眺める。

さすが春の大潮ちょうど潮が動いている時間だから、もの凄い勢いで流れていた。

ふつと海を見ると辺りを見回している。

綺麗な顔立ちでメチャ可愛いのに何であんなに何時も不機嫌なのか？

そんな事を考えながら何気なく空を見上げると黒い影がものすごい勢いで向かって来た。

『なんだあれ？ コウモリ？』

そう思った次の瞬間、真っ青な空とエメラルドグリーンの海が回転した。

落ちた？ いや落とされたのだ。

下は激しく流れる大潮の海。

背中の辺りから海に投げ出され『ゴボツ』水を飲んだ。

ヤバイ流される。

慌てて何とか水面に顔を出すと橋の上から何かが飛び込んでくるのが見えた。

遠くなる意識、その中で微かに見えた物は人魚？ 青い長い髪でア
クアマリン色の瞳をしていた。

どれだけ時間が過ぎたのだろう、意識が引き上げられていく。
感覚が戻ってくると顔に水滴のようなものが落ちてくるのを感じる。
それは冷たくは無くとても温かった。

ゆっくり目を開けると海の顔が見える、俺の顔を覗き込むようにして海が泣いている。

それは海の涙だった。

『ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ』

海が絞り出すような声で謝った。

辺りはオレンジ色の夕日に包まれている。

なんだったんだ、あの巨大なコウモリのようなものは。

体を起こし海の顔を見る。泣き止まない。まだ濡れている手で頬を伝う涙を拭いた。

『鬼』

『狙われている』

『私の責任』

擦れる様な声だった。

『大丈夫だから』

何も理解できてないけどそんな気がして、海の頭を優しくなでて『家に帰ろう』と続けた。

その時、これと似た事が昔あった様な気がした。

子どもの頃の俺・どこかの池・泣いている女の子・光の玉ぼんやりしてハッキリとは思いつけなかった。

海がなかなか立ち上がるうとはしない。

しゃがんで顔を覗き込むとなんだか海の顔がほのかに赤かった。照れているのかと思った瞬間、パンチが飛んできた。

女の子の泣き顔よりは、怖い顔の方がまだましかな。
殴られるのはゴメンだけどね。

出会い - 3

あつと言つ間に、それこそ島じゅうに俺と海の噂が広まり大騒ぎになり身動きが取れなくなつてしまつていた。

『あのヘタレ如月に彼女が出来たらしい』

『いや、如月の許婚らしいって聞いたけど』

『見た事も無いくらい綺麗な女の子らしいぞ』

『クソ如月の野郎』

『彼女を泣かしたらコロス』

『夜道は気を付けろよ』

『車に注意』

なんて中にはドス黒い話まで。

追い出すわけにもいかず。それに、まだ分からない事だらけだった。

噂の件はある意味、海にはめられた感じで完璧に外堀は埋められてしまった。

相変わらず不機嫌そうな顔しかしてくれないが。

『如月先輩！』

『きーちゃん』

『如月、行くぞ』

大型連休前の日曜日、海ちゃん大歓迎ビーチパーティーが行われた。

バイト仲間、ネット仲間、店長&オーナーまでどんなコネクションで集まったんだ？

しかし、はつきりしている事がひとつだけみんなの目当ては、『海ただ一人』不安だ……

場所は、地元の人間しか知らないような秘密のビーチで、そこは俺のホームグラウンドと言うかホームシーと言える場所だからたぶん危険は無いだろう。

ビーチパーティーというかビーチでバーベキューが正しい言い方かな。

ここ沖縄ではビーチパーティーかビーチパリーが正式名称になっている。

準備が出来て、誰かが乾杯の音頭をとる。

『海さんようこそ石神島へ、皆で楽しくやりましょう！』

『乾杯！』

はじまちゃったよ、いきなり弾けまくっている奴等居るけど大丈夫か？

俺がそつと隅の方で静かになって思っていると女の子が声を掛けてきた。

『先輩、如月セ・ン・パ・イ』

夜のバイト先の後輩 睦月^{むつきみゆ} 美夢だった。

『ドコまでいったんですか？ B？ C？』

おいおい何をいきなり聞いてくるかなこの子は。

『彼女の血液型は、誕生日は？』

『ドコの出身なんですか？』

『……さあ』

怒涛の質問攻めだった。困り果てて腕を組んだ。

『さあつて、先輩！　ひとつ屋根の下で暮らしているのに何も知らないなんて。それに、海さんて、小柄なのにナイスバディですよ。何カップですか？』

なんて答えて良いもんだか戸惑う、「水の精」だぞ「門番」だぞ、だいたい血液型や誕生日なんかあるのか？

やはりここは黙秘だろう言っても信じてもらえる訳も無く、言えば多分変態扱いされるだろうしな。

『先輩、最低です、大馬鹿者です』

『そんな事言われてもなあ、美夢、少ししつこいぞ。お前』

『ううう、先輩の馬鹿ちゃん！』

美夢が涙目になっていた。

『泣くなって』

『本気で心配しているのに』

『ゴメンな本当に、美夢は、俺にとって妹みたいなもんだからなあ。しょうがねえなあ、何かあったらすぐに報告するよ』
美夢の頭を優しく撫でた。

『でも、良かった。あまりイチャイチャしてないし』

『なんだか距離が空いているような感じで、まだチャンスありかなあ』

『話の後ろの方はよく聞き取れなかったんだけど』

『いいの、いいの、こつちの話だから』

海も皆に囲まれて大変そうだなと思って、助け舟を出そうとすると、店長に感づかれてしまった。

『如月、お前はツマミの魚でも獲って来い！』

『しょうがねえか』

『早く行け。邪魔だ』

『ハイ、ハイ、邪魔ですか』

辺りを見ると、オーナー達は釣りを始めているし、飲んで語り合っている奴等も居る。

見事なまでにバラバラだな。

マスク・シュノーケル・フィンをつけてイーグン（鰐）を持って腰には網を括り付けて準備完了さあ行きますか。

海と目が合った、とても哀しそうな目をしている、何故？

『早く行け！』

海の視線が気になったが店長にせかされて海へ入った。

『流石に早いな、あいつシュノーケリングや泳ぐことだけは上手いからな、普段はヘタレのくせに』

いつものポイントに向かう、このイノー（礁湖）の中の地形はすべて頭の中に入っている。

途中で何度か水面から顔を出し大体の場所を確認する。

ビーチに目をやると、流石に今日は大人数の為にビーチは貸切状態

だった。

『海ちゃん、どこ行くの?』

風に乗り声が聞こえてきた。

まあ、気にする事ないか、皆が居る事だし。魚獲りに集中する。

おっ居た、居た。大きなジャノメナマコ、イーグンでチョンチョンとノックしてウートートー（お祈り）をする。

『なに? 誰かに見られている感じがする』

キヨロキヨロと見渡すが誰も居ない。気のせいだろうと思い、ひと通りポイントを回ってミーバイ（ハタ）やクモ貝などを獲りビーチに戻る。

早めに戻らないとウルサイ奴等が多いし、海の事も気になった。途中でまた、巨大ジャノメナマコさんにノックをしてウートートーする。

『まただ、誰? 誰も居るわけ無いか……』

ビーチに戻ると宴もたけなわ、店長やオーナーが矢継ぎ早に命令を下した。

『如月、遅いぞ!』

『獲物をとつとさばけ酒の肴が無いぞ』

まったく、この人たちは俺を何だと思っているんだ。

『下僕』

『ヘタレ』

左様で御座いますか。

渋谷、波打ち際で魚をさばいていると、美夢が近づいてきた。

『先輩、海さん見ませんでしたか？』

『海がどうかしたのか美夢』

『先輩が海に入って少ししたら、海さんも泳ぎに行っちゃったみたいで』

辺りを見渡すと居た。少し離れた珊瑚の岩の上で海を眺めている。

『あそこに居るじゃんか』

『本当だ、海さ〜ん』

美夢が海に向って走り出した。

あれ、アイツ水着なんか着てたっけ？ そんな事を考えながら魚をさばく。

夕方になり片づけをして撤収タイム&お開きになった。

帰りの車の助手席で海が寝息をたてている、かなり疲れたのだろう。本当に、寝ているときの顔は、まだドコとなくあどけなくって可愛いんだけどなあ。

今日は俺も本当に疲れた、ほとんどパシリか酒の肴状態で。

でも、アイツのはにかむ様な笑顔も初めて見られたし、あんな顔もするんだな。

そんな他愛の無い事を考えている内にアパートに着き海を起こす。起きないどうするか。

『お〜い、海、しょうがねえなあ。』

起こさないようにそっと抱き上げる、軽い！ それでも、万年運動不足のヘタレには3階まではかなりキツイ。

『あつ、起きた……あのそんな怖い顔しなくても、危ないから暴れ

るな!』

抱き上げていた海が暴れて落ちた。バランスを崩し階段を数段踏み外し、背中と頭を踊り場の壁に打ち付ける。

『つつ、痛つてえ!』

『海? 怪我は無いか?』

ありえないくらい目の前に、海の顔があった。

お姫様抱つこのまま、後ろに倒れて慌てて思い切り抱きしめていた。『ボツ』と音がするくらい海の顔が真っ赤になり、そのとたん頬に平手が飛んできた。

海は怒った顔をして落ちている鍵を取り部屋に入っていた。

部屋に戻ると、海はシャワーを浴びていた。

俺は車に置いてある荷物を取りに駐車場に降りた。

何でこんな目ばかり逢うのだろう、ただの一般ピープルだぞヘタレだけど。

優柔不断、誰にでも優しく過ぎで良い人とよく言われるけど良い人って都合の良い人って事だろう。

『はつきりしないその性格は、確実に痛い目に逢うからな』

3バカトリオと呼ばれていた頃のスギヤクロにはよく言われたよなあ。

確かに、痛い目に逢えばなしだった。

部屋に戻ると、海は髪を乾かしていた。

『さあ、俺もシャワー浴るか』

その前にイーグンやマスクやフィンを洗う為に浴室に運びシャワーで水洗いする。

その後でカラスの行水ごとくシャワーを浴びて部屋へ行く。

『何?』

海が何か言いたそうに、俺の顔を見上げている。

相変わらずの険しい顔で、何かしましたか僕？

『隆羅、海の中で何していた？』

『魚や貝を獲っていたけど』

『違う。祈り？』

『祈り？ ウートーの事か？ あれは、海の神様にお邪魔しますとありがとうと言っていたのだ。海に潜るときに必ずする儀式の様なものだ。信心深い訳じゃないけれど、海や山、空や風、木々や土、自然の中には何故か神様がいると子どもの頃から信じてきたからな』

『でも、隆羅は魚食べない』

確かに俺は魚貝類が苦手だ。

『だからと言って無闇に獲っている訳じゃないし、無益な殺生はない』

『必要な分だけ、その日獲れる分だけしか獲らない。時々、小遣い稼ぎにはしているが潜って魚獲りや名底湾での力二獲りは、楽しい生活の一部だし、魚や力二をあげて喜んで貰ってくれる人達もいる。その笑顔は何にも代えられないし、命を無駄にしているつもりもない。何よりも、俺は海が大好きだ。泳ぐのも見ているだけでも。それじゃ、駄目か？』

『駄目じゃない』

少し何かを考えて、海が答えた。

『でも、鮎は危険だし怖い』

『怖い？』

そうか、だから今まであんな顔していたのか。

『海、いいか良く聞いてくれ。人間が作り出した物は、殆ど便利な道具だと思う。でも、悲しい事にその殆どの物が凶器にもなってしまう。それは道具を使う人の心によって便利な物にも凶器にもなってしまう。道具に責任は無いんだ』

『俺は、今までも、そしてこれからも海かいも海づみも傷付ける事は絶対にしない。信じて欲しい。』

俺の部屋には釣竿、網、銚なんかの漁具がいっぱい置いてある。

だから警戒していたのだろう、怖かったのだ。言葉だけで信じて貰えるだろうか。

そんな思いはしばらくすると何処かに消えてしまっている事に気が付いた。

海の瞳の中に僅かに優しさが見えるようになったから。

内地へ・1

しばらくして困った事がいくつか起こるようになった。

今朝も、良い匂いが鼻をくすぐる、そして、とても柔らかく温かい物が……

「ドクン！」

心臓の鼓動が跳ね上がる。

海が何故、俺の横で寝息を立てているのか？

あれから、少しずつ誤解が解けて、ほんのちょっとだけ海を近くに感じるって近すぎるだろう。

困った事のひとつがこれだ。

俺は、朝と夜のバイトを掛け持ちでしていてプライベートな時間など殆どないのだが。

睡眠時間を削って時間をひねり出している。

そのひねり出した時間は何をするかと言えば、もちろんプチ秋葉系の俺はパソコンの前に張り付いているわけだ。

海はと言うと俺の後ろのベッドで気持ちよさそうに寝息を立てている。

健全な男女がこんなに近くにいてと思うかもしれないが、ドキドキしない訳では決していないのだが。

俺も一応男だし。

しかしだ、見た目はアイドルも顔負けの凜としたとても可愛い女の子だが「水の精」だぞ「門の番人」だぞ。

今までの経験上、何かしきょうものならボコボコの目に逢うのは確かだった。

それ故、俺はソファで寝ているのだが、朝、目を覚ますと目の前

に海が居て。

海がソファで寝ていれば俺はベッドで。

そして朝になると海もベッドの中に潜り込んでいる。

ほかの部屋で寝ればいいだろうと思うかもしれないが、それは、また違う意味で困った事が起きているのだ。

仕方なく、他の部屋で寝た事があるのだが。

朝、聞き覚えのない声で起こされた。

『おい、ヘタレ朝飯はまだか』

体の上に何かが乗りそこから声がする。

『キサラギ、喉が渴いた』

もうひとつの声は耳元で。

目を開けると黒猫のロンが俺の胸の上で、そして耳元では雉虎の猫チイーが……

しばらくぼんやりしていると。

『喉渴いたってば、がぶっ』

『痛って』

耳をかじられた。

昔から、猫が2匹住んでいて食事を与えている。

住んでいると言うのは俺が飼い始めたわけではなくいつの間にか居座るようになってしまったのだ。

パソコンとベッドのある俺の部屋には、こいつ等が入らないようにしているのだが。

他の部屋は出入り自由に使わせている。

その猫たちがしゃべりだしたのだ。

しゃべりだした訳ではなく俺が動物の鳴き声を理解出来る様になっ

てしまったというのが正しいのかもしれない。

あの光のせいなのだろうか。

理由は後で分かる事なのだが、今の俺には分かるはずもなかった。そして、俺の知らない所で静かに確実にとんでもない計画が進められていたのだった。

それは突然やってきた。

梅雨も終わり、そろそろ石神島もトップシーズンになるうかと言う6月の終わりの土曜日の朝だった。

『今日も、暑い1日なのかな』

などと考えながら、いつもの様に事務所でタイムカードを押し職場に向かう。

朝のバイトは大型店舗の中のベーカリーの仕事だった。

店長が早朝に仕込みをしたものを、俺がオーブンで焼き上げる。

そして、焼き上げながらサーターアンダギーなんかも揚げていた。

自慢じゃないけど（ちよつと自慢）サーターアンダギーは俺のオリジナルも含めて60種類くらいあるのだ。

『お早うございます、店長』

『相変わらず、朝から良い匂いさせているな、このヘタレエロ魔人め』

いやいや好きで良い匂いさせている訳じゃないですし。

『まあ、お前とも、これで最後だからな。』

『えっ店長、転勤でもするんですか？』

『お前の後釜が決まったんだよ。』

『へっ？ 俺クビですか？』

『クビって訳じゃないのだが、上からな』

滅茶苦茶歯切れの悪い言葉だった。

『上からって、クビと一緒にじゃないですか！』

『まあ、元気にやれよ、海さんに宜しくな』

俺の肩をたたいて微妙な笑顔を繕って店長が言った。

まったく納得できなかったが、じたばたしてもしょうがない。

ひと通り仕事を終える、ここも今日までなのか。

まあナンクルナイサーだ。

『お世話になりました、今まで有難う御座いました。』

礼だけはきちんとしると、小さい頃から叩き込まれてきた。

俺の実家はとても躰の厳しい家だった。

考えても答えが出るわけもなく、夜のバイトに向かった。

夜のバイトは、居酒屋の調理だ。

睦月美夢がホール、オーナーはホール兼調理でオーナーは他にも店舗を持っているからいつも居る訳じゃなかった。

朝も夜も調理系の仕事な訳だ理由は簡単。

昔から料理やお菓子作りが大好きで、自分でもかなりいけていると思っっていたりする。

それに、美味しい物を食べている幸せそうな顔を見るのがこの上もなく大好きだったりするからだ。

夕方、そろそろ美夢が出勤の時間かなと思いつき時計を見ると5時を指そうとしていた。

『おはようございます』

美夢の声がいやに沈んだ暗い声だった。

不思議に思い調理場から顔を出し『おはよう』と声を掛けた。
すると今にも泣きそうな顔で抱きついて来た。

『先輩、辞めちゃうって本当ですか？』

『美夢、何を言っているんだ？』

『だって、オーナーから連絡があって、先輩が内地に帰るって』
話がまったく見えず。とりあえず、オーナーに連絡を入れてみる。
今は手が離せない状態なので居酒屋のクローズ時に話に来るとの事
だった。

いったい何が起きているんだ？ 朝も夜も勘弁して欲しい。

居酒屋も一息ついて賄いを食べて片付けを始め、30分程で片付け
終わらせてオーナーが来るのを待つ。

『美夢は明日、朝から海たちと遊ぶ約束しているんだろ、早く帰れ』
俺の シャツの裾を掴んで離さず美夢が帰ろうとしなかった。

そして哀しそうな目で俺を見た。

『しょうがねえなあ、まったく、そんな目で見るな分かったから、
話を聞いただけだぞ。』

『うん』

ほんの少し笑って頷いた。

オーナーの話を纏めるところだった。

オーナーの携帯に昨日連絡がありその内容は、『如月様のご両親の
代理の者ですが、お会いして取り急ぎお話したい事があると』。

会ってみると、とても綺麗な女性で何処かの弁護士か秘書かみたい
な感じだったらしい。

そして、委任状を見せられ、俺を何があっても内地に連れて帰ると

告げたらしい。

その委任状を見ると、そこには確かに親父たちの字で『如月 仁じん』『如月 沙羅さら』と署名捺印されていた。

オ

ーナーも対応に困り俺に確認しようとしていたらしい。

そして、代理人の名前は『水無月 潮うしお』嫌な予感がする、水無月って海の知り合いか？

『とりあえず、保留にしてください、両親に確認してみます』
クソ親父舐めるなよ。

深夜に帰宅する為、今日は実家に連絡も出来ず。

家に帰りパソコンに向かっていたが苛ついて落ち着かなかった。

いったい何が起こっているんだ訳が分からない。後ろを振り向くと、海は気持ちよさそうに寝ている。

こんな時は、料理するに限る（持論だが）。

料理をしていると不思議と落ち着いてくるものなのだ。

キッチンで作業を開始した。

しばらくすると眠そうな目をして海が起きてきてしまった。

『隆羅、何をしているの？』

『海、起こしちゃったか、ゴメンな』

『今ちよつとケーキを焼いているんだ』

『ケーキ？』

『そう、ガトーショコラ』

キッチンにはチョコレートの甘い香りが立ち込めている。

ふにゃつと海が満面の笑顔を浮かべた。

くう、可愛い過ぎる抱きしめたい衝動に駆られていると、俺の背中

にこつんとおでこをくつけて来た。

『おいおい海、

海さん？　しょうがない奴だな』

固まっていると返事がない、もしかして寝ているのかこいつ。

『すう〜すう〜』

寝息を立てていた。

海を部屋に連れて行き寝かせる。

焼き上がったガトーショコラを軽くラッピングしてメモを貼り付けた。

『海へ　みんなで食べてくれ。　隆羅』と。

昨夜遅かったし朝のバイトも無くなったそんな訳で、遅い時間までゆっくり寝ていると視線を感じる。

海は朝から遊びに出ているし、猫たちがこの部屋に入るはずもないじゃ、誰？

目を開ける。

そこにはメガネをかけて長い髪を後ろで一つに束ねている、海に良く似たとても綺麗な女性が俺の顔を覗いている。

『おはようございます、如月さん』

『うわあっ』

飛び起きて壁際に後ずさりする。

『そんなに、驚かなくてもいいじゃないですか？』
いや普通は驚くでしょう。

『私、水無月　潮と申します』

水無月　潮その名前はどこかで聞き覚えのある名前だった。

『あつ、代理人の人』

『ハイ、海の姉です。』

『海のお姉さんですか？』

海のお姉さんならどうやって何処から入ってきたなんて聞くだけ無駄だろう、慣れって怖いものだ。

着替えを済ませて話を聞いてみる事にした。

『朝のバイトの件は、少し圧力を掛けさせて頂きました。』

『さらつと圧力って、あなた達はいつたい何者ですか？』

『秘密です』

委任状の件は石神島でお付き合いさせて頂いている、妹の姉だと言ったら快く話を聞いてくれたとの事らしい。

お袋達はなんですぐに信じるかなあ、まったく。

『隆羅様をこちらに連れて帰って来たいと申し上げたらお母様はとても喜んでいらつしゃいました』

クソ親父は、お袋が喜ぶ事なら絶対に反対しないからな。

そして彼女は、少し強い口調でこう言った

『何があつても一緒に帰っていただきます。』

腹がたった、俺の意思なんかまったく無視して無理やりにも事を起こそうとしている事に。

あのクソ親父と同じ事をしようとしているこの人に対して。

実家にいる時も、特にやりたい事もないままフリーターをしていた。そしてある日、親父が勝手に就職先を決めてきたのだ。

今回の様にバイト先に手を回し俺をクビにして。

親父のやり方にキレて俺はありったけの金を集めて家を飛び出したのだ。

『自分だけの力で生きてやる』

『お前に何が出来る、絶対無理だ。馬鹿者が』

『やってやるよ』

そして、東京から2000キロ離れたこの島に辿り着いたのだ。

彼女に告げた。

『ふざけないで下さい。俺は何処にも行く来はありません』

そう言って部屋を飛び出した。

『しかたない。それじゃ海ちゃんでも探しに行ってみましょう』

内地へ - 2

その頃、海たちは街中のアーケードを抜けた所にある甘い物大好きな女の子御用達のバニラハウスに向かって歩いていった。

『海ちゃんて兄弟いるの？』

『3人姉妹だよ』

そんな話を話しながら歩いていると。

『いたいた、海ちゃんお久しぶり』

潮さんが手を振りながら海に微笑んだ。

『えっ？ 潮お姉ちゃん、どうしたの？ 突然』

『はじめまして、私、海ちゃんの友達の睦月美夢って言います』

美夢が潮に自己紹介をして頭を下げた。

『ハイ、はじめまして海の姉の潮です。宜しくね』

『ねえねえ、海ちゃん。お姉さんて、すごく綺麗な人だね』

『あらあら、ありがとう。私、素直な子大好きよ。これから何処かに行くの？』

『あそこにある、バニラハウスで甘い物を食べに行こうかと』

『じゃ、お姉さんがみんなにご馳走してあげる、その代わり一緒にさせて頂戴ね』

『やった！ ラッキー。海ちゃんのお姉さんて、大人な感じで素敵だね』

『でも、お姉ちゃん怒るとものすごく怖いんだよ』

海が小声で言った。

『そう言えば、如月先輩も海ちゃんが怒るとすごく怖いって言うだけ』

美夢がいらない事を言う。

『隆羅、クロス』

海がつぶやいた。

『ヘックシユン』

風邪でもひいたかな。

ここはアパートから程近い海岸。サウスウエストブリッジが良く見えた。

考え事をする時に良く来る場所だ。

防波堤の上に腰を下ろして海を眺めていると声がした。

『如月先輩』

自転車に乗った美夢だった。

『もうお開きか？』

『海ちゃんのお姉さんが来て、2人で話したいからって、それに時間も時間だしね』

空は、まだ明るかった。腕時計を見る。

『もう6時過ぎか石神島は日が長いからな』

『先輩はこんな所で、何しているのですか？』

『な〜んも別に』

『また、隠し事ですか？』

『そんなんじゃないって本当に、それにいつ俺が隠し事した？』

『海ちゃんの事とか、海ちゃんの事とか』

ふっと空を見上げると、影が見えた嫌な気がする。

あのサウスウエストブリッジの出来事が脳裏をかすめる。

嫌な予感は的中するもので、その影は美夢の真後ろに降りた。

『鍵を渡せ！』

『美夢、逃げろ！』

遅かった。美夢は手を掴まれてその瞬間気を失ってしまう。

そして影の足元に崩れ落ちた。

『鍵を渡せ！』

『美夢に手を出すなよ』

影が、足で美夢を抑えようとした瞬間。俺の頭の中で「バチン」と音を立てて何かが弾けた。

体が熱い。

体中がちぎれそうだ。

何かがものすごい勢いで膨れあがってくる意識が飛びそうだ。

必死に何とかしようとするがどうにも出来ない。

右腕を見るとタトゥーの様な模様が浮かび上がっていた。

何が起こっているのかまったく理解出来ない。

理解とかの問題じゃない、すでにそんな物何処かにぶっ飛んでいた。

でも、この感覚は前にも……

『うおおおおおおおお』

訳もわからず雄たけびを上げていた。

近くの街灯が、爆発する様に割れ。

影が苦しんでいる、何故だ？

頭が割れてしまいそうになり再び雄たけびを上げる。

『うおおおおおおおおお！』

ものすごい閃光が走り、凄まじい炸裂音が響きわたり離れた所の車のフロントガラスが割れ影が消し飛んだ。
次の瞬間。

「ドクン」と胸に激痛が走り意識が途切れた。

夢を見ていた。

子どもの頃、何処かの池のそばで泣いている女の子と何かを探している。

青い光。

女の子が笑っているように見える。

顔はよく分からなかった女の子の言葉。

『誰にも絶対に内緒だよ……』

そこで目が覚めた。

『ここは俺の部屋か？』

自分のベッドの上だった。

頭が割れそうに痛い起き上がろうとすると体中に激痛が走った。

『痛つてえ、何なんだ』

意識がはつきりしてくる。

『そう言えば美夢が、美夢』

『まだ、起きちゃ駄目！』

ベッドから立ち上がろうとすると海に止められた。

『彼女は大丈夫ですよ。ちゃんと家にお送りしました。気を失っていて何も覚えてないようでしたけど』

その静かな声は潮さんだった。

『何があつたのですか？ 私たちが行った時には2人が気を失って

倒れていただけでしたけど』

影が現れてからの事を全て話した。

しかし、頭の中で何かが弾けてからの記憶はとても曖昧だった。

『影が言っていた鍵って何ですか？』

この際、全て聞いておこうと思った。

『如月君は、海から何処まで聞いているのかしら』

『水の精・門番・鍵を落とした事、それと鬼に狙われているくらいかなあ』

分からない事だらけなのである。

潮さんが優しい声で話し始めた。

『私たちが水の精であることは、知っているのね。この事は誰かに話した？』

『いいえ、誰にも。話したところで誰も信じてくれないでしょう。』

『ありがとう。あなたは信じてくれるのね、優しいんだ。』

『でも、水の精って』

『如月君も聞いた事があるでしょう。人魚・龍・河童、全て水の精、水の妖かし。セイレーンとかライン川のローレイも仲間みたいなものかなあ』

『そして、私たちは人の世とあの世を結ぶ門番の一族』

『門は、いつたい何処に在るのですか？』

『その門は、何処にでも在って、何処にも無いものよ。水はあの世の通り道って聞いた事は無いかしら水さえあれば、門は何処にでも現れる』

『あれですか、お盆に海に行くなってやつ』

『それもその1つ、お盆には門が開きやすくなるから』

『その門の鍵が、今、あなたの体の中にある』

『俺の体の中に？ まさか、何故？』

『それは、事故と言うか、偶然と言うか。海ちゃんが、鍵を運んでいるときに落としちゃって、たまたま下にあなたがね』

『ねって。それって、あの水色の光の玉……』

潮さん人の話を聞いています？ 俺の事なんかお構い無しに潮さんが話を続けた。

『あなたの体の中の鍵で門を開けてしまうと完全にあの世と繋がってしまふ。そうなれば人間の世界は地獄と化してしまふの。それを企んでいるのが鬼と呼ばれる者たちよ。そして、あなたを狙ってきた影は鬼が使う使い魔。鬼は陸上の動物を使い魔にする事が出来るの。多分あれは元々コウモリね。ここからが、如月君あなたの体について。すこし、あなたの事を調べさせてもらったわ。あなたの体には退魔師の血が流れているのそれも少し特別な退魔師の末裔なのよ、あなたは』

『俺が退魔師の末裔、そんな冗談みたいな話、聞いた事ないですよ』
『冗談じゃないわ、あなたの名前の「羅」の文字、それは代々受け継がれてきた文字、もちろんお母様の名前にも含まれている。少し特別なつて言うのは、あなたの一族は鬼の力で鬼や妖かしを封じている、簡単に言うると退魔師の血じゃなくて鬼の血が流れているの』
『俺の体に鬼の血が』

さらに分らない事が増えてきた。

『鬼の力を発動させると体に文様が現れる事、このくらいしか私たちにも分からなかった。鬼の力は全てを燃やし尽くす地獄の業火。そして私たちの力は業火を消し去る水の力。そして二つの力は決し

て交わらない。しかし、今あなたの体の中には、鬼の力と水の力が一つの場所にある』

どれだけ説明されても判らない事だらけだった。

『これはありえない事なの。あなたは特異体質なのかも……今のあなたには力を制御できていない。もし力を全て放出してしまえば廃人が死が待っている。今回は、あなたの中の鍵の力が相殺しあつてこれだけで済んだけど、非常に危険で不安定な状態なの』

そんな話を話されてもいまだにピンとこない。
俺にどうしろと言うのだ、俺自身の力でどうにかなる問題じゃないだろ。

奥歯をかみ締めた。

『鍵を取り出す方法は無いのですか？』

『それも、今は解らないわ。普通の人なら鍵に触れた時点で死んでいる。たとえ鬼の力があつてもただじゃ済まない筈なの』
理解の範疇を超えていた。

判るといえば普通に暮らし普通に生きてきたそんな俺が周りの人間を大切な仲間を巻き込んでいる。

俺の所為で……揺れていた。

『後悔しているのね、あの子を巻き込んでしまった事。それはあなたの責任じゃないわ。でもここにいれば、また同じ事が起こる可能性はある』

潮さんの言葉が決め手となった。

「俺はここに居てはいけない存在なのだと」

彼女たちに従う。今の俺にはそれしか出来なかった。

ひと通り話し終わると『クウ』海のお腹の虫が鳴いていた。
緊張感がない奴だな鼻で笑ったら「ゴフツ」と殴られた。

『あらあら、うふふ』

潮さん笑ってないで何とか言ってください。

『仲が良いのね』

『コンビニで食べ物、買ってくる』

そう言い、海が部屋を出ようとしたので『しょうがねえなあ』と言
いながら財布を渡した。

そして、すっかり体や頭の痛みが無くなっているのに気付いた。
潮さん曰く、水の力（鍵）にはヒーリングの力もあるとの事だった。
体の痛みも無くなったのでシャワーでも浴びようかと思い。
起きて歩き出すと潮さんが忠告してきた。

『体に文様が出ている時は、水に触っちゃ駄目よ』

『はいはい、分かりましたよ』

『本当に分かったの？』

『何がですか？』

『行つてらっしゃい、うふふ。体に教えないと駄目なのかしら？
如月君て』

シャワーを浴びた瞬間、全身にスタンガンも真つ青なくらいの電撃
が走る。

薄っすらと文様が残っていたのだ、軽く意識が吹っ飛んだ。

『だから言つたのに力が放出するって。それと放出し過ぎると死ん
じゃうからネ』

そんな事言つてないでしょ、まったく。

『でも、如月君で可愛い、うふふ』

って何がですか……

『「あれも」それと、しばらく私もここに住むからヨロシクね』

そう感電して吹っ飛んだ俺を、運び体を拭いてくれたのは潮さんだ
った。

『感電？ そんな事、ありえるはずが無い』

潮さんが隆羅に聞こえない様に呟き唇をかんだ。

内地へ - 3

数日後、俺の職場だった居酒屋で送別会が行われた。

店長と美夢には、家庭の事情で帰らなければならなくなったと説明した。

潮さんも誘ったのだが……

『私、ちよっとした有名人だし仕事があるからパスさせて頂戴』
と不参加だった。

『おす！』

『先輩！』

手を少し上げ美夢に軽く挨拶をすると飛び跳ねながら近づいてきた。
『先輩、体は大丈夫なのですか？ 雷が落ちたらしいですね。気が付いたら家で寝ていてビクリしちゃいました』

『お前こそ体なんともないのか？』

『はい。私、体だけは丈夫ですから』

『俺もだ』

2人して笑う美夢が無事で本当によかった。

ここでも海は大人気だった、海の周りに人だかりが出来ている。
送別会と言う宴会は盛り上がり皆楽しそうにしていた。

今日の主役は一応俺だぞそんなドウでも良い事を考えていると、いつに無くハイテンションな美夢が俺にべったりくっついて来た。

『相変わらず美夢ちゃんは、先輩大好きっ子だね』

姉妹店の女の子が言った。

『如月さんは、どうなんですか？』

『どうって言われても、こいつは妹みたいなもんだから』
楽しく話をしているとあつという間に時間が過ぎていった。

『そろそろ時間も時間なのでこの辺で閉めたいと思います』

『……如月君、内地に行ってもがんばってください』

閉めの挨拶はオーナーだった。

さつきまで笑っていた美夢が泣きじやくりながら抱きついてきた。

『私……グシュ……先輩の……グシュ……事がグシュ』

殆ど言葉になつていなかった。

しゃくり上げながら泣いていたが酒が入ってるせいもあるのだろう、しばらくすると眠ってしまった。

『おい如月、ちゃんと美夢ちゃん送れよ』

『ヘイヘイ』

美夢は俺の背中で気持ち良さそうに寝息をたてていた『好きでふ』意味分らない寝言を言いながら。

出発は翌日の午後だった。

送別会の前に潮さんに確認をしておいたのだ。

『明日よ、明日の午後』

『明日ってなんでそんなに急に』

『善は急げって言うでしょ、文句言わない!』

『何も準備していないですよ』

『ノープロブレム。着替えだけでいいから』

『アパートはどうするんですか? 俺の荷物まんまだし』

『モーマンタイ。ここは水無月家が管理します。ちようどこんな島にも部屋欲しかったしね、鳥小屋みたいに狭いけど』

『鳥小屋って……』

猫たちは元から自由に出入りしていたから問題ないだろう。

見送りはするのもしられるのも嫌なので出発前に居酒屋の前で別れる事にした。

美夢の目はもう既に真っ赤だった。

『先輩のデカプリンや賄いもう食べられないのですね』

『また、作ってやる必ず。ほら、指切り』

美夢の頭を撫でながら言った。

『先輩、子どもです』

『お前もな』

「さよなら」は言わない。

ここが俺のホームだと思っっているから。

『じゃあ、行つてきます』

そう言つてみんなと別れた。

タクシーに乗り、空港までと言おうとして潮さんに遮られた。

『ターミナルまで』

『ターミナルつて港ですか？』

今日、船なんか出ていたかな？

離島に住んでいる故に大きな船の出入りを把握していないと商売に支障をきたすのだ。

『行けば分かるわよ』

潮さんがそんな俺の不安を笑い飛ばした。

石神港ターミナルに着くとそこには馬鹿でかい客船が停泊していた。

『なんだ、こんな大きな船見た事無いぞ』

『東京まで行かつて言うから、ちよつと寄り道してもらったの』

『ちよつと寄り道つて、あなた達はいつたい』

『それは、ヒ・ミ・ツ』

潮さんが嬉しそうに口到人差し指をあてた。

『俺、船苦手なんですけど』

『男の子がグズグズ言わない。可愛いかったけどね、うふふ』

『マジ、勘弁してください』

海は何も言わず、俺の腕にいつまでも抱きついたままだった。

『確実に迷子になるな』

それくらい大きな船でクルーは日本人が殆どだけとお客さんは外国人ばかりだった。

デッキにでて海を見ていた。

何日くらいで着くのだろう、俺が石神島に来た時も船だったけど、本島経由で1週間くらい時間がかかった気がするのだが。

『そんなに不安な顔をしなくても大丈夫よ』

不意に横から声がした、潮さんだった。

『鬼たちも海の上では襲って来ないわ。それに、あなたが影を消滅させたから退魔の力があると分かっているはず、だからしばらくは安全よ』

『海はどうしているんですか？』

『部屋で寝ているわよ。心配？』

『いや別に』

『素直じゃ無いんだから』

そんな事を言いながら潮さんは仕事があるからと言い戻っていった。船旅はとても快適だった。

何より色々な事を見つめなおす時間が出来た。

俺は1日の大半をデッキのサマーベッドで過ごしていた。

いろいろな事、主に過去の事を考えていると時々断片的に記憶がフラッシュバックする。

「校舎裏」

「不良グループに囲まれている」

「突然割れるガラス」

「白い部屋、病院か？」

覚醒したあの時の感覚が甦りゾツとする。

幼い頃、婆ちゃんが、俺の額に指を当て何かをつぶやいている。

「お前は、出逢い必ず助けてくれる」

「愛は力なのよ、宿命は変えられない、でもね……」

「まだ、お前に難しいかな」

霞がかかっているばかりとしか思い出せない。

バイクで事故に遭い、病院に担ぎ込まれ。泣いているお袋を見た瞬間。重傷の俺を殴りつけたクソ親父の事など、とりあえずいろんなことが頭に浮かんで消えていく。

そして、これからの未来の事も考える。

海の事・石神島の事・行く先の事、不安が無いわけじゃない。
でも今、考え込んでも仕方が無いのだ。

何とかなるさ、島で教わったのだ。

『ナンクルナイサー』

数日が過ぎ東京が近づいてきた。

あれは横浜の、みなとみらいの観覧車かな？

内地へ - 4

下船すると黒塗りの高級車が待ち構えていた。
車に乗せられ横浜方面に車は走り出す。

ここは、どこら辺なんだ？

あまり横浜方面の地理は詳しくないのだが。

あれ、ここって？

普通の鉄筋2階建てのアパートの前で車が止まった。

変わった所と言えばアパートの向こうに大きな森がある事位だろうか。

『ここで、生活してもらうから良いわね』

『ここら辺で、横浜の小倉山じゃないですか』

『そうだけど、どうして？』

『いや、前に半年くらい小倉山に住んでいた事があるので』

『それじゃ安心ね。多少地理も分かるでしょうし』

部屋は2階だった、部屋に入るとガランとして何も無いワンルームだった。

『あの、何も無いんですけれど』

『あつ、忘れていたわ。明日、海と買い物して来てちょうだいね。』

今日は、とりあえずこっちへ』

アパートを出て裏手に案内される。

そこには高い塀がありすぐ近くに大きな門があった。

門をくぐり森の中を歩いて進んでいく。

『私、先に行くね』

『転ばないようにネ』

海が言い走りだすと潮さんが子どもに言い聞かすように声をかけた。

『そう言えば、如月君もといター君は海とどこまで行っているのかしら』

『潮さん、ター君は却下です』

『そんな事、私に言っていていいのかなあ？ この写真を海に見せちゃうぞ。いいのかなあ』

その写真は、俺が感電してプチ失神した時の生まれたままの格好で白目をむきピクピクしている写真だった。

『マジで勘弁してください、お願いします』

顔から血の気が引いて泣きそうになった。

『ター君はヘタレだもんね、うふふ』

『黙秘しますって、何もあるわけ無いじゃないですか』

『本当にヘタレね、あんな可愛い子がそばに居るのに』

『はいはい、どうせヘタレですよ。俺は』

視界の中に大きな黒い動物が入ってきた。

『キルシュお出迎えご苦労様』

『潮さん。猫にしてはデカくないですか？』

『サーバルキャットよ。黒くされちゃった』

さらっとすごい事言っていないですか？

豹柄が黒くなっただっていったい何が……

でっかい黒猫の横を通り過ぎようとした時に『ヘタレ』と声がした。

『コイツか？』

猫にヘタレ呼ばわりされる覚えは無いので軽く鼻で笑うと飛び掛ってきた。

押し倒されてマウントポジションを取られた。

『キルシュ！ 海の大切なお客様よ。止めなさい』

『後で、ツラかせ』

潮さんが制すとキルシュが耳元で囁いた。

20分くらい歩いただろうが目の前が急に開け、そして目を疑った。目に飛び込んで来たのは何と表現すればいいのだろう、そう「水の宮殿」だ。

とても澄んだ大きな池がありその上に、ガラス張りの2階建てくらいの大きな四角い建物が建っている。

建っていると言うより浮かんでいると言った方が正しいかもしれない。

池のほとりにはカキツバタかハナシヨウブが植えられていてとても幻想的である。

その隣には半地下の建物があり、その建物の屋根の部分にも綺麗に手入れされた芝が敷き詰められていた。

多分ガレージか何かだろう。

『あの、こんな事聞いて良いのか分からないのですがご両親もいらっしゃるのですか』

緊張してへんな日本語でしゃべっている。

『ター君、緊張しているのとても変よ。父はとても忙しい人だから滅多に屋敷には顔出さないわ。母は海が幼い頃に亡くなっているの』

一般ピープルがこんな所に連れてこられて緊張しない訳がないのだ。

『あまり気にしないでね、もう昔の事だから。ここには私たち3人姉妹しか暮らしていないわ。そうそう、ター君にはここも案内しなきゃ』

ター君はやめて下さいって何度も言っているのに……

潮さんに連れて行かれたのはあの半地下状の建物だった。

中に入るとそこはメチャメチャ広いガレージになっていた。

ガレージと言うより車の展示場の様と表現した方が良いかもしれない。

ぱつと見た感じヤンチャな車ばかりの気がした。

『なんで俺をここに？』

『ター君はこういうの好きでしょ。島のポンコツもかなりいじってあったじゃない。それに何度もバイクやカーレースで入賞しているみたいだし。よければ好きに使っていいわよ。キーは付けたままでから、ガソリンは満タンで返してね。それと屋敷内の設備は自由に使ってかまわないから』

『なんでそんな事まで、あなた達はいつたい』

『言っただじゃない。ター君の事、調べさせてもらったって』

『潮さんにかかると丸裸ですね』

『そう、スッポンポンよ』

潮さんの視線に気付きたじろいだ、って何処見ているんですかまったく。

『本当に、マジ勘弁してください』

バイクやカートのレースは子どもの頃から、クソ親父に無理矢理やらされていたのだ。

年齢詐称までしてかして。

親父は若い頃かなりヤンチャだったらしく、どこぞの族のヘッドまでやっていたらしい。

そして、車やバイクのレースにのめり込んでいて俺も出場させられていたのだ。

入賞しなければ小遣いは遣らないと言う脅しを掛けられて。

クソ親父は今でもヤンチャなのは変わり無く『今でも、ワンコールで、百人以上は集まるぞ』なんて平気で言いやがるくらいだった。その後で広いお屋敷の一室に案内される。

『今日は、ここで休んでね、用があるのならこれを鳴らしなさい。

明日の朝、迎えをよこすから』

と言われ小さなベルを渡された。

こんなのアニメの世界でしか見た事無いぞ、メイドさんでも出てくるのかな。

まあ、そんな事はどうでも良いのだ。今日は疲れたから眠る事にした。

『如月様。潮様がお呼びです』

翌朝ノックの音で目が覚めた返事をして着替えてからドアを開けるとそこにはメイドさんじゃなくて黒いスーツ姿の男の人が立っていた。

『潮様がお呼びです。こちらへどうぞ』

「水の宮殿」の中の廊下を黒服の人に連れられて歩いていると、後

ろの方から誰かが走ってくる気配を感じ振り返る。

いきなりドロップキックが飛んで来た。

吹き飛ばされて床に頭を打ち付ける。

『痛っ……っ』

呻きながら見上げると海より一回り小さいツインテールの女の子が仁王立ちしていた。

『お前なんか、海お姉ちゃんは渡さないからな!』

『凧なぎお嬢様も、一緒に』

黒服が何事も無かったように言った。

大きな食堂に通されると、そこには潮さんと海が座っていた。

凧とか言う女の子は直ぐに海の後ろに隠れすこい形相で俺を睨みつけていた。

『あらあら、ター君は凧にすっかり嫌われちゃったわね。うふふ、

凧は海のこと好きだからね』

『そうそう、凧は一番下の妹よ。ヨロシクね』

朝食を済ませ、海と俺の部屋に必要なものを買いに出かける事になった。

『お金の心配なら要らないから海に任せなさい。ここまで無理矢理に連れて来たのだからこれくらいの事させなさい。分かった』

そんな訳には行かないのだが、潮さんに押し切られてしまった。

『それと海はすぐに迷子になるから気をつけてね』

潮さんに念を押された。

電車を乗り継ぎ秋葉へ向かう。

電化製品と言えば秋葉、秋葉と言えば電化製品なのだ。

昨今ではヲタクと言えば秋葉、秋葉と言えばヲタクに変わりつつあるが今は関係の無い事だ。

大型店で色々と物色して回る。

『隆羅、これがいいよ』

海が指差したのは、特大の液晶テレビだった。

庶民の俺にはまったく着いていけない感覚だった。

必要最小限の冷蔵庫・テレビ・洗濯機・レンジ・掃除機そして、ちよっとだけ上等のパソコンを購入する事にする。

プチ秋葉系にはパソコンの無い世界など考えられないのだ。

庶民根性丸出しで値切りまくって支払いは海にお願いする。

例の黒いカードを海が出したとたん店員の顔色が変わり。

すぐに店長らしき人物が現れて対応する。

『早急にお届けにあがりますので』

住所すら聞かなかった。

その後、細々としたものを買ったため百貨店に行く。その対応もほぼ同じものだった。

水無月家って何者なんだ？ 謎は深まるばかりだった。

そして男の買物なんてあつという間に終わってしまった。

『時間が空いたから、近くに動物園があるけど行くか？』

海に聞くと嬉しそうに頷いた。

歩いて動物園に向かう、着くまでに何度と無く海を見失いかける。

潮さんの言葉が浮かんできた。

「すぐに迷子になるから」

その時は子どもじゃ無いのだからと軽く考えていたが違うようである。

園内は平日だと言うのに混んでいた。

『しょうがねえなあ、ほらっ』

手を出すと海は少し考えて端っこを掴んだ。

『それじゃ、迷子になっちゃうだろ』

手を握り直すと海の顔が見る見る真っ赤になった。

そんなに照れられると、こっちまで恥ずかしくなってきた。

平静を装って動物を見て回る。

お昼近くになったので園内のファーストフードで食べる事にする。

無難にハンバーガーとポテトのセットを2つにウーロン茶とコーラ

そしてチョコレートのシェイクを1つ注文した。

海は初めてらしく最初戸惑っていたが、食べ方を教えると美味しそうに食べ始めた。

甘い物好きな海はシェイクがお気に入りになったらしい。

口元にソースが付いていたのでテーブルの紙ナプキンで拭いてやると思議そうな顔をしながら顔を赤らめた。

俺は海の顔を見ながら、これからの生活の事を考えていた。

生活する上でお金は必要不可欠でその為には仕事を探さないと家賃も払えない。

昔、石神島で世話になった先輩の言葉を思い出した。

「東京に戻る様な事があれば、必ず連絡をしる。約束だからな」

それは、多分仕事の話だろうと見当は付いた。

先輩は東京に戻り飲食店を経営しているのだ。

ちよつと顔を出してみるかな。

海に少し用事が出来た事を告げ、少し早めに動物園を後にする。

内地へ・5

浜木町の駅で降り北口から徒歩5分程度で店の前に着いた。

ランチタイムは終わっているが連絡を入れておいたので居るはずだ。店は雑居ビルの2階にあった。

『五月先輩、お久しぶりです』

『如月か、よく来たな。いつこつちに戻ってきた。』

『えっと、2日前です。』

『そうか、こちらの綺麗なお嬢さんは？』

『ええっと、自分のアパートの管理人さんです』

『管・理・人の、水無月 海です。はじめまして』

海の機嫌が悪い、なんだ？

『相変わらずお前は歯切れが悪いし、にぶチンだなあ。管理人さんね、なんで管理人さんと一緒なんだ。まあ細かい事はいいや』

変わらず大雑把な先輩だった。

『とりあえず、明日からでも来いや』

即決だった。コーヒーをご馳走になりながら少しだけ話をして、出勤時間だけ確認して店を後にした。

ちよっと通うのには遠いけれど乗り換え1回だけだし、まあ何とかなるだろう。

時給いくらのだろう、そんな事を考えながらアパートへ帰った。

海と別れ部屋に入ると見事なまでに家電たちは全て綺麗にセッティングされていた。

しばらくすると黒服の人が呼びに来た。

応接間に通されると潮さんが微笑みかけてきた。

『デートはどうでしたか。手をつないで2人とも真っ赤になって初々しい事、うふふ。』

『デートって、見ていたんですか？』

『そんな野暮な事はしないわよ、遠くから少しだけね』

この人達はまったく。

『潮さん、仕事を決めてきたのですけれど、家賃はどうすればいいですか？』

『家賃ね、別にいいんだけど』

『そんな訳にはいきませんから』

己の事は己で何とかする。如月家の家訓だった。

『ター君のそういう真面目な所。大好きよ。光熱費その他込みで払えるだけ支払いなさい。支払いは給金を貰ってからでかまわないから。食事はまだでしょ今日はこっちで食べていきなさい。海も喜ぶからネ。あと、これは命令よ。数日中に必ず実家に顔を出す事。分かった』

『ハイ、わかりました。ありがとうございます』

海の機嫌は相変わらず直っていなかった。食事中もこっちを見ようとしなかった。

アパートへ戻るとドアの前でアイツが待ち構えていた。

キルシュだ。

『ついて来い』

あくまで命令口調で近くの公園に連れて行かれる、遅い時間なので公園には誰もいなかった。

『何の用だ』

俺から切り出した。

『貴様から、綺羅きらの匂いがする。何故だ』

『キラ？ 誰だそれ』

『退魔師だ』

退魔師？ キラ？ 少しだけ考える思い当たる事があった。

俺は婆ちゃんの事を「キラ婆ちゃん」と呼んでいた。俺が退魔師の末裔なら答えは1つしかない。

『婆ちゃんの事か？』

『やはり、貴様も奴らの仲間か！』

叫びながらキルシュが襲い掛かってきた。
必死に逃げ回る。

『逃げ回るな。戦え』

冗談じゃない、どのくらい逃げ回っただろうかネコ科の動物から逃げ回れるわけも無くボロ雑巾の様にされ息が上がっていた。
不意に通りの方から声がした。

『隆羅いるの？ あの馬鹿、何処に』

海だった。やばい見つかる。

その瞬間、頭で考えるより早く体が動いていた。

キルシュに向かって走りだし左手で殴りかかり左腕を噛ませる。
瞬時に右腕でキルシュの首を押さえ込んでありったけの力で近くの茂みに飛び込んだ。

『クウツ』

左腕に激痛が走る。奥歯を噛み締め必死に声を押し殺した。

『ここら辺だと思っただけだな』

海はしばらく探していたが公園から出て行った。

キルシュを押さえ込んでいた右腕を離し激痛の走る左腕の傷口を押さえる。

骨には異常なさそつだが少し傷が深かった。

『貴様、何故わざと』

キルシュが睨みつけてきた。

『お前は、海の泣き顔が見たいのか！』

強い口調で言う。返事はなかった。

公園の水飲み場で傷口を洗い破れたシャツを使って止血する。
ついでに汚れた顔を洗うため頭から水をかぶる。

今、アパートに帰る訳には行かない海がまだ探しているはずだ。
ベンチの横で地面に座り左腕をベンチに置き心臓より高くして止血しながら休んでいるとキルシュが近づいてきた。

『大丈夫なのか？』

『多分、少し休めば大丈夫のはずだ』

確信はないが多少の自信はあった。

それは、島で影に襲われた時の体の痛みは数分で治っていった。
今は俺の中にあると言う鍵の力を信じるしかなかった。
そして少しずつキルシュが話し出した。

昔、無理矢理に使い魔にされ綺羅婆ちゃんにボコボコにされ。

逃げ回り生死の境を彷徨っている時に幼い頃の海に助けられキルシュと言う名を貰った事。

その事に報いる為に今は水無月家を守っている事を。

キルシュが俺の顔を見た瞬間笑い出した。

『俺の顔がどうかしたか？』

『いや、顔じゃなくその額だ。そんな状態で馬鹿かお前』

猫が大笑いしている姿は見ていて気持ちの良いものじゃなかった。

『お前、暴走した事があるのか？』

キルシュの言っている意味が解らない。

『島での事か？ あれが暴走ならそうなのだろう』

『言い方を変えよう。力が開放した事があるのか？』

『ああ』

『その状態で力が開放してよく生きていたな。普通なら死ぬぞ』

『何なんだいったい、判るように説明しろ』

『お前、俺や動物の言葉が解るだろうそれは鬼の力だ。強い力を持った鬼だけが動物と会話して使い魔の契約をする。お前のポテンシャルは推測だが異常なのだ。お前の額に封印の文字がある水の梵字か何かだろう、強い力は簡単には制御できない。ちよつとした感情の高ぶりで暴走する事がある。だから封印されたのだろう、多分、綺羅だな』

その話を聞いた時、今まで点だった物が線になり繋がりは始めた。
幼い頃、俺の額に指を当て何かを呟いている婆ちゃん。

高校の校舎裏で不良に絡まれて力が暴走しガラスが割れ、その後病院に担ぎ込まれた。

それ以上は思い出せない、考え込んでいるとキルシュが話しかけてきた。

『今のお前には誰も守れない。俺には封印を解く事は出来ないが俺様が何とかしてやる。覚悟しておけよ』

俺もキルシュに言っておく事があった。

『今日の事は絶対に海に隠し通せ。いいな絶対だぞ』

『しかし、お前はそんなボロボロで隠しとおせるのか』

『大丈夫だ、慣れている。子どもの頃から怪我なんかしてお袋に心配掛けると親父に殴られたからな大抵の事は隠し通した』

『そんな父親がいるのか本当に？』

怪訝そうな顔でキルシュが聞いてきた。

『居るさ、バイクで事故を起こした重傷の俺を殴り飛ばすくらいだ』

『そう言えば、無理矢理に使い魔にと言っていたが望んで使い魔になる奴なんて居るのか』

『人間を恨んでいる動物なんていくらでもいるからな』

『そうか』

それ以上は何も聞けなかった。

翌朝。まだ、左腕にはまったく力が入らなかったが傷はすっかり消えていた。

証拠隠滅も完璧だった。

ほっと安心して気を抜いた瞬間、顔面にパンチが炸裂した。

『隆羅の、馬鹿！ ヘタレ！』

海だった、まったく居る事に気が付かなかった。

目に涙を浮かべて真っ赤な顔で部屋から飛び出て行った。

起きてバイトに行く準備をしているとドアをノックする音が聞こえた。

ドアを開けるとキルシュが申し訳なさそうに座っていた。

『すまない昨夜、血の匂いをさせているのを潮に感づかれ洗いざらい白状させられた。その話を少し海に聞かれたらしい』

『潮さんも、お前と話せるのか？ あつ、秋葉や動物園で俺らを監視していたのはお前か』

『ああ、俺様は水無月家に使える身、潮には絶対服従なのだ。』

海があゝの状態になるともう手が付けられないらしい。

時間が無かったのでこの話は俺に預けさせてもらった。

初出勤に遅刻するわけに行かず。ギリギリで間に合った。

『おはようございます。先輩』

『おはよう。なんだお前の顔は喧嘩でもしたのか。ああ、彼女に殴られたとか？ お前はヘタレな所あるからな』

本当にこの人は変な所だけ感がいい。

『先輩、あのでっかいビルは何ですか』

誤魔化す為に話を変えた。

『あれは、水神みなかみコンツェルンのビルだよ、テレビで見たこと無いのか？』

『自分はテレビ見ないですし、パソコンと海さえあれば島では十分でしたから』

拳を握りガッツポーズをする。

『お前は昔から、人が知らない事は詳しくくせに普通に知っているはずの事には疎いからな』

『如月、この間連れて来た娘「水無月」とか言っただけ、水神の総帥も確か水無月……』

『いらつしやいませ』

ランチタイムが始まりこの会話は途切れた。

初仕事も何とか終わり帰りの電車の中、海の事を考えていた。

明日の仕事は無理を言っただけランチタイムは休ませてもらいたい方からの出勤にもらった。

買い物を済ませて帰るとアパートの前にキルシュが居る。

海の事だろうと思った。

『明日、屋敷のキッチンを使いたいから潮さんに言っておいてくれ。それと迎え宜しくな、屋敷内の事はまったく分からないからな。海の事は俺が何とかしてみる、今日は疲れているからこれで勘弁してくれ』

そう言っでキルシュと別れた。

翌朝、キルシュの案内で屋敷内のキッチンに向う。

迎えの時間だけ確認して作業を開始した。

ココア生地を焼き上げチョコレート味のスポンジを作る。

ザーネクリームを作りクリームとサワーチェリーを挟み込みこんで残りのクリームで仕上げて、チェリーとチョコレートフレークでデコレーションし冷蔵庫で落ち着かせる。

その間に、片づけをはじめ。

そして、洗い物をしながら声を掛けた。

『風そこに居るんだろ』

俺がキッチンに入ってからずっと隠れて覗いていたのだ。

『お前が、海お姉ちゃんを』

風が俺の事を睨みながら言った。

『本当に申し訳ない。すまなかった、全て俺の責任だ』

誠心誠意謝った。

俺の反応に驚いたのか風はキョトンとした顔をしていた。

出来上がったケーキを切り分け皿に盛り付け。海に渡して欲しいと風に頼んだ。

『お前の為じゃないからな、お姉ちゃんの為に持って行ってやる』怒ってはいたが了承して貰えたみたいだ。

残ったケーキは、適当に処分して構わない事を告げ。迎えに来たキルシュとキッチンを後にし、俺はバイトに向った。

バイトを終えアパートに帰るとキルシュがアパートの前で待っていた。

部屋の方をキルシュが見上げる。

『誰か居るのか、海か？』

『少しいいか』

そう言いキルシュは歩き出しこの間の公園へ向った。

『お前、海に何をした。あんなに嬉しそうな顔あまり見た事が無い。どんな魔法を使ったのだ？ あの状態ですぐに機嫌が直るなんて考えられない』

『シュヴァルツヴェルダー・キルシュトルテ』

『何だ、それ何かの呪文か』

『俺が作ったケーキの名前だよ、そのケーキを風に乗って海に渡して貰ったんだ』

『そんなケーキで海の機嫌が直るのか？』

『ああ多分な、お前の名前と同じ呼び名のケーキだからな。日本での呼び名は「キルシュ」。お前の名前は海が付けたと言っていたよな、「キルシュ」は元々キルシュヴァッサーと言う酒の名前だ。幼い海が酒の名前を知っているはずが無い。海は甘い物好きだから「キルシュ」と言うケーキは食べた事があったのだろう美味しいケーキだからな。ただ、それだけだよ』

それだけで機嫌が直るかは俺には分からなかった。ただ、本当になんとなくそれでいい気がしたのだ。

『お前は何者なんだ』

『俺はただのヘタレだよ、カクテルバーでバイトした事があるから酒の名前には詳しいし、それにケーキ作りをする人間にとってキルシュヴァッサーなんて知らない奴は居ないからな。俺もそんなひとりだよ』

アパートに帰ると、海がニコニコして部屋の中に居た。

しかしこの部屋の鍵はどうなっているのだ？

俺のプライバシーは無いのか、でも海が笑顔ならそれでいい心からそう思った。

後日、キルシュの言っていた覚悟の意味を理解した。

不意打ちをしかけ襲い掛かってくるのだ、牙や爪は立てないがそれなりに衝撃はすごい生傷が絶えなかった。

その不意打ちは寝ているときでも関係なくやって来るものだから堪ったもんじゃなかった。

生傷が絶えないので心配する海には簡単に話をして了承をもらっていた。

夏休み - 1

新しい生活やバイトにも慣れ、ようやく落ち着いてきた。

世間では夏休みが始まり朝から、近所の子どもたちが騒いでいた。

今日も真夏日だった、俺はクーラーの効いた京浜東西線の電車に揺られていた。

電車を乗り継ぎ小武蔵浦谷の駅で降りる。

しかし暑い。

島の夏より暑いのではないのかアスファルトの照り返しがきついった。

『えっと、確かこっちで良かったはずだが』

俺が向っているのは自分の実家だった。

何故、迷いそうになっているかと言うと俺が島に居る間に引越しをしていたからだ。

1回しか来た事が無くおぼろげな記憶をたどって歩く。

しばらく歩くと前に日傘をさして白いワンピースを着てヒョコヒョコと体を左右に揺らしながら歩く女の子が歩いていた。

あの独特な歩き方、間違いないアイツだ。

『茉弥^{まや}！』

思い切って後ろから名前を呼ぶと女の子は振り返り、驚いて目をまん丸にして満面の笑顔で走り寄って来た。

『ええ、兄さま、兄さまだ、どうしてどうして？』

か細いハスキーボイスで腕に抱きついてきた。

『相変わらずだな、その呼び方』

『兄さまは、兄さまなのに』

プウと頬を膨らました。

この独特な歩き方をして、どこぞの御嬢様の様な呼び方で俺を呼ぶ女の子は少し年の離れた妹だった。

迷わずに家に着く事が出来た、俺の実家は普通の住宅街の中の一軒家だ。

玄関を開け家の中に入ろうとした時、お袋が抱きついてきた。

『タカちゃんお帰り』

お袋も相変わらずだった。

『お袋、ただいま』

『もう、ママかお母さんと呼びなさい、タカちゃん』

『お袋も、タカちゃんの呼び方止めてくれ、ハズいから』

『駄目よ。タカちゃんはタカちゃんだもん』

『茉弥と一緒にか？ お袋は幾つだよ、まったく』

『ペチン』

お袋にデコピンをされた。

『それ以上言ったら御仕置きよ、もう』

リビングでくつろいでいると茉弥がべったりくっついて離れようとしない。

『しょうがねえなあ。茉弥は本当に、甘えん坊だな』

『マーちゃんばかりズルイ』

お袋がそんな事を言っている。俺の横に来ようとするのを制する。

『親父は？』

『出掛けているわよ、心配』

『いや、会いたくないし』

『もう、そんな事言わないの、めっ』

「めっ」ってもう子どもじゃないんだから。

俺の家族はいつもこんな感じだった。

お袋はメチャクチャ童顔で天然系だし、いつも動き回っていてチッコイ体の何処にあんなパワーがあるのだろうと思う。

妹は、おっとり系で小さい頃、体が弱くいつも家の中で遊んでいた。遊び相手は俺ぐらいだったから、いつも俺にべったりだった。

親父はヤンチャの固まりで殆ど家に居ないし直ぐに殴る。

長男の俺は風来坊でヘタレ。
それが普通が変わっているか分からないが如月家ではこれがノーマルなわけだ。

久しぶりに家族がそろい（親父は居ないが）島での生活や仕事の事、こつちに戻ってきてからの事など質問攻めだった。

『マーちゃん、あのね、タカちゃん彼女が出来たらしいわよ。お姉さんがあんなに美人なんだからとても可愛い子なんでしょうね、きつと』

『兄さま、彼女見てみたい写真は』

『そうそう、タカちゃん写真くらい持っているのでしょう、早く出しなさい』

『いや、持っていないしそんな物』

『そんな物って彼女に失礼でしょ。めつよ、めつ』

そんな会話をしていてふつと思った、俺と海との関係って何なんだろう。

彼女？ 友達？ 鍵の繋がり？

どれも微妙だった。

出会った頃は敵意むき出しだったけど少しずつ心を開いてくれている。

俺も 最初はなんだコイツって感じだったが、海的笑顔を見ていると嬉しくなる。

これが好きと言う気持ちなのかと言うと違う気がする。

嫌いなんて事は絶対にありえないし。

まあ、気に入ってしまったという事なのかな。

近い様な遠い様な微妙で不思議な関係。

そう言えば、俺は海の事あまりよく知らないんだよな。

出会って4ヶ月くらいか海は俺の事どう思ってた何処まで俺の事知っているのだろう。

俺と同じような物なのかもしれない。

潮さんは全て知り尽くしていそうで怖くなり身震いした。

気がつくと横で茉弥がウトウトし始めた。

『マーちゃん2階で、少し眠りなさい』

『うん』

茉弥が頷いて2階へ上がっていった。

茉弥が2階に上がりしばらくしてから、少し真面目な顔をしてお袋が話し始めた。

『タカちゃん、少し変わったわね。大人になったと言うか、男の顔になってきた。』

少し間をおいてから真剣な目をして続けた。

『石神島で何があったの？ 水無月さんて水の力を持った人たちよね』

ドキツとした。やっぱりお袋もそうなのか？

どこかで信じたくなかったでも今は信じるしかなかった。この人も退魔師の一族なのだと。

俺と婆ちゃんが持つていて、この人が持つていない筈がなかったのだ。

俺も、きちんとお袋に向かい正座をして島であつた事を話した。

海に出会い、使い魔に襲われて力が発動して騒ぎになった事。

そして今、水無月家の近くで暮らしながら石神島で世話になった先輩の店で仕事をしている事。

鍵が俺の体の中にある事は伏せておいた。

理由は俺自身にも分からないでも、その事は話してしまつてはいけない気がした。

お袋に、俺も聞きたい事が沢山あるのだが何をどう何から聞いていいのか分からなく戸惑っていた。

『これを、タカちゃんに渡しておくわ』

それは長さ5〜6センチ直径は1センチ位の細い管の様な銀色のペンダントトップのような物で、表面には模様か文字のような物が黒

く彫られている。

『これは何？』

『これは「羅閃らせん」よ。代々家に伝わる家宝と言うか宝具ね。あなたは頭で理解するより実際に体験した方が早いでしょう、目を閉じなさい』

お袋の言うとおりに目を閉じると空気がピンと張り詰める。

『ドクン』

少し鼓動が高鳴る感じがして『ピー』と笛の音の様な音がして次の瞬間。

目を閉じているはずなのに目の前にいるお袋の映像が鮮明に浮かんできた。

『ママの姿が見えたかしら？ どんなに離れていても、たとえ地球の裏側にいても同じ事が起こるわ。今は、ママとタカちゃんを結んでいる。この笛はそう言う物なの』

『笛なんか吹いたら茉弥が目覚ますぞ』

『大丈夫よ、あなたにしか聞こえないものこの音は』

『俺にしか聞こえない？』

『そうよ、タカちゃんが吹けばママにだけあなたの映像と笛の音が聞こえる。何処にしようともね。この笛には、ママの気とタカちゃんの気が込められているの。だから、ママとタカちゃんにしか使えない。それとこの笛にはかなりの力が封印されていて魔除けにもなるの魔除けだけなら他の人にも有効よ』

『なぜ、そんな物を俺に』

『必ずいつか必要になる時が来るはずよ、だから』

お袋がチェーンを外して俺の首に掛けた。

『ごめんなさいね。タカちゃんは、もう知っていると思うけどママの一族は退魔師の家系なの。ママのお母さん、つまり、あなたのお婆ちゃんはすごい人だったわ。日本では屈指の退魔師よ。でも、ママにはそんな力はないの。まったく無いわけではないのだけど簡単なお払いくらいしか出来ないわ。だから、お婆ちゃんはママに詳し

い事は話さなかった。たぶん、普通の女の子として生きて欲しかったのかもしれない。だって普通の人には見えない異形の者が見えるなんて変でしょ。この笛にしたって2人の気の込め方さえ知らない。あなたが知りたいと思っている事に対してママは何も答えられないと思うわ』

そしてこう続けた。

『お婆ちゃんが居ない今、詳しい事を知っている人は誰も居ない。でも確かな事が1つだけあるのお婆ちゃんの口癖よ「愛は力なり」』

『LOVE IS POWERよ』

片手を前に突き出し拳を握りながら叫んだ。

そこに居るのは紛れも無く普段どおりの天然ボケのいつものお袋だった。

夕方、2階から茉弥がまだ眠そうに目をこすりながら降りてきた。

『あら、マーちゃんおはよー。じゃあ、みなでお買い物に行きましよう。今日はタカちゃんの為に腕を振るうわよ』

『みんなって、何で俺まで行かないといけない訳？』

『だって、荷物重いんだもの荷物持ちよ。今日はいっぱい買い物するから』

歩いて駅前の商店街に向う。

茉弥は俺の左手を両手で掴みニコニコしながら振り回している。

お袋が、俺の右手を掴もうとしたので振り払った。

『マーちゃんばっかりずるい、ママも、ママも』

膨れっ面をして大声をだす。本当にこの人は親なのか、まるで子どもだな相変わらず。

『しょうがねえなあ、もう』

恥ずかしさを堪えながら手を繋ぐと嬉しそうな顔で俺の顔を見上げた。

ハズい、ハズ過ぎる。

周りから見たらどう写っているのだろう。

お袋は小柄でメチャメチャ童顔だから「ん0歳まえ」には絶対にみえない。

3人で並んで歩いていても、どう見ても親子には見えないのだ。それも手を繋いで……

突っ込みドロコ満載な訳である。

こんな所、潮さんにでも見られたら大変な事になるぞと思いながら辺りを気にしてしまう。

判る筈も無いのに。

その夜は久しぶりに3人で食事をする、お袋の手料理は絶品だった。料理の腕前はプロ顔負けなのである。

翌日も朝から仕事があるので終電に間に合うように実家を後にした。やはり、潮さんに知られていた。

『ラブラブね、両手に若い子をはべらして海に報告しなきゃ』

『そんな誤解を生むような真似止めてください』

遅かった。海にボコボコにされ誤解を解き機嫌を直すのに数時間が必要なのだ。

夏休み - 2

実家に顔を出した翌週の日曜日、仕事が休みという事もあって俺は惰眠をむさぼるはずだった。

幾度とない深夜のキルシュの襲撃、そして昨夜は帰宅途中に不意打ちを掛けられた。

それも牙や爪をむき出しで。

『大怪我したらどうするつもりだ!』

『同じことをしていたら駄目なんだ、レベルアップだよ』

キルシュが笑いながら言いやがった。

そんな事があつて疲れきっていた。

朝早く誰かが、ドアをノックする音で起こされた。

『どちらさまですか?』

『タカちゃん、おはよう』

『兄さま、おはようございます』

寝起きで目をこすりながらドアを開けるとそこにはお袋と茉弥が立っていた。

お袋が部屋の中を見て固まっている。

『マーちゃん、見ちゃ駄目』

お袋が茉弥の目を手で塞いだ。

ボーとした頭で振り返るとそこには海が寝ていた。

俺の格好はTシャツにパンツ1枚だった。慌ててドアを閉める。

まだハッキリしない頭をフル回転させた。

そう言えば昨夜、俺の事を心配して海が部屋に来て傷の手当てをしてくれて俺は疲れてそのまま寝てしまったのだ。

それからの事は覚えていなかった。

とりあえず海を起こす。もう、どうしようもないので2人を部屋に入れ一応事の顛末は説明したけど、どう思つかはお袋任せな訳だ。

『で、今日は何しに来たんだ？』

『タカちゃん、その前にちゃんと紹介しなさい』

『彼女が、海。前にお姉さんの潮さんには会っているよな』

『海、こっちがお袋と妹の茉弥だ。以上』

『もうタカちゃんは。はじめまして、私が隆羅の母の沙羅です。海ちゃん宜しくね。でも、海ちゃんてすごく可愛いよね、タカちゃんにはもったいないわ』

『で、何しに来たんだ？』

『デートよデート、美少女3人とデート』

『少女3人って？ 1人は少女じゃないだろ』

『ペチッ』

デコピンを食らった。

『さあ、準備して行くわよ。横浜に、ヨ・コ・ハ・マ』

小倉駅に向かいそこから西横線に乗り横浜で乗り換えて桜本町で降りる。

電車の中もお袋の全開パワーは炸裂していた。

『海ちゃん、ご両親は？ そうなの。じゃあ、今日から海ちゃんも私の子どもね。だってタカちゃんの大切な人だもの』

殆ど海の話なんか聞いていなかった。

『キヤア、可愛いもう我慢できない。如月ママと呼んで』

叫びながら海に抱きつく、海は固まっていた。

『お袋、恥ずかしいから騒がないでくれ』

『だって、嬉しいんだもん』

今のお袋には誰も敵わなかった。

茉弥は茉弥で海に『茉弥ちゃんだっけ、宜しくね』と言われて、恥ずかしそうに下を向いてモジモジしていた。

お袋に茉弥の恥じらいを分けてやりたかった。

桜本町に着き、駅を出る。

『何処に、行くんだ？』

『もちろん最初はコスモパークよ』

コスモパークはみなとみらいの大観覧車があるアミューズメントパークだ。

『悪い、俺パス』

『駄目よタカちゃん。海ちゃん引つ張って来てね』
渋々、歩いてコスモパークに向かう。

海が少し緊張した顔で俺の横で間を空けて歩いているので、ふっと見ると俺のすぐ後ろを俺の右手を掴みながら茉弥が歩いている。そして右手で海の洋服の裾をちょこつとだけ摘んでいた。

コスモパークに着き俺は3つ目のアトラクションでダウンした。まさか茉弥まで絶叫系が好きだとは思いもなかった。
ベンチにヘタレこんだ。

『タカちゃん、情けないわねまったく』

『俺がこういうの苦手なの知っているだろお袋は』

『海ちゃんにカッコいいところ見せなきゃ駄目よ』

『いいんだよ、俺はヘタレで』

『すぐにそんな事言うんだから。めっ』

『俺は、ここで休んでいるから3人で行って来いよ』

『しかたがないわねえ、3人で行きましょう』

海が少しだけこちらに振り向いて2人に手を引つ張られアトラクションへと姿を消した。

しばらく放心状態で空を見ていた。

この空も島に繋がっているんだよな、そんな事を考えていると目の前にソフトクリームが現れた。

海が何も言わずにソフトクリームを突き出した。

『ありがとう』

礼を言いベンチを軽くたたいて座れと合図した。

『仲が良いのだな』

『ああ、久しぶりに会ったからな』

『そうか』

『海のお母さんでどんな人だったんだ』

『よく覚えていない、風を産んですぐに死んじゃったから。でも、すごく優しい人だった。今はお姉ちゃんが母親代わりだ。羨ましいこういうの』

『じゃ、また皆で遊びに行こうな』

お袋の大きな声で会話は途切れた。

『あつ居た。海ちゃん急に居なくなっちゃうんだもん。でもラブラブね』

『兄さま、ラブラブ』

茉弥は意味分かっていいのかこいつ？

『そろそろ、お腹もすいたしどこかでお昼にしましょう』

お袋の提案に賛同した。

『あそこの大桟橋のターミナルの中に港の見えるカフェがあるから行くか？』

『タカちゃん詳しいわね』

『ああ、半年くらい横浜に居たからな』

『ママ初耳よそんなの。で、誰とデートに来たの？ 誰と』
そりゃそうだろう家を飛び出した後の話だ。

『デートなんかじゃないさ、ただ海を見にな』

『タカちゃんはおマンチストなんだから、もう』

ロマンチックなんて欠片も無かった。

家を飛び出して金を貯める為に横浜で仕事をしていた、その職場の寮が小倉山だったのである。

これから先の事を迷っている時に職場の人に港が一望できるレストランが在ると聞き、ここで海や船を見ながら考えていた。

その時なのかもしれない頭の何処かに南の島が浮かんだのは。

でも、それはただ何処か遠くへ行きたかっただけなのかもしれないのだ。

それにココのスイーツは評判だし。
こっちが本当の理由なのかも。

大棧橋のカフェに入りメニューを見ながら迷っていると茉弥が話した。

『姉さまは、何にするの?』

俺とお袋は驚いて目を合わせた。

『ロコモコがいいかなあ』

『茉弥も、姉さまと同じの』

珍しい事もあるもんだと思いながら俺たちもオーダーをした。

食後にこのお店お勧めのパフェを食べていると茉弥が話し始めた。

『兄さま、お船がいっぱい』

『茉弥は、海が好きなのだな』

『茉弥、海大好き。広くって大きいから』

『そうか、じゃ今度、兄ちゃんが居た石神島に一緒に行こうな。とつても海が綺麗なんだぞ』

『兄さま、約束』

『ああ、約束だ』

茉弥が小指を出し指切りをした。

石神島的美夢の事を思い出していた。

今頃、何をしているのだろうと。

カフェを出て、少し大棧橋を歩き山上公園へ向かう。

8月だけあつてかなり暑かった。

茉弥の体を気遣って船が展示されている近くの木陰で少し休む事にした。

海面が太陽の光を浴びてキラキラと光りとても綺麗だった。

『ママ、冷たいジュース買って来るね』

お袋が言いながら立ち上がると『私も一緒に』と海が言った。

2人がジュースを買いに行き、俺は茉弥の奴よほど嬉しかったのだ

なと考えていると茉弥の体が俺にもたれ掛かって来た。

『茉弥、茉弥どうした？』

返事が無い気を失っていた。

その時、ちょうど2人が戻ってきた。

『タカちゃん、海ちゃんて、とっても可愛いの……どうしたの？』

『いつものやつだ。何処か寝かせて休ませる場所を』

俺がそう言つと海が辺りを見回して『こっち』と俺の袖を引っ張つた。

あわてて茉弥を抱きかかえ後をついていく。

近くの大きなホテルに入りフロントの前で海が誰かに電話していた。フロントの人に電話を変えるとフロントの人の顔色が変わり直ぐに

『こちらへどうぞ』と案内してくれた。

案内されたのはスイートルームだった。

直ぐにベッドに茉弥を寝かせ買ってきたジュースで顔を冷やしているとホテルの人が氷枕を持ってきてくれた。

『ありがとう』

お礼を言い茉弥の頭に当てがう。

15分位すると茉弥が目を覚ました。

『兄さま、母さま』

まだ少し苦しそうだった。

いつもしているように茉弥のおでこに自分のおでこをゆっくりくっ付けた。

するとスーと楽になったのか眠り始めた。

『もう、安心だわ。茉弥はママが見ているから、2人で何処が見てきなさい。皆でここに居てもしょうがないから1時間後にロビーで待ち合わせね』

海が心配そうに俺の顔を見上げる。

『大丈夫だ。1時間もしたら元気な茉弥に戻るから行こう』

俺がそう言つと安心したのか俺と一緒に部屋を出た。

ロビーに降りホテルを出て何処に行こうか考えながら海に言った。

『ありがとうな。ここのお礼だ。1時間しかないけれど海の行きたい所やりたい事があれば、何でも俺に言ってくれ』

『ん〜ん、観覧車』

少し海は考えてから答えた。

『隆羅、手』

『しょうがねえなあ』

海の手を握りコスモパークへ向かう。

公園の遊歩道を歩き、赤レンガ倉庫を過ぎるとコスモパークは目の前だった。

観覧車に乗ると微妙な空気が2人の間を流れた、海と面と向かって何を話せばいいのだろう。

そんな事を考えていると海の方から話し掛けてくれた。

『茉弥ちゃん、いつもあんな感じになるのか？』

『いや。いつもじゃない、でも時々な』

『あの、おでこをくっ付けたのは何なのだ？』

『ああ、おまじないの様なものかな。理由は分からないけど、あれをすると楽になるらしいんだ』

そう言いながら額を触る。

その時、キルシュが言った水の梵字の事が頭を過ぎった。まさかな。

『茉弥が小さい頃はとても体が弱かったからな、外で遊べないから俺がいつも遊び相手だった。少し年が離れているからアイツが産まれてしばらくは寂しい思いもしたけどな。前に今回の酷いのが起きて島から呼び戻された事があるんだ。病院でいくら検査しても原因は解らなかった。だから、あんなおまじないの様な事でも信じたいんだ』

『隆羅はやっぱ優しいね』

『こんなの普通だろ』

『違うと思う。強さとか思いやりは優しくないと生まれない、優しくままで居る事が一番難しいってお姉ちゃんが言っていた』

『そうなのかな？ でも、俺はヘタレだぞ。海も本当に優しいんだな』

『私がなんで？』

『茉弥が初対面の人に話しかけたり触ったりする事は、今まで一度も見た事が無かった。だから今日は俺もお袋も驚いていたんだ。きつと、海が本当にとても優しい人だと感じたのだろうと思うぞ』

自分で言っておいて少し恥ずかしくなり話題を変える。

『そう言えば、フロントで誰に電話していたんだ』

『お姉ちゃんに』

『潮さんて何の仕事をしている人なんだ？ 水無月家はすごいお金持ちみたいだし』

『普通だと思う、お姉ちゃんの仕事は「ソウスイ」って言ってた』
普通ってそれが普通なら俺なんかミジンコみたいな物が、それにソウスイってなんだと考えていると。

ボソッと海が呟いた。

『私はそんな優しい隆羅の事がす……』

最後まで聞き取れないままで観覧車のドアが開いた。

聞き返そうと海の顔を見ると何でも無いと言う様横に首を振っていた。

観覧車から降りる時に手を差し出すと『うん』と頷きながら手を繋いだ。

そのまま少しブラブラと歩きホテルに戻る。

ロビーに入るとすっかり元気になった茉弥とお袋が待っていた。

フロントで清算の確認をしようとする。

『いえいえ、そんな結構ですよ。水無月様にはいつもお世話になっておりますので』

まったく理解できなかったので聞いてみた。

『ところで水無月 潮ってどんな人なのですか？』

この人何を言っているのと言う顔をされてロビーで放送中の大型液

晶テレビをさしてこう言った。

『あちらの方でございます』

テレビに目をやる。いつも俺の事をおもちゃにして遊んでいる人が真面目な顔でテレビに出ていた。

テロップの名前を見ると

「水神コンツエルン 総帥 水無月 潮」とある。

頭の中が真っ白になり『ありがとうございました』とだけ告げて、お袋たちの所に行きお袋の肩を叩きテレビを指差す。

『ええええええー！』

お袋の絶叫がホテルのロビーにこだました。

人間と言う生き物はどうしようもなく理解を超えた事に出会った時は、とりあえず笑っておくか考えない事にするのが一番なのだ。

その後何事も無かったかの様に4人で本町まで行きショッピングをして近くの駅でお袋たちと別れた。

後日、潮さんの書斎でこの事を聞いた。

『なんだ知らなかったの？ 聞かないから言わなかったけど。まあ、ターちゃんにはいう必要も無いかなて』

大きな机に寄りかかるように座り腕組みをしながら言った。

『俺、テレビとか見ないですし、よく普通の事知らないって言われますから』

『で、私がコンツエルンの総帥だからってターちゃんが変わる訳じゃないでしょ。それとも私たちに対する接し方が変わるのかしら？

違うでしょ。ターちゃんは総理大臣でも大統領でもそんなのお構

いなしだものね、私はターちゃんのそういう所大好きよ』

それって褒められているのだろうか、それにいつから「君」から「ちゃん」付けに……

凄くヘタレばいんですけど。

『私も、海も、風も、みんなターちゃんの事が大好きなの。これからもヨ・ロ・シ・ク』

総理大臣や大統領はともかく、確かに潮さんの言つとおりなのである。

ホテルのオーナーだろうが会社の社長だろうが違う事は違ふとはつきり言つてしまふし、筋の通らない事されると反発し向かつて行つてしまふ。

それ故にいろんなバイトや仕事をしているのもこんな理由のせいなのである。

周りからは『不器用な奴だな、馬鹿かお前は』と言われるが嫌なものは嫌なわけで俺は俺の思つたとおり生きるしか出来ないのだ。そんな事を考えながら部屋から出ようとドアに向かい、振り向いて挨拶をしようとすると思つたが潮さんの回し蹴りが飛んできた。とつさに上段の受けを取つたが吹き飛ばされてしまった。

『いきなり、何をするんですか？ 殺す気ですか？』

『ちよつと試ただけよ。それよりターちゃん、あなた空手か何かやっていたわね。その上段の受け方何処で習つたの？』

『島ですよ、知り合いの飲み屋のマスターに古武術の道場に無理矢理連れて行かれて』

本当なのである「男は女の1人や2人守れなくつてどうする」などと言われ、おまけに「そのヘタレ根性を叩きなおす」とシゴキまくられたのである。

『最近、生傷も無くなつて来たことだしそろそろ大丈夫ね』

『大丈夫つて何がですか？』

『こつちの話よ、うふふ』

はぐらかされて部屋をでたのだ。

『その前に、お楽しみはこれからよ』

怖い事も言っていたのだ。

お盆 - 1

横浜での一件から、確実にそしてかなり俺と海の距離が近づいてきていた。

明日から3日間お盆休みになっている。

何をしようか色々と考えていたのだがそれは見事に打ち砕かれた。

お盆初日の早朝、朝刊すらまだの時間にあの3人姉妹が何故か俺の部屋に居た。

凧は潮さんに暴れないように抑えられて口を塞がれていた。

『隆羅。起きて、隆羅ってば』

昨晚、遅かった事もあり寝ぼけ眼だった。

『んん、海。ん、今何時だ』

時計を見ると見た事のない時間だった。

『まだ、寝る。お前もここで寝る』

寝ぼけて海の首に手を回しベッドへ引きずり込んだ。

その瞬間、押さえつけられていた凧が潮さんを振りほどき俺に向って走り出した。

『あつ凧、駄目!』

凧の突撃は止まるはずもなくカカト落としが俺のボディーに炸裂した。
『ドスッ』

鈍い音がして目が覚めたと言うより、お花畑が見えた気がした。

『グツゲエ。ゴホ、ゴホ、ゲエ……』

踏み潰された蛙の様なありえない声を出し腹を押さえたままベッドから落ちた。

『お姉ちゃんに何するんだこの野郎!』

訳も分らず目を開けると仁王立ちした凧とその向うに潮さんが見えた。

『こんな、朝っぱらから殺す気ですか?』

『ゴメンなさい悪気があつた訳じゃ無いの』

『悪気が無いのに、なんで俺の部屋に居るんですか！』
寝起きで最悪な気分だった。

『凧、謝りなさい』

『こいつが悪いんだ、お姉ちゃんに変な事するから』

『隆羅、大丈夫なの？』

海が心配して声を掛けてきた。

『ああ、大丈夫だ』

こんな事されて笑えるのは死人くらいだろう、まあ死人は笑わないけれど。

『で、何の用ですか？ いったい？』

『お盆休みにみんな一緒に泊りがけで海に行こうかと思って』

『はいはい。行けばいいんでしょ、行けば。準備するので外で少し待っていてください』

3人が外に出て行く。

もうやけくそだった、着替えと水着をとりあえずデイバッグに詰る。

『もう、凧は。あんな事されたら、いくらターちゃんだって怒るわよ』

『潮お姉ちゃんが少し脅かしてやろうって言ったんじゃない』

『凧。今度あんな事したら海お姉ちゃんが怒るからね』

『私は、何も悪くない。悪いのはあいつだ』

『でも、ターちゃん凧には怒らなかつたわね、流石ね』

表に出るとアパートの前に大きなワゴンが止まっていた。

『この車の運転手をしろと言う事ですね。了解いたしました。お嬢様方』

『悪いと思っているのよ。本当にでもこんな車あまり運転した事ないし、それに私の車はあんな車ばかりだからね』

その通りである。あんなヤンチャな車で遠出なんてするものじゃない

いのも事実だ。

渋々、運転席に座ると海が助手席に潮さんと凧は後ろに座った。

『どこまで行けばいいんですか？』

『取りあえずターちゃんの実家まで。お母様や茉弥ちゃんと6時に待ち合わせしているの』

完全にはめられていた。

早朝の為、道は空いている。

『ねえ、隆羅いつまで怒っているの？　ねえてば』

『もう、怒ってないよ』

『嘘つき、怒っているじゃん』

『海だつて知っていたんだろ。どうせ』

『だって、お姉ちゃんが……』

『もう、分かったからそんな顔をするな』

コンポにCDを入れる。

『隆羅、この曲好きだよ。いつも部屋で聞いている』

『ああ、Heart of Diamondsって言うグループの曲だこのボーカルのYumiのハスキーボイスな声と詩が好きなんだ』

『ふうん、そうなんだ。隆羅ってこんなハスキーボイスの声の人が好きなんだ』

海が少し寂しそうな顔をして窓の外を眺めた。

『このグループのデビューって俺らが生まれる前だぞ』

『ええ、何でそんなグループ知っているの？』

『たまたま、親父の車で聴いた事があってそれから良く聴くようになったんだ』

『そんな昔の、よかった……』

『何か言ったか』

『ん？　何も言っていないよ』

ルームミラーを見ると潮さんは夢の中だったがツインテールはこちらを睨んでいた。

『そうだ、隆羅。朝ごはん作って来たのだけど食べる』
『そうだな』

『お姉ちゃん。ちょっとそれかして、お姉ちゃんが作ったんだよね』
『風が海から弁当箱を奪い取る。』

『うん、隆羅に思っ』

『本当にアイツに食べさすの？』

『駄目なの？ 一生懸命に作ったんだけど』

『そこが、問題なの！ お姉ちゃんの料理はかなり下手くそなの』

『だって、あまり料理したことないんだから仕方ないでしょ』

『ちよつと、私が味見するからいいよね』

『風が何かをつまんで食べた。』

『……不味い』

『一生懸命作ったのに』

『海が頭を垂れてシユンとしていた。』

『何を、コソコソやっているんだ。ちよつとコンビニに寄るぞ』

『どうしたの？ 隆羅』

『トイレだ』

『コンビニの駐車場に車を止めてコンビニに入る。』

『ああもう、煩いわね。2人でさっきから何をもめているのまったく』

『だって、お姉ちゃんがアイツに手作りのお弁当を食べさせるって』
『食べさせればいいじゃない、ターちゃんなら絶対に文句は言わないわよ』

『えっ？ 食べさせるの？ お姉ちゃんがアイツに嫌われてもいいの？』

『風もターちゃんの事、気に入っているのね。それにターちゃんならこれくらいで海の事、嫌いになったりしないわよ』

『違う私は、お姉ちゃんの事を思っ。それにあんな奴大嫌いだし認めてないんだから。いいからお姉ちゃん、今すぐコンビニで何か』

別の物を買ってきなさい。早く』

俺がコンビニで買ったお茶のペットボトルを手に持って出てくると、海が車から降りてコンビニに向って歩いてきた。

『海、そんな顔してどこに行くんだ。行くぞ車に乗れ』

『でも、だって』

『いいから乗れ』

『う、うん』

海が車に乗り込んだ。

『海、お茶を買ってきたから弁当を食べさせてくれ』

『お前、こんな物本当に食べるのか？』

『人が作ったものをこんな物って言うな。こんな物って言って良いのは作った本人だけだ。それにこの弁当は海が俺に作ったものだ周りがゴチャゴチャ言うな』

『隆羅、はいこれ』

海が申し訳なさそうに弁当を出した。

『いただきます』

手を合わせ軽く頭を下げる。

『どれ、うん、うん。まあ変わった味だけど、良い感じだぞ』

『えっ隆羅。本当？』

『俺は、食べ物に関して嘘は言わない。食べる事も作ることも好きだし、それに一応調理の仕事をしているからな』

『そうそう、隆羅の作った料理やケーキって凄く美味しいんだよ』

『ターちゃんは、どこかで習ったの』

『潮さん起きてたんですか？ 別に習った訳じゃなくて子どもの頃からお袋が作っている所見ているの好きで。それに基本を教えてもらった訳じゃないからオリジナルばかりですし。でも一応、和・洋・中、イタリアン、ケーキ類は作れますよ』

『そうなの、凄いわね今度ヨロシクね』

『激しく遠慮させていただきます』

『ええ！ 私もターちゃんの作った料理やケーキ食べてみたいのに』

切りが無いので放置した。

『ご馳走様でした。ありがとうな海』

『うん、今度はもっと頑張るね』

『ああ、またよろしくな』

『ふん、バカじゃないの』

凧は納得できないようだった。

『いいんだよ、料理なんて物は作ってあげたいと言う気持ちと作ってくれてありがとうと言う笑顔があれば直ぐに上手くなるもんだ。凧ちゃんもそのうち分かるようになるさ』

『そんな事言われても分かんない』

でも凧は海の料理をこんなに美味しそうに食べる人を始めてみたのだった。

『出発しますか』

しばらく走るとすぐに実家に到着した。家の前でお袋と茉弥が待っていた。

車を止めて車から降りる。

『おはよう、茉弥』

『兄さま、おはよう』

『タカちゃん、おはよう』

『おす』

『今日は、誘ってくれてありがとうございます。潮さんと海さん…』

…』

凧を見てお袋がフリーズしていた。

『大勢の方が楽しいですからね、ターちゃん』

『キヤー可愛い。小さな海ちゃんがいる』

お袋がいきなり凧に抱きついた。

『おいおい、お袋。凧ちゃんが固まっているから恥ずかしい事止めてくれ』

『は、はじめまして。い、妹の凧です。よろしく願います』

風がカチンコチンになっていた。

『それじゃ、改めて出発しますか』

『で、どこに向かえばいいんですか？ 潮さん』

『西伊豆よ』

『えっ、ああ……西伊豆ですか。海が綺麗ですもんね。また、遠いなあ……』

『レッツ ゴー』

海が声を上げる。

取りあえず車を出し首都高に乗った。

流石に早朝だけの事はある、道が空いていて気持ち良かった。

『タカちゃん、朝ごはんまだでしょ。作ってきたんだけど食べる』

『お袋、悪いんだが。さつき海が作った、弁当食べたばかりなんだ』

『あらあら、それは愛情たっぷりでお腹も満足でママのは食べられないと』

『ちよつとは食べるから、後はみんなにあげてくれ』

『うふふ。冗談よ。はい、みなさんどうぞ』

『まあ、美味しそう。頂きます』

『ほら、風ちゃんもどうぞ』

『はい、頂きます』

『茉弥ちゃんは食べないの？』

海が不思議そうに聞いた。

『茉弥はママが作っている時に、いっぱい味見してお腹いっぱいなんだもんね』

『母さま、内緒って言ったのに。もっ』

茉弥が頬を膨らませ赤くなっている。

『海ちゃんには取り分けましようね』

『あっ、ありがとうございます』

『隆羅。凄く美味しいよ』

『そうか、お袋は料理上手いからな、昔から』

『海、ターちゃんにも食べさせてあげないと。ほら、あーんって』

『潮さん、そんなに面白いですか？』

『面白くは無いわよ。楽しいの』

『一緒です。どっちも』

『あの、その、隆羅。あーん』

海が真面目な顔をして、楊枝に刺したから揚げを口元に差し出した。

『ば、馬鹿。ああもう』

俺が口を開けると海がから揚げを口に入れた。

『きゃーきゃー。タカちゃん、真っ赤か』

『ターちゃん、海のお弁当とどっちが美味しい』

『そんなの比べられません』

『本当にハッキリしないんだからターちゃんは』

『どっちも愛情たっぷり美味しかったんです』

『でも海ちゃんの愛情にはママ負けちゃうかなあ』

海が隣で真っ赤になって下を向いたままだった。

今日から3日間の事を考えると憂鬱になって来た。

車は東名に入り順調に進んだ。サービスエリアに1回止まり休憩をして東名をひた走りそして高速を降りてから西伊豆の宿へ向かった。
『今日の宿がある場所は、穴場中の穴場だから人も少なくって気持ちいいわよ』

『でも、潮さんお盆に海って』

『ターちゃんは考えすぎよ、多くは確率の問題なの。お盆休みに海や川へ出かける人が多ければ事故も必然と多くなる。それだけの事よ。まあ全部がそうだとは言えないけれどね。それに沖縄なんかは今も旧盆でしょ。気にし過ぎるのが一番いけないの判った？』

『はい、了解です』

『判ればよろしい』

お盆 - 2

宿に到着すると昼までには時間があり。

部屋の準備がまだだという事で着替えだけさせてもらってビーチで遊ぶ事にした。

宿の目の前がビーチになっている。

しかし、本当に人が少なかった。

お盆休みの書入れ時に、もしかして潮さんがこの辺り一帯を貸し切ってなんて考えたが気にし過ぎるのが一番いけないのかもしれない。ある意味、潮さんを敵に回すのが一番怖い事なのかも……

しかし何で俺の周りの人間は人使いが荒いんだ？

『はあ、はあ、はあ、死んでしまっ』

『何、ヘタつてるの？ この位で』

『これ位って、荷物運びにセッティングまで全部ですよ』

『女の子にさせる気なの？ ターちゃんは』

『だから、全部、やったじゃないですか……少し眠ら……』

倒れこむようにパラソルの下で眠ってしまった。

寝不足で車の運転しての強行軍だったのでヘトヘトだった。

どのくらい寝ていたのだろう。

『隆羅。隆羅、起きてスイカ割しようよ』

目を開けると、綺麗な顔立ちの海が透通るような白い肌によく映えた綺麗な青いビキニを着ていた。

『人魚……』

その時『ドスッ』と鈍い音がして息が出来なくなる。

風が俺の腹に大きなスイカを落とした瞬間だった。

『うつ、げぼ、げぼ、げぼ、苦しい……』

『お姉ちゃんが起きろって言っているだろ』

目を開けると赤いビキニの風が立っていた。

『風、ちょっと来なさい。さっきお姉ちゃんが言ったでしょ』

『海、いいて気にしていないから。大丈夫だ』

『でも』

『俺が大丈夫だと言っているんだ』

『分かった、ゴメンね隆羅』

『何も、海があやまる事は無いだろう。誰も悪くないんだ』

『海は、みんなとスイカ割して来い俺はもう少し横になるから。このスイカ忘れるなよ』

『うん』

ビーチには白いワンピースの水着を着た潮さんに、フリルの着いた花柄の水着の茉弥。

そしてお袋は日焼けしないように完全防備な格好をしてスイカ割りの準備をしていた。

そして俺は夢の中へと誘う。

まあ風の焼きもちも分かるし、それにお袋や茉弥と仲良くしているのでそれで良い様な気がしたのだ。

遠くでみんなが楽しく遊んでいる声がした。

気持ちが良い幸せだ……しばらくウトウトと眠る。

『隆羅、寝てばかりいらないで行くよ』

いきなり手を引っ張られ連れ去られた。

そこには大きな目のゴムボートがあり。ボートにはとても見慣れたシユノーケリングの3点セットが積まれていた。

『あの、これは潮さん』

『ちよつと沖まで行って見たくって』

『で、俺に何をしろと?』

『漕いでちよつだいね男の子』

『はあ、俺は使い魔か?』

ボートには、お嬢様が3人と俺の計4人だった、お袋と茉弥はビーチで何か拾っていた。

しばらく漕ぎ沖に出る、ここは入り江になっていて波はそんなに無いのだが限界だった。

『うう、気分悪い』

『大丈夫、隆羅』

『全然大丈夫じゃないぞ』

『もう、ヘタレなんだからターちゃんは』

『俺が舟は駄目なの知っているくせに』

海に入れば何とかなると3点セットを着け始める。

『これ、使いますよ』

『ええ、ターちゃんのだもん、ご自由に』

『やっぱりそうなんだ。じゃ、行ってきます』

大きく息を吸いバックロールで海へ、そのまま潜る……

『えっ、お姉ちゃん上がってこないよ……』

海が不安そうな顔で潮の顔を見た。

静かな青い世界で光がキラキラと舞う。

しばらく、上を眺めていると誰かが覗いている影が見えた。そろそろ上がるかな。

『隆羅。隆羅つてば』

『大丈夫よ、ターちゃんなら』

『でも、隆羅上がってこないよ』

『隆羅。もう隆羅!』

『なんだ? 海』

海が覗き込んでいるのと反対側から顔を出した。

『うふふふ』

『あはははは』

泣きそうな海の顔を見て潮さんと風が大笑いした。

『隆羅のバカ!』

海が急に立ち上がりこっちに来ようとした。

『えっ? お姉ちゃん危ない!』

『海、座りなさい!』

ボートが大きく揺れた。

次の瞬間、ドボンと水の音がして海が落ち。

そして『ゴボツ』と水を飲む嫌な音がした。

ジャックナイフで急潜行をする、海の白い体が沈んで行くのが見えた。

手を伸ばして体を抱きかかえフィンを漕ぎ急浮上する。

海を抱きかかえて勢い良く水面に出た。

『海! 海大丈夫か? 海?』

『ゴホ、ゴホ、ゴホ』

『こ、怖かったよ』

海が抱きついてきた。

『大丈夫か? もう安心だ』

『た、隆羅。隆羅……』

『大丈夫だな』

『ん、うん』

落ち着かせる為に体を抱き寄せボートを見ると2人がこちらをジッと見ている。

『へえ、お姉ちゃんて、だ・い・た・ん』

『もう、ラブラブね。2人とも』

『そんな場合じゃ、もういいす』

海がからかわれたのに気付いて真っ赤になったが怖いのか離れようとしなかった。

『もう大丈夫だな。ボートに上がれ』

『あれ、あれ』

ボートにつかまらせると、もがいているが上がれないらしい。

『しょうがねえなあ。海、両膝を曲げて右手でボートのロープをつかんでおけ。分かったな』

『うん、こう?』

『もうちょっと手はこっちだ。そうそう、良いか行くぞ』

大きく息を吸い真下に潜る。

海の下まで潜り海を左肩に乗せ左手で体を支えてフィンを大きく漕いで一気に浮上する。

水面に上がった瞬間にボートを右手で押さえ手の力も加えて体を持ち上げ反転させる。

『ヒヤアッ!』

『えっ、どうなってるの?』

海が変な声を上げると海はボートの縁に座っていた。

『す、凄い』

凧が驚いている。

『やるじゃないターちゃん』

『あ、ありがとう隆羅』

まだ、なんだか海の顔が赤かった。

『もう、ボートの上で立つなよ、少し潜ってくるからな』

隆羅がボートから少し離れて素潜りをしている。

ボートの上では3人が空を見上げていた。

『気持ち良いわね』

『うん』

『ねえ、お姉ちゃんアイツ凄いな』

『そうだね』

『凧、あまりターちゃんに可哀想な事しちゃ駄目よ。あの子は凧に何をされても絶対に怒らないわよ』

『潮お姉ちゃんなんで怒らないのさ』

『だって海があなたの事を大事に思っているからよ。あの子は自分の大切なものを傷付けられたり侮辱されない限り怒らないわ。とても優しい子なの優し過ぎるくらいにね。それに凧だって大切なもの壊されたら嫌でしょ、海の事も少し考えてあげなさい』

『だって、お姉ちゃんアイツの前だと凄く楽しそうなんだもん』

『しょうがないじゃない海にとってターちゃんは、とってもとって

も大切なんだからね、そうなんでしょ。海」

「私は、その、とっても大切に思っているけど隆羅はその……」

「はいはい、この話はおしまい。風、判ったわね」

俺が水面に顔を出すと潮さんの呼び声が聞こえる。

「ターちゃんそろそろ戻るわよ」

「分かりました」

ボートの後ろにつかまりゆっくりフィンを漕ぎ始める。

「人間船外機みたいねターちゃん」

「でも、結構重いですけど」

「失礼ね、レディが乗っているのに重いつて。この口がそういつい」と言うの」

「痛ったたたたた」

潮さんがほっぺを思いつきりつねった。

ビーチに戻るとお袋と茉弥は、まだ何かを拾い集めていた。

「兄さま、戻ってきた」

「タカちゃんお帰り」

「ああ、疲れた」

2人の横に腰を下ろす。

「何をやっていたんだ、2人で」

「綺麗な石を集めていたんだよね、マーちゃん」

「うん、ほら、兄さま綺麗」

茉弥が小さな両手を開くと小さな石が光っていた。

「本当だ綺麗だな、そうだこれお土産」

それはキラキラと太陽を反射してとても綺麗な石だった。

「兄さま、くれるの？」

「ああ、茉弥に持ってきたんだ」

「茉弥、嬉しい。母さま見て綺麗」

「まあ、綺麗ね。帰ったらマーちゃんの宝箱に入れようね」

「うん、入れる」

お盆 - 3

昼食の後は各々ゆっくり過ごしていた。

俺は少し離れた岩場で海を見ながらボーとしていた。

ここは海の水も綺麗だけど、やっぱり島とは違うんだなあ海の色が青と紺しかないや。

去年の今頃は何をしていたっけそんな事をぼんやりと考えていると頬に冷たい物があたり振り返る海が立っていた。

『隆羅、ジューズ飲む？』

『おっ、サンキュー。今来たのか？』

『ちよつと前に来たけど、隆羅が寂しそうな顔していたから声かけられなかった』

『そうか、そんな顔してたか』

『うん、少し怖かった』

海が不安そうな顔をして俺の顔を覗き込んだ。

『怖いって何で？』

『隆羅が居なくなっちゃいそうで』

『何処にも行かないよ』

『何を考えていたの？』

『去年は今頃なにしていたかなって』

『隆羅は、時々遠い目をするね』

『そうか』

『うん、とても不安になる』

『何がだよ、海なんか変だぞお前』

海の目が真剣な眼差しになり俺の目を真っ直ぐに見つめた。

『知りたいの』

『何をだよ？』

『隆羅の気持ち』

『俺の気持ちって？』

『隆羅は私の事をどう……』

『ああ居た。居た。こんな所で2人だけでコソコソとお姉ちゃん行くよ。ほら』

不意に風が現れて会話が途切れた。

『うん、分かった』

『潮お姉ちゃんが、ターちゃんはつてお前の事、探していたぞ』

『ああ、分かったすぐ行くよ。先に行つてくれ』

風に連れられて海がビーチに戻つて行つた。

俺の気持ちか、どう答えれば良いんだろ。もう少し時間が欲しかった。

ビーチに戻ると皆が片付けを始めていた。

『ターちゃん、早く撤収よ』

『ういーす』

『どうしたの？ 少し変よ、ターちゃん』

『元からですよ』

『そうかしら』

『俺はヘタレですから』

『そうそう、もし釣りするようなら車に道具積んであるから』

『ういーす』

『本当にどうしたのかしら』

宿はとても落ち着きたい感じの宿だった。

部屋からは海が見えてとても気持ち良く、食事はみんなで食べられる様に小さな宴会場に用意されていた。

『わあ、凄い美味しそう』

『母さま、お魚が動いてる』

それは、海の幸テンコ盛りの豪華な食事だった。

『乾杯！』

宴の始まりの合図だった。

『おいしいね、隆羅』

『そうだな』

『お、茉弥。エビ食べるか？ ほらお兄ちゃんのも食べていいぞ』

『風、こぼさないの、もう』

『ビールおかわり』

ワイワイガヤガヤと宴会は続いた。

『ねえねえ、風ちゃんこれ見て』

茉弥が俺が潜って取ってきたあの石を出す。

『うわ、綺麗。茉弥ちゃんこれどうしたの？』

『あのね、兄さまにもらったの。茉弥の宝物』

『良かったね』

『うん』

『ターちゃん、あの石ってまさか』

『潜った時に採ってきたんですよ。西伊豆の海は綺麗ですから底まで良く見えましたよ』

『でも、あの辺て深いんじゃないの？』

『あのくらいの深さなら余裕かな』

『それじゃ、あの海をボートに上げた技ってどこで覚えたの？』

『島で海人うみんちゆの所で世話になってた事があるんです。その海人がダイビングもやっていて、そこで遊びながら憶えたんです。ダイバーの女の子には評判良かったですよ』

『そうなの、そんな事していたんだ』

『そうだ、潮さん車のキー貸してください夜釣りに行こうと思って
いるんで』

『餌はあるの？』

『ええ、夕食前に買って来ました。ありがとうございます。じゃ、
行ってきます』

鍵を受け取り宴会場を出ようとすると、お袋が紙袋を差し出した。

『タカちゃん、待って。はい、これいつもの』

『ああ、悪いな。サンキューお袋』

紙袋を受け取り宴会場を後にする。

『えっと、竿はこれか道具はと。これだけあれば十分か』
駐車場の車から竿と道具を取り出し、餌の入ったクーラーボックスを持ってビーチの近くの船着場まで向かう。

そして、先端まで歩き準備に取り掛かる。

道系に通し錘を通してサル環を付けてハリス付きの針をつけて終了と。

餌を付けて投げ込む、竿先に鈴をつけて胡座をかいて足の間に竿を差し込んで横になった。

その頃、他のメンバーは食事も終わり部屋に向かい歩いていた。

『茉弥ちゃん、これから風達の部屋で遊ばない』

『うん、良いよ。遊ぶ』

『潮さん、本当にありがとう。茉弥もあんなに楽しそうで』

『いえ、いつもターちゃんには無理ばかり言っていますから』

『気にしないでいっぱい使ってやってくださいね。タ力ちゃんの事、よろしく願いますね』

『あれ、そう言えば隆羅は？』

海が潮さんに聞いた。

『ターちゃんなら、釣りに行くなって出て行ったわよ。たぶん船着場じゃないかしら』

『ふうん、そうなんだ』

『そうそう、これから私達の部屋で騒ぎませんか？　こんな事あまり無いですからね、沙羅さん』

『そうね、それは楽しいかも。是非』

潮さんたちの部屋でおしゃべり大会が始まった。

茉弥は風と、潮さんはお袋と楽しそうに話しに花を咲かせていた。

『お姉ちゃん、私ちよつと散歩して来るね』

『そう、気を付けるのよ』

『うん』

『あ、お姉ちゃん何処に、まさかこんな夜にアイツと』

『風、邪魔しちゃ駄目よ。海、行つてらっしゃい』

『うん、ちよつと行つてきます』

海が宿を出て辺りを見渡す。

『確か、船着場はあつちだよな』

俺は夜空を眺めながらどう答えて良いか迷っていた。

海の事は嫌いじゃない、だが気になる事があるのも確かだった。

ビーチの方から足音が聞えた。

『隆羅、そこに居るの?』

『ああ、こつちだ気を付けろよ』

横になったまま返事をする。

『見つけた、横に座つてもいい』

『ああ、いいぞ』

海が体育座りをして膝を抱え膝に顔を乗せてこちらを見た。

『どうしたんだ?』

『隆羅が釣りをしているつて聞いて見に来たの』

『そうか。星が綺麗だな』

『うん、そうだね』

あの岩場での事があつて2人とも緊張していた。

『なあ』『ねえ』

2人の言葉が重なる。

『その』『あの』

また、言葉が重なった、なんだか可笑しくなりどちらかとも無く笑い出した。

『うふふふ……』

『あははは……、悪いが海から始めてくれ』

『うん、分かった』

いつもの2人に戻っていた。

『ねえ、隆羅』

『なんだ？』

『何故、隆羅は私たちの事あまり聞かないの？ 私達が水の精の事とか。普通は怖がったり、変な目で見たりするでしょ』

『そうだなあ、多少は潮さんから聞いたけれど根本が他の所に在るからかな』

『根本が？』

『そうだ、水の精や門番だとしても、海が変わる訳じゃ無いだろう。それは海が自分でどうにかできる問題じゃない、例えるなら目の色の違い肌の色の違いや髪の色の違いみたいなもんだと思うんだ。海は目の色が違うから、それはどうしてだって聞くか？ 聞かないだろう。海は海なんだから、俺が知りたいのは水の精とか門番の事じゃない。海がどんな女の子なのか知りたいんだ。だからかな』

『どんな女の子だったの』

海が不安そうな顔をした。

『すぐ殴るし、すぐ泣くし、食いしん坊で甘いものが大好きで』

『もう、隆羅！』

『そして、とても優しくって温かい、凄く綺麗な女の子かな』

『ありがとう隆羅』

『なあ、海。岩場で俺に聞いてきた事なんだけれど』

『うん、あのね、隆羅って私の事どう思っているのかなあって。隆羅の気持ち聞きたいの』

『そうか』

『うん、教えて欲しい。隆羅の本当の気持ち』

大きく息を吸って気持ちを落ち着かせる。

『こんな言い方は、ずるいかも知れないが。俺は海の事嫌いじゃないぞ、優しいし綺麗だし海が俺の事を好いてくれているのもよく分かるんだ。でも、もう少し返事を待って欲しいんだ』

『え、どうして？』

『海と出会ってからいろいろな事が起こって。海は自分の力の事は昔から知っていたのだろ。でも俺は最近鬼の力を持っていて鬼の血

が流れている退魔師の一族なのを知った。鬼の力が在ろうと無からうと俺は俺なんだけど凄く戸惑っているし怖いんだ。すこし気になる事もあるしな。海には悪いと思っっているんだ、中途半端な気持ちで居させてしまっている。ゴメンな本当に」

『そうなんだ、少し気になる事って何？』

『それは、俺の問題かな俺自身の』

『そうなの』

『だからもう少しだけ時間をくれないか俺に。もっと海の事知りた
いし俺自身の事も知りたいんだ。そうヨナナヨナナで行きたい
んだよ』

『ヨナナ、ヨナナ？』

『沖縄の島の言葉で焦らずゆっくりとって意味だ。友達以上恋人未
満みたいな宙ぶらりんでハッキリ出来なくて悪いとは思っている。

これだけは知っておいて欲しい。俺も海といつも一緒に居たいと思
っている。だから、もう少しゆっくりと行かないか。それじゃ駄目
か？』

『うん、分かった。隆羅の本当の気持ち聞かせてくれてありがとう
チリン。チリン。

その時、竿の鈴が鳴った。

『来た！』

竿を上げる、糸がピンと張った。

『凄い凄い、隆羅』

『で、でかいのか？』

竿がギョングンとしなる。パチツンと糸が切れた。

『うわああ』

勢い余って尻餅をついた。

『ふふふ、隆羅って面白い』

『そうだな、もう、帰ろうか』

『うん』

お盆 - 4

翌朝。朝食後、俺は宿のある集落の中を歩き回っていた。

それは朝食の時だった。

『今日のランチは、海辺でバーベキューしましょう』

『潮お姉ちゃん。凧も賛成』

『海でバーベキューって素敵ね、タカちゃん』

『兄さま、莱弥も楽しみ』

『という訳で、ターちゃん買出しヨロシクね』

『結局そうなるんですか。はぁー了解です。大佐』

『海も一緒にターちゃんのお手伝いお願いね』

『うん、判った。お姉ちゃん』

『ねえねえ、潮お姉ちゃん。お姉ちゃん何かあったのかな、あんなに嬉しそうにして』

『さあ、知らないわ。でも、あんまり邪魔ばかりしちゃ駄目よ』

『うん、判ってる』

『あら、ずいぶん素直ね』

『でも、まだ認めた訳じゃ無いからね。ただお姉ちゃんの事をとても大切に思っているって判ったから』

『あらあら、まだ素直になりきれないの。もう少し時間が掛かるかあ、困ったものね』

こんな感じで潮さんの思いつきで買出しに借り出されたのだった。

『おーい、海行くぞ』

『うん、隆羅。待つて』

『ほら、そのなんだ迷子になったら困るからな』

『う、うん』

隆羅が手を差し出すと恥ずかしそうに海が手を握る。

しかし、買出しにかなり時間が掛かってしまった。材料をそろえてビーチに向かう。

ビーチでは4人が道具を運んでいた。

『ねえ、潮お姉ちゃん。この辺で良いの？』

『いいわよその辺で』

『しかし、結構大変ねバーベキューするのも。ターちゃんがもう1人いたら楽なのに。それにしても遅いわねラブラブカップルは』

『母さま、楽しみね』

『そうね、マーちゃんはバーベキュー初めてだもんね』
『うん』

ビーチに着くと道具は運んであったが、見事に運んだままだった。茉弥と凧それにお袋の3人は波打ち際で遊んでいた。

『ターちゃん、後はヨロシク。運ぶだけでクタクタよ』

『はいはい。分かりかした、やるか』

Tシャツの袖を捲り上げる。

『隆羅。何か手伝う事ある』

『大丈夫だ、海は食材をクーラーボックスに入れておいてくれ。それと宿に頼んだ、あれを取って来てくれないか』

『うん、判った。行つて来るね』

『ヨロシクな』

まずは、バーベキュー台を組み上げ、炭を入れ着火剤で火を熾す。潮さんは隣で見ているだけだった。

テーブルを組み立ててその上に割り箸や皿などをセッティングする。ドリンクと食材のクーラーボックスを運んで完了だ。

『準備できたぞ』

遊んでいた3人が戻ってきた。

『しかし、ターちゃん手際が良いのね』

『ああ、島でよくビーチパーリーしていましたから』

『ビーチパーリー？』

凧が不思議そうに聞いてきた。

『海辺でするバーベキューの事を沖縄では、ビーチパーリーやビーチパーティーって言うんだよ』

『よくやるのか?』

『そうだな、暖かくなると休日はどこかで誰かが必ずやっているよ。俺達もよくやっていたからな』

『おーい、貰って来たよ』

海は宿に頼んであったオニギリを取りに行っていたのだ。

『転ぶなよ』

そう言いながらオニギリを受け取りに行く。

『きゃー』

海がつまずき、前のめりに倒れる。

『危ない!』

おにぎりの乗った皿を左手で取り、右手で海の左手首をつかみ引つ張り上げるが海が勢い余って体ごとぶつかって来た。

勢いで後ろに倒れる。

ゴツツと鈍い音がして後頭部と背中に痛みが走った。

『痛っ』

オニギリはなんとか無事のようにだ。

『嫌あー!!』

皿の声で目を開けると海の顔があり得ないくらい近くにあった。

俺が手を引つ張り上げてそのまま後ろに倒れたので海の体が俺の体の上に覆いかぶさっていたのだ。

海が慌てて飛び起きてしゃがみ込んだ。

『大丈夫か?』

『うん。うん』

海の顔が真っ赤になり。首を縦に振るだけしか出来ないでいた。

『タカちゃん大丈夫、あら大きなタンコブ。冷やした方がいいわね』

お袋が俺の頭を擦る。

『痛いて』

『お姉ちゃん怪我は無い?』

風が声を掛ける。そして真っ赤な顔のまま、風に連れられバーベキュー台の所で座っていた。

『もう、ターちゃんは相変わらずヘタレね。カッコいいのは海の中だけなのかしら』

バーベキューが始まった。

焼く係りはもちろん俺の担当だった。島でもいつもそうだった手馴れたもんだ。

焼いて焼いて、オニギリ食べてまた焼いて、オニギリ食べてオニギリ食べて。

『タカちゃんは、未だに駄目なの』

『ああ、残念ながら。魚なら大丈夫だが』

『それでよく調理の仕事なんてするわね』

『それはそれ。これはこれ。だからな』

『まあいいか、頑張っているみたいだし』

『そうそう』

『ターちゃん、早く焼かないと無くなっちゃうわよ。あつ風それはお姉ちゃんが育てたエビよ』

『早い者勝ちだもん。お姉ちゃんも食べないと、はいエビ』

『しょうがねえなあ、もう』

『マーちゃんもいっぱい食べなさい、お兄ちゃんが心を込めて焼いてくれたのよ』

『兄さまとラブラブ』

『茉弥、それはちょっと違うから。それにしても潮さんの影響受けすぎだろ』

お腹もいっぱいになり。

みんなビーチで横になりお昼寝タイムに突入したようだ。

俺はビーチに座りジンジャーエールを飲みながら疲れを癒していた。海を見ていると心の底から落ち着いてくるのだ。

横にはいつものように海がいた。

『さつきはありがとう』

『海はあわてんぼうだからな、気を付けろよ』

『えへへへっ、デッカイなあ』

俺の後頭部のタンコブを触った。

『お前が言うな』

『隆羅、なんだか凄く楽しいね』

『そうだな、みんなと一緒にだからかな』

『そうだね。こんなに楽しいの初めてかも』

『そうなのか？』

『うん、だって今までではあまり出かけたりしなかったから。これも隆羅と出会えたお蔭かな』

『そっか、それじゃ一生懸命遊んでいっぱい楽しまなきゃな』

『今度は、隆羅と2人でどこかに行つて見たいな』

『判つた、今度な』

『うん、約束だよ』

『ああ、約束だ』

夜は昨夜に続き大騒ぎの宴会だった。

酒の肴はいつもの様に俺と海の話だった。

『ねえ、タカちゃん。もう、チュウはしたの？』

お袋が突拍子の無い事を聞いてきた。

『していません！』

『ええ、本当なの。でも今日はBも見られたし』

『あれはBじゃなくなつて事故です』

『でも、この間の横浜の時は朝一緒に寝ていたんでしょ』

『ば、バカ。お袋こんな所でそんな事言つたら……』

『えーえ、ターちゃんもうそんな事までしているの。進んでるう』

『誤解です。あのー、もの凄い顔をして睨んでいる極道の娘さん見たいのがいるんですけれど……』

『お前、殺す』

潮さんが冷やかすと風が飛び掛ってきた。

『痛ったたた』

あつさり腕の関節をきめられた。腕ひしぎ逆十字というやつだ。

『風、やめて隆羅が痛がつているから』

『ギブ、ギブ、ギブ』

俺が床を手で叩くと風が腕を開放した。

『痛った』

『ターちゃん情けないわね。風くらい掃えるでしょう』

『タカちゃんは、どんな事があっても絶対に女の子には手を上げないものね』

『女の子に手を上げるなんて男のする事じゃないからさ』

『そんな事言っているとターちゃん今に痛い目に遭うわよ』

『今、遭っています。散々な目に。俺その辺ブラブラしてきますから』

『タカちゃん、はい。いつもの』

『悪いな、お袋』

『ママって言いなさい』

『却下します。じゃ、ちよっと出てくるから』

部屋を出て玄関に向かう。

茉弥は疲れて寝てしまっていた。

海はたぶんトイレか何処かだろう、風はふくれ面のまま外を見ていた。

『ねえ、沙羅さん。あの紙袋は何？ 昨日も確か渡していましたよね』

『ああ、あれは。タカちゃんはあれだから。うふふ』

そこに海が戻ってきた。

『あれ、隆羅は？』

『出て行ったわよ、ブラブラして来るって』

『じゃあ、私も』

『海、悪いんだけど風のご機嫌とってちょうだい。ターちゃんは私が見てくるから』

『うん、判った』

俺は防波堤の上でペットボトルの紅茶を飲みながらパンを独りで食べていた。

そこに潮さんがやって来た。

『ターちゃん、何しているの？ 横いいかしら？』

『ええ、どうぞ』

『あら、何でパンなんか食べているの？』

『ああ、これですか。俺、子どもの頃から生ものや魚介類駄目なんですよ、魚は生じゃなければ大丈夫なんですけれど。それで昔から海に来る時はいつもお袋がパンを用意してくれたんです。今回も気を使って用意してくれたんだと思います』

『それなら、言えはいいいじゃない遠慮なんかしないで』

『でも、海に来ればメインは海鮮料理が普通の事じゃないですか。それに今は調理の仕事をする様になった訳だし宿の人に悪いですよ

やっぱり。美味しい獲れたての魚貝類を食べてもらいたいと思ってる筈なのに』

『あなたって子は本当に、どうしようもないくらい優しいのね』

『そんな事ないです、俺はけっこうこうしてパン食べるの嫌いじゃ無いですよ』

『そうだわ、この際だから聞いていいかしら』

『何をですか？』

『海との出会いよ、まだ聞いた事無かったし』

『えっと、いいですよ。あれは春の大潮の時だから3月の終わりに近かったと思います。前に世話になった海人から名底湾での力二獲りを教わったんです。潮が引き始めたら海に入って行って捕まえるんです。冬場は毎年行っていて。あの日も、知り合いに頼まれて力二を名底湾に獲りに行ったんです。凄く星空が綺麗で、海面には夜

光虫が煌いていて。夜空を見上げたら、とても綺麗な水色の光が輝いていて何だろうと思ったら、もの凄い勢いで近づいてきて。次の瞬間その綺麗な光に包まれていたんです。でも嫌な感じじゃなくて、なんだか優しい様な、そして懐かしい様な感じもしました』

『懐かしい感じ、何故？』

『俺にも、分からないけどとにかくそんな感じがしたんです。その後の事はあまり憶えていなくて、朝、目を覚ましたら自分の部屋のベッドで寝ていて、目の前に海が寝ていたんです。メチャメチャ驚きましたよ。そうしたらいきなり殴られて、それが出会いですかね』
『そうだったんだ。今は海の話、隆羅はどう思っているの』

『どうって何がですか？』

『好きなのか、嫌いなのかよ』

『嫌いじゃ無いですよ』

『ずいぶん、ずる言い方ね。あなた』

『俺も自分でそう思っていますよ。ずるい。逃げているって。でも』
『でも、何なの』

『今、俺の体の中には海が持っていた鍵がある訳ですよね』

『そうね、事故とは言え』

『だから、海の俺への気持ちって鍵のせいじゃ無いのかなって』

『そんな事、考えていたの』

『だけど、それって変ですか。俺だって不安なんですよ、凄く。海との関係は絶対に失いたくないし』

『そうだったの。海は海よ、鍵の事とは関係ないわ。変な言い方かもしれないけれど体は鍵の入れ物に過ぎないわ。鍵が他の人に移ったからってその人に惹かれる事は無いの。安心しなさい』

『そうなんですか。判りました。潮さんを信じます』

『ありがとう。それで海には』

『伝えました。本当の俺の正直な気持ちを。もう少し時間が欲しい事、そして一緒にゆつくりと進んで行きたい事、俺も海と一緒にいたいと』

『そうなの、本当に大切に思ってくれているのね。さあ、戻って茉弥ちゃんも起こして。みんなで花火でもしましょう』

『そうですね』

また、少し海に近づけた気がした。

そして、翌日はお土産を買って体を休める為に、早めに宿を後にした。もちろん俺の運転で。

凧

夏休みも終わり、夏の暑さも和らいで少しずつ都会でも秋の気配を感じていた。

俺は最近、少し早起きをしてランニングをしている。写真をちらつかせる人に言われて。

いつものようにランニングをしてアパートへ戻るとキルシュが待っていた。

『潮さんの伝言で、貴様の所へ行き「キッド」を呼んで来いと言われたが「キッド」て誰の事だ』
とても嫌な予感がした。

キルシュが来る1時間ほど前に屋敷の中では、凧と海が言い争っていた。

『凧、さつさと行きなさい』

『嫌だ、絶対に行かない』

『早く準備をしていきなさいって、お姉ちゃんが言っているでしょ』

『もう、みんな行っちゃったもん。絶対に行かないんだから』

『凧が寝坊するからいけないでしょ。まったく』

『違うもん。お姉ちゃんがああのだうれの所に行っていて起こしてくれなかったからだもん。不潔よ!』

そこに潮さんが現れてキレた。

『2人とも朝から、いい加減にしなさい。キルシュ! 隆羅の所へ行き「キッド」を連れてきなさい。大至急よ!』

と言われ、そして俺の所へ来たらしい。

『「キッド」知らないなあ』

言いかけてキルシュを見ると頭の後ろに紙の様な物をつけていた。

『キルシュ頭に何を付けているんだ』

剥がすと、あの生まれたままの姿の写真だった。
写真を握りつぶし『5分だけ待っていてくれ』と言い部屋に上がった。

そんな訳で派手なオレンジ色のキャップをかぶりメガネを掛けパーカーを着て真つ黒なコンバースのブーツを履き水無月家の広いガレージに居るわけだ。

『ターちゃんに、お願いがあるの。長野まで行って来てちょうだい』
『長野って今からですか？これから仕事があるんですけれど』

『お店の方には遅れるって連絡しておくから場所はここよ』

潮さんに地図を渡された。有無を言わせずですか？ 大体、いつも潮さんの話はこんな感じなのである。

『なんで、コイツなんだ』

凧が怪訝そうに言った。

『だってしょうがないじゃないお姉ちゃん仕事で忙しくって行けないし、車の運転出来るの他にターちゃんしか居ないんだから』

『いつもの運転手に言えばいいじゃんか』

『他の人じゃ絶対に間に合わないものターちゃんじゃないと』

『ターちゃん、早く車を選びなさい』

仕方なく見回して車を選んだ。

『これで良いですよ。俺、外車なんか運転した事ないし車の事よく分らないから』

俺が選んだのは型の古い国産車だった。

『本当にそれで良いの？車の事知らないわりにあのポンコツかなりいじってあったじゃない』

『それは車種とかそんな事はよく分からないけれど、機械メカは好きだったので親父に連れまわされて居る時にメカニックの人といつも一緒に居たからエンジンの事や足回りはそれなりに。それに、この車はこの中でも1番ヤンチャ仕様なんじゃないですか？上の回転数はどれくらいですか？』

何故、潮さんにそんな事を聞いたかと言うと初めてここに案内された時に車に関してはあのクソ親父と同じ匂いを感じたからだ。

それにこの車は他の車に比べてよく整備されているし足回りはガチガチにセッティングされていた。

『お前、この車は何だ？』

凧が不安そうに聞いてくる。しばらく考えて答えた。

『走る棺桶みたいなものかな、怖いのか？』

『わ・私には、こ・怖い物なんか無い』

『じゃあ、そのちっこい体をシートに沈めてシートベルトを締めてくれ』

『このイス硬いぞ』

凧が文句を言うと、

『凧のお尻の皮が剥けちゃったら可哀そうだもんね』

と言いながら潮さんがシートにジャストサイズの長方形のクッションをシートに載せた。

『後の事は全て任せなさい、出来るだけ早く帰って来るのよ』

潮さんには全てお見通しなのだろうと確信した。

『それと、明日から2〜3日、ターちゃんを連れていきたい所あるからお店の方はお休みしてね。凧の事ヨロシクね。凧ちゃんも大好きなお兄様の言う事良く聞くのよ』

潮さんが言うと、凧の顔が少し赤くなった気がしたが気にせず車を出した。

『蛙の子はやっぱり蛙ね。仁』

車を見送りながら潮さんが呟いた。

しばらく車の調子や挙動を確かめながら京浜道路を走り環状線に入る。

『悪いけれど窓を開けるぞ』

風を受けながら走るのが俺のスタイルだった。凧は詰まらなそうに外を見ていた。

『凧ちゃんは、まだ学生だろう何処の学校なんだ』

『「ちゃん」はいらない、凧でいい。白百合学園だ』

『すごいな、でもそれが普通なんだろうな、有名な小・中・高一貫教育のお嬢様学校だよな。中等部なのか？』

『中等部じゃない、高等部だ』

『えっ、でも凧はまだ確か』

『15歳だ、飛び級したんだよ』

『へえ、頭すごく良いんだな。俺の事もよかったら名前か何かで呼んでくれないか。お前じゃなくてさ』

『兄貴』

よく聞き取れなかったので聞き返そうとすると。

『じゃ、しかたない今から、お前の事を兄貴と呼んでやってもいいぞ』

『兄貴か、了承した。』

少し笑いながら言う。

『なんだ、文句でもあるのか』

『いや別に』

凧とはちゃんと話した事があまり無かったが本当は素直で良い子なんだなと思った。

ヤマングウだけどな（ヤマングウとは島の言葉でお転婆と言う意味だ）

『あ、兄貴は何処の学校に通っていたのだ？』

『俺か、地元の学校だ』

『どんな感じだったんだ』

『どんなって、学生の頃は楽しい事なんて何も無かったなあ、休みは親父に連れまわされていたしな』

『凧はどうなんだよ』

『私は、詰まらなくは無いが』

微妙な返事だった。

かなりのハイペースで走っていたので白と黒のツートンの車が追いかけてきた。

『前の車左に寄せて止まりなさい』

潮さんの後の事は全て任せろの言葉を信じてアクセルを開ける。

前を大型トラックが平行して2台走っている、ドアミラーを倒し。

ほんの少しトラックの間が空いた瞬間を見逃さず2台のトラックの間を矢の様にすり抜ける。

トラックと車の間は5センチ位だったのだろうか。

それ以上追って来る事は無かった。

風を見ると固まっていた。

『ごめんな、怖かったか』

『こ、怖いわけ無いじゃないか。お姉ちゃんの運転の方がもつとすごいぞ』

やっぱり潮さんはヤンチャらしい。

しばらく走ると突然携帯がなった。潮さんだった。

『その先のインターの近くで待ち伏せしているから迂回しなさい』

本当にこの人はスパイ衛星でもと思うと本当に持っていそうで寒気がした。

仕方なく迂回して高速にアクセスする事にした。

高速に乗りしばらく走り給油をかねて一休みする。

俺が車のドアに寄りかかりながら空を見ていると、飲み物を買に行き戻ってきた風が話しかけてきた。

『兄貴は沖縄の島に住んでいたんだろ。どんな所なんだ？』

『そうだな、海が綺麗で太陽が輝いていて空がでかくて夜は満点の星空で。人はみな優しく、とてもゆっくりとした時間が流れている所だ』

『そうか、いい所なんだな帰りたいか』

『ああ、いつかきつとな。そろそろ行くぞ』

時間的には、まだ余裕があったが早め早めはいいことなのである。

交通法規など完全無視して白と黒の車をちぎりながら進む。

これで潮さんの言葉が冗談なら確実に塀の中だろうなと考える。

凧はまだ、詰まらなそうに外を見ていた。

『詰まらなそうだな』

『別に』

『しょうがねえなあ』

長野に入る前に高速を下りる。

『何処に行くんだ？ まだ先だぞ』

『少し寄り道だ、凧はジェットコースターとか好きか、潮さんの車はそんな凄かったのか』

『そうだな、こうゴーって壁が寄ってきて、ドンッて車が言うんだ』
潮さんでどんな運転しているんだ……

しばらく走るとそこは親父に度々連れて来られた。

走り屋さんと言われる人が集まる有名な峠道だった。

メガネ橋の近くで車を止める。

『あの、レンガの橋はなんだ』

『あれか、昔の鉄道の橋だよ、メガネ橋と言ってかなり有名だぞ』
『じゃ、行くぞ』

アクセルを開け、車を軽くスライドさせながらコーナーを抜ける。

『それ、どうだ』

『それ、それ、それ』

『ほら、ほら、行くぞ』

コーナーの度にテンションを上げ叫ぶ。

時々、走り屋らしい車とすれ違う、日中なのでそれ程多くは無いが。

『バカ、バカ』

『止める、止める』

『行け、行け』

しばらくすると凧も笑い始めた。

近くで馬鹿をやられると、その馬鹿は伝染する。

途中で止まって少し休む事にした。

そして通り過ぎる走り屋や止まって遠巻きに見ている車の走り屋たちは、口々にほぼ同じ事を言っていた。

『なんだ、見ない顔だな、それにあの古い車なんだ』

『おい、あれって伝説のクイーンシルビアじゃないか？』

『クイーン的車だぞあれ、あの伝説の』

『それに、あの派手なオレンジのキャップにあのメガネ「キッド」じゃないか？』

『なんでクイーンのをキッドがこりやすげーぞ』

その後、大騒ぎになった事は知る由も無かった。

『そろそろ行くか、本気で飛ばすぞ。寄り道し過ぎて時間があまり無いからな』

何年かぶりに全開で走った。

ケイサツは1台も来なかった、たぶん潮さんだろう。

俺が真剣な顔でいたせいか、凧も何もしゃべらなかった。

長野市内の大きなホテルの駐車場には大型バスが何台も止まっていた。

タイヤを鳴らしながらホテルの入り口に車を着けるとロビーに居たお客や生徒が一斉にこっちを見た。

『凧、着いたぞ』

返事が無い、気にせず車から降りてトランクの大きなバックを取り出し肩に掛けて、助手席のドアを開け。

もう一度、凧に声を掛ける。

『凧、着いたぞ』

肩をゆするとハツとして俺の顔を見上げて叫んだ。

『兄貴のバカ！』

しゃべらないのではなくしゃべらなかったようだ。

立とうとしたが立てないらしい。モゾモゾしながら『あれ、あれ』

と言っている。

『風お嬢様、失礼します』

シートベルトを外し、肩にバックを担いだまま、風を抱き上げた。海も軽かったけれど風は鳥の羽の様だった。

嫌がる素振りは見せなかったが、恥ずかしいのか少し顔が赤くなっている。

お嬢様抱っこの状態でロビーに入ると視線が集中した。

『わあ、風ちゃんが来た』

同級生が騒いでいた。

ロビーのソファーに風を座らせ横にバックを置くと友達が集まってきた。

『風をよろしくお願いいたします』

同級生の女の子達に、軽く会釈をして立ち去ろうとする。

『兄貴、ありがとう』

軽く手を上げて合図をして車に向かう。

『風ちゃん、あの男の方、どちら様なの？』

『ああ、もしかしてあの方が、あのお兄様なの？』

『キヤアー』

などと言う声が聞こえてきた。

その後、全開で峠を飛ばす今日は本当に人が多かったが、そんな事気にしている時間は無かった。

俺は、あの峠のメガネ橋の下で携帯で写メを撮っていた。やけに人が多いなと思いながら。

何故、こんな事をしているかと言うと。

風を抱きかかえてロビーを歩いている時に、風が耳元でこんな事を言ったからだ。

『あのメガネ橋の写真が欲しいから、帰りに撮って来てくれ』

お嬢様はやはり、少しわがままだった。

『本当に、しょうがねえなあなのだ』

潮さんに言われたとおり、水神のビルの駐車場に車を止め。

管理人に車のキーを預け店に向かい猛ダッシュした。

息を切らして店に入ると『遅かったな』と先輩が言った。

『遅れて本当にスイマセンでした。』

返事をしてキツチンに入る。

『何していたんだ？ 今日』

『ちよつと長野まで』

『如月、お前冗談も程々にしろよ、馬鹿かお前は』

まったく信じてもらえなかった。当然である。帰りに撮ってきたメ
ガネ橋の写真を見せると。

『お前、壊れているだろう』

一言で一蹴されてしまった。

仕事を終え、潮さんに言われたとおり、先輩に明日から2、3日、
急用の為休みをもらいたい事を告げる。

『お前、最近、弛んでるな。女が来るところだからな、でもしよ
うがないか。ビシッと決めて来いよ』

変な勘違いされてしまった。

俺ですら何の用事が知らないのである。

その夜、ネットなどでは、大騒ぎになっていた事を俺は知らなかつ
た。

『クイーンが帰ってきた、いやキッドだ』

『キッドはやっぱりキングとクイーンのか？』

『クイーンの愛車にキッドが』

等々その大騒ぎのネットを潮さんは見ながら、微笑んだ。

『クイーンがキングに出会った時には、キングには、もう可愛らし
いお姫様が居たのよ』

その晩の峠はお祭り騒ぎだったらしい。

そんなお祭り騒ぎも、吹っ飛ぶほど大変な事が、後に俺の身に起こ
る事を誰も知らなかった。

ラボ - 1

俺は殴られた頬を腫らしながら、半べその海とイタリアンシェフ直伝の特製チーズリゾットを屋敷のキッチンで床に座りながら2人で食べていた。

話は1週間前の朝に遡る。

長野から帰った翌日キルシュが来て潮さんに呼び出された。いつもの様に森を抜け「水の宮殿」の様な屋敷に向かう。

しかし、屋敷には入らずその先の森の中に在るコンクリート打放しの建物に案内される。

壁には「水神第2ラボ」と書いてある研究室か何かか？

「キルシュ、このコンクリートの塊みたいな厳ついこの建物は何なんだ」

「ああ、潮の研究室だよ」

「研究室？ 何を研究しているんだ」

「俺らみたいな力の研究だ」

「俺らって鬼や水の力か」

「そうだ、アイツは探求魔人だからな」

「探求魔人って、潮さんの場合、冗談に聞こえない所が怖いな」

「誰が、魔人ですって失礼ね」

何重にもなった扉から潮さんが出てきた。

「ここは、普段あまり使っていないのだけれど、今回は何が起こるか分からないから、屋敷から離れたここを選んだの、万が一何かがあってもすぐに対応できるしね。」

「万が一って怖いですね」

それが現実の物になるうとは誰も思わなかったのだ。

「隆羅、冗談は言わないで」

潮さんが俺を名前で呼ぶなんて本当に真剣なんだ、そんな事を思い

ながらラボの中に入ると棚の上に小さなフォトスタンドがあった。

『この綺麗な人は、誰ですか』

『母よ。ここは元々母のラボだったの』

ラボの中には、最先端の医療機器と思えるものが殆どそろっていた。それは、どんなオペでさえすぐに出来てしまうくらい。そして、その他にも見た事も無い設備や機器が数多くあった。『あの機械は何ですか』

『あれは私達が造った気の流れを見るものよ。全ての力は気の流れと連動しているの』

『隆羅、これから私の言う事をきちんと聞いてちょうだい』

潮さんが真っ直ぐに隆羅の目を見て一呼吸おいて話し出した。

『本当に何が起こるか分からないわ、その覚悟は出来ているの？』

『覚悟って言われても、そんな急に困るなあ。大丈夫ですよ、嫌だと言っても調べるでしょう』

『お気楽ね』

『気楽な訳無いじゃないですか。自分の体の中にある得体の知れない物を弄るんですよ、怖いはず無いじゃないですか』

『それはそうよね。隆羅にも怖い物あるんだ』

『怖い物だらけですよ、なんたつて俺ヘタレですから』

『うふふ。そうね、そうだったわ』

少しずつ緊張が解けていくのを感じた。

『ターちゃんって本当に分からないわね。鋭いのか鈍感なんだか』

『よく言われますよ。人の事に対してはよく気付くのに、自分の事に関してはヘタレだって』

『じゃあ、手順を説明するわね、今日はあなたの体を徹底的に調べさせてもらうわ』

『いいですよ、潮さんにはもう丸裸にされてますから』

『あなたこんな時に、よくそんな事を言っていられるわね、本当にヘタレなの？』

『ホンマもののヘタレですよ』

『ここからが本題よ。明日、あなたの封印を一部解き力を解放する実験をするわ』

潮さんの表情が強張り声のトーンが下がる。

『実験ですか？』

『実験って言うのは語弊があるかも知れなしけれど、予測は不可能なの。だからちゃんと覚悟していて欲しいの。判るわね』

『ナンクルナイサーですよ。潮さん』

『それは、どう言う意味なの？』

『島の言葉で、何とかなるさ気楽に行こうって感じです。俺の好きな言葉ですよ。今まで独りで島に飛び込んで生きてきて何とかならなかった事、一度も無いですから大丈夫ですよ』

『不思議な子ね、あなたが言うとな本当に大丈夫だと思えてくるから不思議ね』

『明後日には、元気で居られるはずよ、始めるわよ』

MRI、マルチスライスCT、その他、色々な検査が潮さんと会話のやり取りをしながら進んで行く。

『あなた、かなり骨折していた箇所があるのね』

『ああ、それは多分、バイク事故を起こした時のですよ』

『それと、肋骨に古い傷があるけど』

『そんな事まで解っちゃうんですか凄いですね。子どもの頃に大人に蹴り飛ばされた時の傷ですよ』

『大人に蹴り飛ばされたって何故？ そんな酷い事を？』

『俺、小さい頃から親父に連れられてカートやバイクのレースに出されていて、親父の出るレースにも連れて行かれていましたから。

周りはライバルが大人ばかりで。でも、俺の性格ってこんなじゃないですか、それに解っちゃうんですよ大人が考えている事が子どもだから上手く言えなくて、だから疎ましく思っていた大人もいっぱい居たんですよ。その中でも特に俺の事を気に入らない大人が居て、

そいつにレース前に誰も見ていない所で思いつき蹴り飛ばされたんですよ。多分、その時じゃないかな。お陰でレースは散々で親父にまでボコボコにされたし』

『何故、お父さんに言わなかったの？』

『言えば大騒ぎになるだろうし、お袋が心配しますから。お袋を泣かせたら、また親父にボコボコですよ。親父はお袋命ですからね』

『そうなの、じゃ学校はどうだったの友達いっぱい楽しかったんじゃない？』

俺は何も答えなかった。

『違うの？』

あまり答えなくなかったのだと思う、無意識のうちに話題を変えていた。

『そう言えば、風は今日、学校へ行きましたか？』

『ええ、とても楽しそうに、なんで』

『いや、長野に行った時は車の中で、とても詰まらなそうな顔していましたから』

『そうなの、おそらく飛び級しているから回りはみんな年上の子ばかりだからね、子どもの頃の1、2歳の差って大きいわよね』

『そうですね』

『でも、今日は楽しそうに行ったわよ、ターちゃんのお陰かしら』

『俺は、何もしていませんよ』

『そうなのかしら、帰ってきてから、ずーとあなたの話ばかりしていたわよ。大きなトラックの間をすり抜けたとか、ジェットコースター見たかったとか。メガネ橋の写真を見せられたわ。峠に行ったのね』

『ちょっとした寄り道ですよ。潮さんもかなりヤンチャだったんですね、車に乗ってよく判りました。それとケイサツの件ありがとうございました』

『別にそれはいいのよ気にしないで、こっちが無理矢理頼んだ事だしね。ヤンチャだったのは昔の話よ、ちよっとだけね』

『ちよつとですか？　かなりでしょう、それに今もね』

『本当にターちゃんには敵わないわね』

『いやいや、潮さんに勝てる人なんて居ないですよ』

そんな会話をしている間にも検査は順調に進み。

頭から足の先まで電極やコードを付けられて気の流れを見る機器の検査を始める。

『これじゃまるで実験動物のサルみたいですね。ウツキーなんちゃって』

『ふざけないの行くわよ』

悪ふざけでもしていないと押し潰されそうな位、ラボの中は重い空気がたった。

5分が過ぎ、10分が経ち。

潮さんの表情が段々険しくなっていた。

『これじゃ、この子の体は何故』

『それに、なんなのこれは有り得ないわ』

『この状態で、封印を全て解いてしまつたらこの子は、死んで……』

潮さんが唇を噛み締めようやく検査が終わった。

『どうでした？　何か解りましたか俺の体』

『それが、よく解らないのこんな事初めてだわ』

『解らないってそれじゃ、検査の意味が』

『解つた事も少しあるの。それはあなたの一族の力がとても特殊だという事よ。普通の退魔師は自分の強い気をぶつけて鬼の力を滅するの。でも、あなた達はその逆よ鬼の力を吸収してしまうの。でも問題はここからよ。鬼の力なんて基本的に溜め込む事なんて出来ないわ。それをどうしているのか全く解らないのよ。それとこれはあなたの体しか診てないからハッキリとは言えない事なんだけれど、もう1つ薄っすらとだけ別系統の気の流れがあるの。それもなんだか解らないわ』

『俺の体は、特殊中の特殊って事ですか』

『そうね。それと島で襲われた時、雷見たいのが落ちたって言うていたわよね。それにあなたシャワーを浴びて感電したわよね。有り得ないのよ電気なんて、雷は神鳴りと書いて昔から神が鳴らす物と決まっているの。ますます明日、一部だけでも封印を解くのが怖くなってきたわ』

『大丈夫ですよ。この日の為に今まで痛い思いや辛い思いして来たんですよ。このままじゃ誰も守れないから。昔の俺には何も無かったけれど今はどうしても守りたいモノが有るんです。お願いします、どうなっても構わないから俺に力を下さい』

『あなた、どうなっても構わないって、万が一の事があつたらどうするの？』

『お袋達には島に帰ったと伝えて下さい。潮さんの言う事なら信じる筈ですから』

『それでいいの本当に？』

『良いです。ナンクルナイサーですよ』

『本当に、あなたには敵わないわね。判ったわ。明日頑張りましよう』

『お願いします』

その晩はラボに泊らせてもらう事にした。

『こんな所で本当にいいの？ 屋敷かアパートへ戻って良いのよ』

『ここで良いです。面倒くさいですし』

『変な子ね』

出入りはこのカードキーで出来るからとカードを受け取った。

本当は、とても不安で怖くてしょうがなかったのだ。

もしアパートへ戻ったらそのまま逃げ出してしまえそうで。

死ぬかもしれないという事も怖かったが、それ以上に失ってしまうかも知れない事が耐えられなかった。

なかなか寝付かれず、なんとなく外に出てラボの壁にもたれて芝の上座って夜空を見上げた。

月がとても綺麗だった。

少しすると誰かが歩いて近づいてくる気配を感じた。

こんな遅い時間に誰だろう、月明かりに照らされて見えて来たのは海の姿だった。

『海、こんな時簡にどうしたんだ？』

『べ、別に散歩だよ』

『そっか、散歩か。少し座るか』

手で軽く芝生を叩いた。

『うん』

海が俺の横に座った。

『月がとても綺麗だな。島でも綺麗に見えているかなあ』

『隆羅、帰りたいのか？』

『どうなんだろう。今は判らないや』

『そうなのか？』

『ああ』

今は島よりも好きなモノが出来たからと言いかけて止めた。
海を見ると僅かだが震えていた。

『海、寒いのか？』

『違う怖い』

『怖い？ 何がだよ。何も心配する事無いじゃないか』

海がとても不安になっていいる事に気が付いた。

『お母さんもお姉ちゃんみたいに研究者だったの。今回みたいにお姉ちゃんとか何を調べていて、そして調査中に事故が起きて死んじやったの。だからもし隆羅に何かあったら』

『そうだったのか』

何も言葉を続けられなかった。

『だって隆羅が、隆羅の事が……』

月明かりの下、海がその綺麗な顔を俺にまっすぐ向けて静かに目を閉じた。

『ゴメンな』

心の中で囁きながら、海のおでこに軽くキスをした。

今の俺にはこんな事くらいしか出来なかった。

『ありがとう。おやすみ』

海と別れた。

腹が決まった。

やるしかないのだ大切なモノを守る為にはどんな物かも解らない力をねじ伏せて。

ラボ - 2

翌日は、晴天のとても澄んだ青空だった。

潮さんとキルシュがラボに来たのはもう日がかなり高くなってからだった。

眠れなかったのか少し疲れた顔をしていた。

『おはようございます』

『おはよう隆羅は、良く眠れたの』

『はい、爆睡でした。』

本当だった不謹慎かもしれないが海の顔を見たら全てどうでもよくなってしまったのだ。

『潮さんそんな不景気な顔してないでガツンと行きましょうよ』

潮は少し驚いた顔をした。

『そうね、ガツンとね』

何か吹っ切れた様だった。

『本当にあなたって不思議ね』

手順について説明を受ける。

『これから下の部屋で始めるわ。隆羅の右腕の封印を遮断するの無理矢理の荒業だから必要最小限の解除よ。キルシュの力を使うわ。』

その為にここ数日、特別な訓練をさせていたの。キルシュの鬼の力を隆羅の腕に入れて一時的に鬼の力を増幅させてその力で封印を遮断するの。腕に入れる時にかなり痛むけど大丈夫かしら』

『腕に入れるって噛み付くと言う事ですよね』

『そうよ』

『なら大丈夫です。実験済みですから、なあキルシュ』

『ああ』

キルシュは俺から顔を背けて唸った。

『へんな2人ね、でもお似合いよ』

『潮さんサクツと行きましょう。サクツと』

このとても嫌な感じを早く終らせたかったのだ。その嫌な感じが現実の物となってしまうのだが。

ラボの地下の部屋は、まるで映画の中のCIAやFBI、KGBが使いそうな部屋だった。

とても厚い壁で、中が良く見える大きなぶ厚そうなガラス窓がある。2重になっていて中側はアクリルか何かだろう中に入り叩いてみるとガラスではなかった。

床は柔らかい素材で壁には一面緩衝材が貼り付けられていた。

拘束衣を着せられパイプ椅子に座れば立派な映画の一場面である。でも拘束衣じや無く俺はパンツ一枚で部屋の中に居た。

キルシュは目を閉じて精神を集中させていた。スピーカーから潮さんの声が流れた。

『キルシュ、隆羅、準備は良い。行くわよ』

俺もキルシュも頷いた。

右腕を横に突き出す。

キルシュが『行くぞ』と目で合図をする。

俺は目を閉じて『OK』の合図をした。

次の瞬間、右腕に激痛が走る。

奥歯を噛み締めて堪えるが気が流れ込んでいるせいか、左腕を噛まれた時など比べ物にならないくらい痛いだった。

『キルシュ離れなさい』

潮さんの声が聞こえた。

俺が最後に聞いた声だった。

『うわあああああああ』

右腕に文様が出たり消えたりしている。体が熱い島で覚醒した時よりも激しく。

『くつわあああああああ』

痛いのか苦しいのかさえ判らず狂った様にのた打ち回る。

体がビクン、ビクンと痙攣する。

『危ないキルシュ逃げて！』

潮さんの声は俺には聞こえない。キルシュは気を放出したせいあまり動く事が出来ず部屋の隅で丸くなった。

『バチン！』

体の中で何かが弾け座り込み右腕が何かに引き上げられるように伸ばされる。

右腕に文様が濃く浮かび上がる。

バリバリバリ！

放電現象が起こり俺の体から何本もの青い電気が立ち上る。

『駄目だ、もう誰も巻き込みたくない』

その時、俺の体を中心として「フワツ」と青白い光の玉が膨れ上がりキルシュや潮さんを包み込んだ。

次の瞬間、もの凄い音と共に激烈な光が全てを飲み込んだ。

ラボ全体に巨大な神鳴りが直撃したのだ。

その神鳴りは天井を突き破り地下まで届き全てのモノを一瞬に焼き尽くした。

『ん、ん……あつ、私は……』

どの位時間がたったのだろうか。

潮が気付き辺りを見回すラボの周りは木がなぎ倒され一面真っ黒焦げになっていた。

『隆羅！ キルシュ！』

潮がやっとの事で立ち上がると数メートル先に隆羅の体が横たわり、その向こうにキルシュが丸くなっていた。

あの球体の青白い光が包みこんだ場所だけ何事もなかったかの様に残っていた。

『隆羅！ 隆羅！ 大丈夫？』

潮が隆羅に駆け寄り声を掛け体を揺らす反応が無い。

『キルシュ大丈夫なの？』

潮の呼び声にキルシュが気付きフラフラと近づいて来る。

『何が起きたんだ』

『解らない。でも隆羅が』

キルシュが隆羅の胸に耳を当てる。

『こいつ、心臓が。まてかすかに動いている。呼吸もゆっくりだが
しているみたいだ』

海は屋敷の中で凄ましい光と音に遭遇した。

あまりの凄さにその場に座り込んでしまった。

そして窓の外に黒服の男達が数人ラボに向かって走るのを見た。

しばらくして黒服に運び込まれる隆羅の姿を見て、はっと我にかえり部屋を飛び出した。

凧も学園で、雷鳴と地響きを聞いていた。

『何、何が起きたの？』

生徒たちが一斉に悲鳴を上げた。

黒服がラボに着くと直ぐに隆羅は屋敷内の医療施設に運び込まれ精密検査が行われたが体には何処にも異常が見られなかった。

それは信じられない状態だった最新の医療技術でも原因は解らず、処置の施しようも無かった。

心臓の鼓動はとても間隔が長く、呼吸もゆっくりで息をしているのか判らない程であった。

一見寝ているようにしか見えない。

仮死状態と言った方が判りやすいかもしれない。

海が走り込んで来る。

集中治療室のガラスの向こうでピクリとも動かない隆羅を見て血の気が引き我を失った。

『隆羅に何があったの？ どうして動かないの？ もしかして……』
潮さんに掴みかかり泣き叫んだ。

『隆羅は？ 隆羅は！』

『お姉ちゃん、隆羅は？ 隆羅まで連れて行かないで』

『お願い、隆羅を連れて行かないで……』

『どうして？ なんで？ お母さんも、隆羅も、連れて行っちゃうの……』

もうそこから先は声にならなかった。

潮さんは呆然と立ち尽くした。

凧が帰ってきたのは隆羅が屋敷内の別の部屋に移されてからだった。

『ただいま』

屋敷の中は静まり返っていた。

近くにキルシュがいた。

『キルシュ、何があつたの？ あの雷凄かったね』

キルシュは立ち上がり凧の前を歩き出した。

『キルシュ何処へ行くの？ ついて来いって事なの？』

凧はキルシュの後をついて歩く。

普段使われていない部屋の前で潮さんが腕組みをしてドアにもたれているのが見えた。

『潮お姉ちゃん、ただいま、何かあつたの？』

『凧、ゴメンね』

凧がドアを開け中に入るとベッドに隆羅が横になっている、その向こうで海がベッドに突っ伏して泣いているのが見えた。

『兄貴、どうしたの何があつたの？』

凧が部屋に入るとドアの外で潮さんが顔を手で覆い声を殺して泣いていた。

『ねえ、お姉ちゃん。兄貴どうしたの？ どうして動かないのまさか……』

そこでかろうじて海が首を横に振った。

『大丈夫だから』

『大丈夫って。何が大丈夫なの全然動かないじゃん。まるで死んじやった見たいじゃん』

海の涙声を聞いて凧が泣き叫んだ。

『嫌だ！ 嫌だ！ 起きてよ。起きてよ！ 兄貴！』

隆羅の体を揺さぶるが全く反応が無かった。

後ろから潮さんが凧を抱きしめた。

『海、凧、本当にゴメンなさい』

3人が抱き合うように泣き崩れた。

ラボ - 3

翌朝になっても、隆羅は目覚めなかった。

海がベッドの脇で凧は近くのソファで寝ていた。

潮さんが部屋に入ってきて凧を起こした。

『凧、起きなさい。学校の時間よ』

凧が眠たそうに目を擦りながらゆっくり起きた。

『今日は休む、兄貴のそばにいる』

『駄目よ、そんな事言ったら、隆羅に怒られるわよ』

『なんで、兄貴が怒るの？』

『凧が楽しそうに学校へ行ったらって話したら、隆羅とても嬉しそうな顔をしてたもの。こんな時だからこそ、ちゃんとしないとね。お願い』

『うん、分かった。兄貴の事、よろしくね』

凧が学校に行く準備をしに部屋から出ていく。

『海も起きて。少しでも何か食べないと駄目よ、昨日から何も食べていないでしょ』

『食べたくない』

『駄目よ、食堂に軽めの食べ物があるから食べてきなさい』

海は、ため息をつきながら食堂へ歩き出だした。

潮がベッドの脇に腰を下ろした。

『どうすれば、目覚めるのかしら。隆羅ゴメンね』

隆羅の頭を撫でた。

それから2日がたったが進展はまったく見られなかった。

海は疲れて隆羅のベッドにもたれて寝てしまう。

そして海は夢を見た。

『あらあら、海は何をそんなに泣いているの？ 泣き虫さんね』
それは海の母だった優しそうに笑っている。

『ママ、ママなの？』

『心からその人を呼びなさい。海が選んだ人ならきつと答えてくれるはずよ。今はその人の事を信じてあげなさい。分かった』
とても優しい笑顔だった。

目が覚め顔を上げ隆羅の顔を見るが眠ったままだった。

手を握ると少し強い口調で言った。

『隆羅、お願い。お願いだから返事をして！ お願いだから「しよ
うがねえなあ」って笑って。お願い……』

胸が詰まってそれ以上、言葉が出てこなかった。

午後、海が屋敷の廊下を歩いていると学校帰りの風が向こうから歩いてきた。

『兄貴の様子は？』

海は首を横に振った。

窓の外を見ながら風に海が言った。

『風、一緒に行ってくれない』

『どこに？』

海の目線の先はあのラボの方角だった。

『ひとりじゃ怖いの、お願い』

『わかった。一緒に見に行こう、お姉ちゃん』

屋敷を出てラボの方へ2人で歩き出す。

木々を抜けるとそこには信じられない様な光景があった。

直径30メートル位の円形状に周りの木はなぎ倒され、地面はえぐられ真っ黒焦げになっている。

そこにラボがあつたなんて信じられなかった。

ラボが在ったであろう円の中心に辛うじて建物らしき床が丸く残っていた。

海は立ち尽くし風は驚きのあまりへたり込んで声が出なかった。
しばらくすると後ろから潮の聲がした。

『まるで、天の業火かインドラの矢ね。今でも信じられないわ。今、

こうして立っていられる事が。やはり、隆羅には神の力が宿っているの。あのもう1つの気の流れがそうだったんだわ。その力が暴走してしまったの私の所為で。でも、隆羅は私たちを守ってくれた。隆羅の強い想いが鍵の力を解放して青白いとても優しい光で包み込んで。誰も、もう巻き込みたくないという隆羅の想いね。あの床が残っている所がそうよ」

その時、潮の携帯が鳴った。

『何？ その件は判ったわ、直ぐに行くから』

『急用が出来て、これでお姉ちゃんに行くけど体冷やさない様にしなさい』

そういい残して潮はラボを後にする。

その日はいつになく涼しかった。

『お姉ちゃん、あのラボってお母さんのラボだったんでしょ』

『そうよ、お母さんのラボよ』

『お姉ちゃん、お母さんってどんな人だったの？』

『そうね、凧はお母さんの事よく憶えてないのよね。凧を産んですぐ亡くなっちゃたから。とても優しくって綺麗な人だったわ。あのラボに写真があったんだけど燃えちゃったみたいね』

ラボの床が残っている場所を海を見ると空から紙切れが1枚ヒラヒラと落ちてきた。

『えっ、まさか……』

直感だった。無意識のうちに海は走り出していた。

『お姉ちゃん、どうしたの？』

ラボの地下の床だった所に紙が落ちる。

拾い上げると回りは少し焼け焦げていたが、そこには母の笑顔があった。

夢が蘇える、涙が止めどなく流れ落ちた。

『お母さん、分かった。私信じる。ありがとう』

写真を胸に押し当てて膝を落として泣いた。

そして、事故から1週間が過ぎようとしていた。

海の疲労もピークだった、隆羅のベッドにもたれて深い眠りについていた。

『ん〜ん、あゝあ良く寝た』

俺が目覚めるとそこは屋敷の中だった。

『あれ、終ったのかな？』

横を見ると海が寝ていた。海を起こさない様にベッドから立ち上がる。

軽い目眩と頭痛がした。

『あの実験のせいかな。しかし、腹へったな』

腕を見ると傷は何処にも無く何も変わった所は無かった。

頭痛のする頭を擦りながらキッチンへ向かう。

『おお、さすが水無月家。全てそろっているぞ』

寝起きという事もあって胃に優しい物と思い。

お気に入りの歌を口ずさみながら、チーズリゾットを作り始める。

20分程でリゾットが出来上がり、皿に盛りスプーンを探す。

『あれ、スプーンは何処に入っているんだ？』

海がようやく目を覚めると目の前に居る筈の隆羅の姿が見えなかった。

『隆羅？ えっ何処？』

部屋を出て屋敷の中を探し回っているとキッチンから歌が聞こえる隆羅の声だった。

走り出しドアから中を伺う。

『あつた』

ようやくスプーンを見つけ振り返るとドアの所に海が居た。

『海、どうしたそんな顔して？ あ、これはあげないぞ』

『馬鹿あ！！』

少しからかう様に海に言っていると左頬にストレートが飛んできた。

たまらず後ろに尻餅をついた。

『痛たたた……お前はなあ、いつも、いつも、いつも』

『これは、絶対にやらないからな』

立ち上がり左手でリゾットの皿を持って、俺が言い放ったとたん海が大粒の涙を流し始めた。

『えっ？』

『隆羅！ 隆羅！ 隆羅！』

名前を叫びながら抱きついてきた。

後ろに押し倒され「ドンツ」と壁に背中をぶつけしゃがみ込む。寸での所でリゾットをこぼさずに済んだ。

『おい、危ないって。おい、こぼれるだろう』

『馬鹿、馬鹿、馬鹿』

俺の胸を叩いて。

海は俺の胸に顔を埋め大声を上げて泣いていた。

少しして落ち着いてきたのか。

それでもまだしゃくり上げていた。

その時『クウ』とあの可愛い音が聞こえてきた。

『しょうがねえなあ。一緒に食べるか』

『うぐ、食べりゅう』

言葉になってなかった。

2人してキッチンの床に座り込み壁にもたれながらリゾットを食べた。

騒ぎを聞きつけて潮さんと風がキッチンの方へ走ってくる。

ドアから覗き込むと海が俺の胸に顔を埋め泣いているのが見えた。

潮さんが後ろから風を抱きしめ2人で泣いていた。

『よかった。本当によかった』

『兄貴……』

その夜、潮さんから何があり何が起きたのかを全て聞いた。

俺の体に神の力が宿っているかも知れない事も。

翌日、仕事に向かう、店に入るといきなり『如月、お前はクビだ！』と先輩に怒鳴られた。

『遅刻はする、勝手に休みは取る。俺はお前に島でそんな事を教えた覚えは無いぞ』

『すいませんでした。本当にすいませんでした』

あまりにの事に咄嗟に土下座をしていた。

『ふっふふ、嘘だよ。頭を上げて立て。あの海ちゃんのお姉さんに話は聞いたよ、事故だって大変だったな。ところで話は変わるが、海ちゃんのお姉ちゃん綺麗な人だなあ。独身か？ 今度、俺にちゃんと紹介しろよ。さあ、仕事するぞ』

先輩が親指を立ててウインクした。

事故ってどんな話したんだろう。どうせ、俺が海に殴られて壁に頭をぶつけてしばらく起きなかったとか、そんなヘタレな事なんだろうなあと考えていた。

後で先輩に聞くとほぼ、想像通りだった。

潮さんてやつぱり、ひどい。

そして季節が移ろいだいぶ秋らしくなってきた。

凧の友達 - 1

ラボでの事故からしばらく経ったある日、『潮さんが呼んでいるぞ』とキルシュが俺の部屋に来た。

今度は何の用事だろう、本当に勘弁してくれと思っていた。

渋々、屋敷に向かう。

いつもの応接間に潮さんが座っていた。

『何の用ですか？』

『そんな、渋い顔してまた私に何かやらされると思っているんですよ。ターちゃんは。今日は、私の用事がある訳じゃないの。ほら出てきて自分で言いなさい』

潮さんが考えている通りで、そこまで判っているのなら何て考えていると潮さんの影から凧が顔を出した。

『兄貴、体はもう大丈夫なの？』

『ああ、大丈夫だけど』

『もう、そんな事じゃないでしょ。ちゃんと話しなさい』

潮さんがもどかしそうにしている凧に突っ込んだ。

『う、うん。兄貴、今度の日曜日あいてる？』

『特に何も用事や予定は無かったはずだが』

『じゃ、お願いがあるの私をドライブに連れて行って……も一緒に』

『えっ？ 誰と一緒に？』

『その、友達も一緒に』

凧が申し訳なさそうに俯く、なんでも前回の長野の一件で何人かの友達と仲良くなり俺の事を紹介して欲しいと言われ、勢いでみんな一緒にドライブに行こうと言う話しになってしまったらしいのだが、約束の日が近づいても言い出せずに潮さんに相談したらしい。

『まったく。しょうがねえなあ、何処に行きたいんだ？』

『メガネ橋の所なんだけど』

『判った、今度の日曜日だな連れて行ってやる。大丈夫だ』

内心は、出来ればあそこには2度と行きたくなかったのだが風からの頼みごとを断る理由も無い。

『ほら、お姉ちゃんが言ったとおりでしょ「しょうがねえなあ」ってOKしてくれるって。ターちゃんは優しいものね、うふふ』

『この埋め合わせは必ずするから、よろしくねターちゃん』
俺がため息をつくとき潮さんが悪戯顔でウィンクした。

と言う訳で日曜の朝、キルシュが迎えに来て。

あの格好で、俺はガレージの前に立っていた。

そこに潮さんが現れて俺をまじまじと上から下へ下から上へと見ている。

『うーん、このキャップは目立つから駄目よ、こっちにきなさい』
『あつ、そのキャップは』

いきなり潮さんがキャップを取り上げ、持っていた黒いキャップを被らされた。

『心配しなくても後でちゃんと返すわよ。なんてたって大事なキャップだもんね』

なんで大事なって、まあいいか。

『それと、あの車も目立つから、今日はこっちの車を使いなさい』
4ドアだが、やはりヤンチャ仕様には変わりなかった。

車内を覗くと風は助手席に座っていて、まあシートは普通のシートだった。

『シートはノーマルに替えておいたから』
って替えたんですか潮さん。

『あまり無茶しちゃ駄目よ』
『いやいや、風の友達もいるんだし無茶はしませんよ』

『それもそうね。それに今日はフオローなしだからね』
『了解しました』

『それと、あの辺、最近ガラの悪いの多いから気を付けてね。喧嘩なんかしちゃ駄目よ、怪我しちゃうから』

『喧嘩なんかしないですよ、怪我したくないし。俺ヘタレですから。じゃ行つて来ます』

手で潮さんに合図をして車を出した。

『あなたがじゃ無くて、相手がよ』

『何故だ？』

キルシュが不思議そうに聞いた。

『あの子は自分のポテンシャルを何も解っていないわ。あの実験の前に、あの子の体の状態を確かめる為に私は本気であの子の頭めがけて回し蹴りを入れたわ。でも、咄嗟に上段の受けをして衝撃を吸収する為に無意識のうちに横に飛んだわ。本人は吹き飛ばされたと思っっているみたいだけれどね。島で古武道をやらされたと言っていたけど、ドライビングテクニクもそう。嫌々ながらもあの子は体で覚えた事は自然に吸収して自分の物にしてしまうのよ。だから本人は普通だと思つてしまい、それが凄い事だとは思えないで居るんだと思うの。本当はとんでもなく凄い事なのにね。違いが判る人なら、あの子のポテンシャルを見抜いてとことん鍛え抜いてみようと思うでしょうね。たぶん古武道の師範もそうだと思うの。だから私もついからかいたくなっちゃうんだけどね』

『そんな事が』

『キルシュいい。もし、あの子が喧嘩に巻き込まれても無意識の内に古武道を駆使して相手をねじ伏せてしまうでしょうね。あの子が切れていたら相手は大怪我じゃ多分すまないわ。その古武道の力があの力だつたらどうなるかしら、あの子が切れて体で覚えたあの力を無意識の内に使つたらあなたには止める自信があるの？ 私には無理よ。たぶん誰にも止められないわ。下手をすればここ横浜くらい簡単に一瞬で灰になるわよ』

考えただけでキルシュはゾツとした。

『あいつがヘタレで良かったな』

『そうね、でもこれからが要注意よ、大きすぎる力は必ず狙われるから』

そう、ひとつひとつの歯車が少しずつ噛みあい静かにそして確かに動き始めたのだ。

待ち合わせは風の通っている白百合学園の正門前だった。

『兄貴、学園までの道のりは大丈夫』

『完璧だ。もう何回も朝たたき起こされて、誰かさんを送りに行っているからな』

『えへへ、そうでした。ありがとうね』

屋敷から30分ほど学園の正門に着いた。

門の前で3人の女の子が待っていた。

1人はおさげでおとなしそうな女の子、その向こうにベリーショートでボーイッシュな女の子、最後の子はショートボブでメガネを掛けていた。

『おはよー』

『おはようございます。風さん』

風が挨拶をしながら笑顔で車を降りると女の子達が挨拶を返した。

風さんって風が年下だろおいおい。

後部座席に3人を乗せて車を出す、緊張した空気が車内を包む。

仕方なく俺から話し出した。

『風、とりあえず自己紹介からしような。俺は如月隆羅、宜しくね』

『私は、愛。祐天寺。愛ゆうてんじ。あいです』

ベリーショートの髪型のボーイッシュな子だ。

『日吉 璃子ひよし。るこです。瑠璃の璃に子どもの子って書きま
す。宜しくです』

メガネでウエーブのかかった髪の長い子だった。

『私は、小杉 千代子こすぎ。ちよこって言います。チヨコって呼
んでください』

おさげの子だ。

『風は学園でどんな感じなのかなあ』

『風ちゃんは、頭も良くて今学期からクラス委員長やって』

愛ちゃんが言う。

『すこし前までなんか凄く静かだったけれど、今はクラスのアイドルです』

璃子ちゃんが続ける。

『すごく元気で羨ましいです』

チヨコちゃんだ。

『楽しそうだな、とても。元気なのはいつもの事だけだな』

俺が笑っていると愛ちゃんが聞いてきた。

『何がおかしいのですか』

『元気って言えば、初対面の時、俺に何したと思う。不意打ちで後ろからドロップキックだぞおかしいだろ』

『ええ、ドロップキックってプロレスとかって言うのですか』

3人が声を合わせて驚いた。

『バ、バ、バカあ。兄貴、な、な、何をいきなり言ってるのよ』

凧が真っ赤になり下を向いた。

『凧、何を赤くなっているんだ。本当の事だろう』

『兄貴のバカ。あれはだって』

そう言いながら俺の肩をポカポカと叩いた。

『本当に仲がいいんですね、いいなあ』

璃子ちゃんが言った。

『いつも学園で凧ちゃんが話す事ってお兄様の事ばかりなんですよ』

『もう、愛も。もう、いいよ』

凧が困って赤くなっている。

『チヨコちゃんはおとなしんだなあ』

『あとう、お、お兄様は沖縄に居たんですよね』

『そうだよ、3年くらいかな。沖縄と言っても本島からずっと南の小さな島だけだね。みんな沖縄とかに行ったこと無いのかなあ。それとも海外の方が多いとか』

『あまり旅行とか行った事無いですよ。うちの学園はテストとか多いし長期の休みも補修とかあるし結構大変なんですよ』

愛ちゃんが言った。

『そうなのか大変なんだな』

『その島ってどんな所なんですか』

璃子ちゃんが聞いてきた。

『そうだな、海がとても綺麗で、空がでかくて、ゆっくりとした時間が流れているところかな』

『素敵です』

チヨコちゃんが言う。

『そうそう、俺の事は好きな様に呼んでもらって構わないぞ。でも、恥ずかしいから「お兄様」だけはよしてくれないか』

『私は、兄さんで、それと、兄さんなら私たちの事、呼び捨てでも構わないですよ。ねえ』

愛ちゃんが言うのと2人は『うん』と同意した。

『了承した。呼び捨てで良いんだね』

『ハイ』

3人が声をそろえた。

『じゃ、私はお兄さんで』

璃子ちゃんが言う。

『チヨコはお兄ちゃんでもいいですか。』

『構わないよ』

そんな話をしていると高速のインターが見えてきた。

今回は潮さんのフロアーなしと言うこともあり。それなりの速さで走っている。

これが普通なのだ。

高速に乗り速度を上げる、後ろの3人はいろんな話で盛り上がっていた。

『なあ、兄貴は沖縄の前は何処に居たんだ？』

『横浜だぞ。それも今のアパートの目と鼻の先だよ半年だったけど』

な。実家は埼玉にあるけどな』

『じゃ、埼玉で産まれたのか』

『いや、産まれたのは東京の文京だ』

『東京の文京ってお姉ちゃん達と居た所だ』

『そうなのか』

『うん、今の家の前は東京の文京に住んでいたって聞いた事あるもん。凧は小さかったからあまり憶えてないけれど』『そうなのか、あの辺は親父の庭みたいなのだったからな。上田動物園や近くの池でよく1人で遊んだぞ』

『えっ、1人でって、どうして』

『あの辺の店でレースの打ち上げがあって、詰まらないから1人で遊んでいたんだ。そう言えば、池の近くで不思議な女の子に逢ったような』

『兄さん、今どの辺なの』

愛の声で会話が遮られた。

『あと半分くらいかなあ、そろそろ休憩入れるぞ』

『楽しみだねジェットコースター』

愛が璃子に言った。

『ジェットコースターってもしかしてまた、あれをやれと凧の奴だな』

声には出さずため息をついて凧の方を見る。凧が申し訳なさそうに顔の前で手を合わせている。

『しょうがねえなあ』

給油をかねて休憩のためサービスエリアに寄る。

ガソリンを入れて車を駐車スペースに止めてベンチに座って空を見ていると3人娘がトイレから戻って来た。

『いいな、お兄さんって私も欲しかったな』

璃子が言った。

『私も、1人っ子だからなあ』

愛が続く。

『お兄ちゃんならチョコも欲しい』

『兄さんって兄弟いるんですか』

愛が聞いてきた。

『いるよ、妹が1人、「茉弥」って言うんだ』

『そうなんですか、いいな茉弥ちゃん』

璃子が羨ましそうに言った。

『そう言えば、兄さんって凧ちゃんの本当の兄さんじゃないんですよ。確かお姉さんの、こ、恋人とか』

愛が聞いてきた。

『ん、ん、友達かなあ』

微妙な返事をしてしまった。とりあえず微妙なのである。

『でも、凧ちゃんが、お姉ちゃんの彼氏って言っていましたよ』

璃子が突っ込む。まいった。

『出逢いは、何処ですか』

『私も聞きたい』

他の2人が興味津々の顔で話しに乗ってくる。

『島でだよ、沖縄の』

『きゃー、ロマンチック』

愛が叫んだ。あれがロマンチックなのかその片鱗も無かったが……

『で、2人は何処まで行ったんですか』

璃子がメガネの奥からキラキラと目を輝かせ聞いてくる。

引きまくって困り果てて何も答えられないでいる。

『兄貴、お待たせ』

凧が帰ってきた。ほっと胸を撫で下ろした。

『あれ、兄貴、顔赤いけどどうしたの』

『ん、いや別に』

人さし指で鼻の頭を掻いた。

3人はキヤーキヤーまだ騒いでいた。

『そろそろ行くぞ』

高速を降りて峠に向かう、メガネ橋の下で4人を下ろし1人で峠に向かった。

少しでも車のフィーリングを知りたかったのだ。

8割くらいパワーで何個かコーナーを抜けUターンして4人が待っているメガネ橋に向かった。

凧の友達 - 2

4人は橋をバックに写真を撮っていた。

そこに1台のヤンチャな車が近づき、中からデカイ男とチビな男が出て来た。

『ねえ、君達。ここで何しているの?』

『俺らとドライブしようよ。ねえ、ねえ』

デカ男とチビ男が口々に言った。

『もうすぐ、兄貴が来るから』

『兄貴なんてほつといて、俺らと行こうよ』

凧の手を掴んだ。

『離してください』

『離せ』『駄目』

3人が騒ぎ出した。

『あなた達、最低』

凧が強い口調で叫び、男の手を払い退けた。

『何をこらあ!』

チビ男が凄んだ。

メガネ橋に近づくともめているのが見えた。

4人の少し後ろに車を止めて近づいていく。

『どうしたんだ?』

4人が一斉に俺を呼んで俺の後ろに隠れるように周りこんだ。

『自分の連れのこの子達に何か用ですか?』

『あん、なんだてめえ』

デカ男が言った。

『このガキが、クソ生意気な口の聞き方しやがったんだよ』

凧を指差しながら凄む。後ろを振り向き、小声で何を言ったんだと聞く『最低』と凧が言った。

それだけで十分だった。

『何をゴチャゴチャやってやがるんだ。おい』
チビ男が叫んだ。

あまり離れると危ないと思い、少しだけ下がるように4人に指示する。

そして2人の男に向かって頭を下げた。

『この子達の非礼は謝りますから、申し訳ありませんでした』

『ふざけんな、なめてんのか？』

デカ男が胸座を掴んできた。

『ちゃんと謝っているじゃないですか』

『ざけんなあ』

デカ男の手を掴んで答えると俺を突き飛ばした。

バランスを崩して4人の前に尻餅をついた。

『このヘタレが、なま言つてんじゃねえぞ！』

¥

@#>『

その後の言葉はこの子たちに向けられた、聞くに堪えない言葉だった。

無性に怒りがこみ上げてくる。

俺の事は何とでも言えば良い、だけどこんな良い子達を侮辱するのは許さない。

この子達をこれ以上危険にさらす訳にいかなかった。

こいつ等には口で言ったのでは無理なのだ。

もの凄い怒りがこみ上げてくる。

それに反比例するかのように熱くなるのではなく何か体が中をスーと下がついていきとても冷めた感覚だった。

『謝っているじゃないですか』

Gパンについた土を払いながら立ち上がり無意識の内に半身の姿勢をとり、とても冷たく強い口調になっていた。

『やるのか、コラア』

デカ男がくわえたタバコを吐き捨て足で捻り潰した。

そして、手に持っているまだ開けていない缶コーヒーだろうか、それを俺の顔めがけて投げてきた。

それと同時に俺に向かって拳を上げて走りだす。

感覚が研ぎ澄まれている後ろで4人が耳を塞ぎ目を瞑ってしゃがむのがわかった。

怖くは無かった。

飛んで来た缶を上段の受けで右手の甲で弾き飛ばす。

一瞬、右腕に文様が現れ手の甲が光った。

「パァーン」炸裂音と共に缶はありえないスピードでガードレールに衝突し破裂し中身を撒き散らしてグシャリとつぶれた。

向かってきたデカ男はピタリと止まり尻餅をついた。

『消えろ、このクズ』

2人を睨みつけながら冷めた口調で言い放つと男達は慌てふためいて車で走り去った。

深呼吸をして振り返り4人に声を掛けた。

『もう安心だ、怖かったかゴメンな』

『兄貴、凄い!』

『兄さん、超力ツコいい!』

『お兄さん、素敵!』

『お兄ちゃん、大好き!』

口々に叫んだ。おいおい最近の子はみんなこんななのか、そこに赤いスポーツカーが止まった。

『その、お兄さんちよつといい?』

車の中から女の人が声を掛けてきた。

『この峠に「キッド」が来たって、本当?』

『さあ、最近はあまりここには来ないんで』

誤魔化して答える。

『クイーン的車探そう、こんなヘタレな子に聞いても無駄よ』
助手席の女の人がと言った。

『じゃあねえ』

このとき初めて、この間ここに來た事が大騒ぎになっているのを知ったのだ。

でもクイーンで誰だ。それに初対面でヘタレって少し凹んだ。

車に戻り4人に確認をする。

『ジェットコースターしなきゃ駄目か？』

『うん』

4人一斉に答える。

『しょうがねえなあ、行くか』

『イエーイ！』

4人とも楽しそうに腕を上突き上げた。

車に乗り込み全員にベルトを締めさせて峠の入り口に向かう。

『さあ、準備は良いか。行くぞ』

『イエーイ！』

4人とも楽しそうに、また腕を上突き上げた。

アクセルを開けて車をスライドさせながら進む。

『キヤーキヤーキヤー』

コーナーの度にとても楽しそうな声を上げる。

『楽しいのなら、しょうがねえか』

峠を越えて軽井沢駅に向かう。少し遅めの昼飯の為だ。

駅の近くの「カフェ　ていーだ」に車を止める。

この店は俺が「キッド」と呼ばれていた頃、親父によく連れて來られた馴染みの店だった。

店に入り、マスターが俺の顔を見るなり声を掛けてきた。

『キッ……た、隆羅じゃないか久しぶりだなあ、元気してたか？』

『マスター、いつものある？』

『あるぞ、今も、相変わらずだ』

マスターが答えると4人がキョトンとした顔をしていた。

『兄貴、ここ知ってるの?』

凧が聞いてきた。

『ああ、昔よく来た店だ』

『兄さん、いつものって何?』

『愛。カレーだよ、ここはカレーライスが絶品なんだ』

4人は顔を見合わせ、息を合わせて叫んだ。

『マスター、いつもの5つ』

『ハイよ、元気だなあ。みんな』

『ひとつ大盛りね』

食事を終え、4人はテーブルでマスターからサービスのお勧めスイーツを食べている。

俺はカウンターに呼ばれてマスターと話をしていた。

『おい、キッドお前、最近あの峠で何をした?』

『少し前に、あの中の1人を長野まで送る途中で寄り道したんだよ。ちよつと訳ありで、例の格好で』

『それだけかあ? お前』

『時間が無いのに、メガネ橋の写真が欲しいって言われたから。こっちから全開で峠を越えてメガネ橋に』

『それだな、大騒ぎだぞ』

『なあ、マスター。クイーンって誰だ?』

『お前の親父キングと張り合っていた凄腕の女の事だよ。何処かの令嬢で名前までは思い出せないな』

『それより、お前あの子達なんだ? まさか未成年はまずいぞ』

『違うよ。彼女の妹とその友達だよ』

本当のところ今は彼女では無いのだが、実は説明するのが面倒くさかったのだ。

『おい、お前。彼女って?』

マスターにヘッドロックを掛けられる。

『マスター声がでかいって、痛たたたた、痛いってば』

『おいキッド。今度絶対に連れて来いよ。連れて来て紹介しなかったら、お前の秘密ばらすからな』

なんで俺の周りの人って皆こん人ばかりなんだ。

店を後にして帰路に着く、帰りは大諸から高速で帰った。

クイーンか、マスターはどこかの令嬢って言ってたなあ。

ヤンチャな令嬢って、ある人の顔が浮かんで来たが。

深くは考えなかった。

アパートに着く頃にはすっかり忘れていた。

その夜は、屋敷に呼ばれ皆で食事した。

食事の後、俺は潮さんの書斎に居た。

『ターちゃん今日はありがとう。風も凄く喜んでいたわ。帰るなり機関銃の様にしゃべりまくっていたわよ、よほど楽しかったのね。』

『喜んでもらえればそれで良いですよ。俺も楽しかったし』

『そう言えば、あなた東京出身なのね、それも文京。これは何かの運命なのかしら』

『さあ、どうでしょう子どもの頃ですから』

『それと、何かあったの？ 峠で』

『ああ、ガラの悪いお兄さん達にちよつと絡まれて、お引取り願いました。何か？』

『それもそう何だけれど、缶が爆発したとかしないとか』

『ああ、俺も確かじゃないんですよね。久しぶりに半ギレでしたから』

潮の背中に冷たいものが走った。

『なんなの、分かる範囲でいいから』

『缶を投げ付けられて裏拳で弾き飛ばしたんですけど。その時、一瞬だけ文様が出て手の甲が光った気がするんですよ』

『隆羅、それ本当なの？』

『だから確かじゃ無いって、潮さんに今、言っただけじゃないですか』

『ちよつと来なさい』

潮さんが大きな本棚に向かい1冊の本を押し込むと、本棚が横にずれ始めた隠し扉になっているようだった。

本棚の向こうはともコンパクトだがラボのようだった。

『ここは、私しか知らないラボよ、少しいい』

従うしかない、いくつかの検査を受ける。

『おかしいわね。画像がぼやけるわ。あれ、これは何。隆羅あなた何を首に着けているの?』

『ああ、これですか「羅閃」ですよ』

『隆羅。「羅閃」ってなんでそんなものあなたが』

『この間、実家でお袋から』

『ちよつと見せて頂戴』

怖いのか潮さんは触れようとはしなかった。

『始めて見たわ、本当にこんな物があつたのね、あなたのお母様は何て言っていたの?』

『笛みたいなもので、気の込め方は知らないけど、2人の気が込められていれば、吹いた本人の画像が相手に伝わるとか……この間は、やって見せてくれたから分かったけど言葉にすると』

『やつぱりあなたは相変わらずね、もう。他には』

『魔除けにもなるって言っていました』

『そう、あまり表に出さない方が良いわね。大きな力や珍しいものは狙われやすいから、判った? あなたの安全の為よ』

そして「羅閃」を外してもう一度検査をした。

『判らないはやつぱり、この前と一緒に。ありがとう』

ラボのデスクの後ろのファイルの棚にいくつかの写真が飾ってあった。

その中の一枚に目が留まり近づき手に取ってみる。

写真は暗くて周りによく解らないが、とても綺麗な水色の光の玉が何かの中で光っていた。

『この写真は何ですか? 宝石か何かの光ですか』

『ああ、それは海よ』

『えっ、海って？』

『あの子は子どもの頃、両手の間で私達の水の力を具現化する事が出来たの、その写真よ。私達には水の力がある、でも皆同じじゃないの。それぞれに、特徴があるのよ。海の鍵の力はヒーリングがメイン、凧は声ね。そうローレライとかセイレーンみたいに人を惑わす力でも、まだ凧は幼いから力は強くないわ。そして私の力は内緒よ。うふふ』

頭の中を一本の光が走り、子どもの頃の事が鮮明に浮かんでくる。

『俺、子どもの頃にこの光と同じ光を見たことがあります』

『そんな筈は無いわ。隆羅、それ本当なの？ 誰にも見せるなって禁止していたはずなのに……』

『ええ、本当です。場所は上田の動物園の近くの池で』

曖昧だった記憶が鮮明に蘇える。

『詳しく話さない』

『親父のレースの打ち上げが毎回その辺りで行われていて、その日も打ち上げがありいつものように1人で遊んでいたんです。そして池の周りで遊んでいる時に泣いている少し年下の女の子が居て。俺普段は絶対そんな事しない筈なのに不思議な感じがして話かけたんです。「どうした、何をそんなに泣いているんだ？」ってそうしたら「探し物が見つからない」ってそれで一緒に探したんです。イヤリングか何かだったと思います。1時間ぐらい探して水際の草の中で俺が見つけてキラキラしてとても綺麗な物でした。渡すと「ありがとう」って「これは絶対に内緒だよ」って言って綺麗な光を見せてくれました』

潮さんが少しだけ何かを考えてから話し始めた。

『運命としか言い様が無いわね。それは間違いなく海よ、池の近くで海がふざけて私のイヤリングを片方失くしたの。その時、少少きつく言い過ぎて海が飛び出して居なくなっちゃたの必死に探すと池のほとりに居て。失くした筈のイヤリングを渡してくれたのとても

嬉しそうな顔で。あまりに嬉しうだから理由を聞いたわ。そうしたらとても優しい男の子と一緒に探してくれたって言っていたの。その少し前に母を亡くしていて、全く笑わない子になってしまっていたのにとっても不思議だったの。それからよ、海が変わり始めたのは。そう幼いあなたに出会ってから』

しばらく お互いに何もしゃべらなかつた。

潮さんが口を開いた。

『私達、一族には言い伝えがあるの、それは「光 見し者 共に歩み婚ぐ宿命なり」伝説的なものだと思っていたわ。光を具現化できたのは海ただ1人それも子どもの時のね。この意味分かるわよね。あなたに問いたいあなたの気持ちは何処にあるの?』

真っ直ぐ潮さんの目を見て答えた。

『決まっています。実験の前夜、海に逢いました。その時は揺れていましたが今は違います。どんな覚悟も出来ています。俺は海の傍を離れる気はありません』

『判ったわ。私の正直な気持ちを話すわ。まだ、海にはこの事を秘密にして貰えないかしら。私、怖いよあなたの力が。まだ、何も解っていないその力が。これ以上、何も失うわけには行かないの。私にとってあの子達は命なの分かってくれる。お願いよ』

潮さんの言葉を胸の奥に仕舞いこんで、アパートに戻って部屋でとりあえずパソコンのメールのチェックをする。

そしていつもの様に茉弥のメールに目を通して返信する。

凧と凧の友達とまたメガネ橋に行った事、そして軽井沢で古い知り合いに会った事など。

俺はいつも遠く離れていた為に茉弥とメールのやり取りを毎日の様にしていた。

そしてあの1週間は急用でと誤魔化してあった、心配かける訳にはいかない為に。

メールをチェックしていると嫌な件名が「ロゴ」クソ親父からだっ

た。

なじみのバイク屋のロゴを作って送れと細かい指示書までご丁寧に添付してあった。

そのバイク屋は親父が族の頭をしていた時の仲間で親父の補佐をしていた人らしい、なんでも族の雑用を一手に引き受けていて連絡係りもしていたとの事だ。

昔からチームのステッカーや簡単なロゴの製作をして小遣いを貰ってはいたが、まあ、親父のする事なんていつもこんな感じだった。納期は明日まで、どうせまた忘れていたのだろう親父のそんないい加減な性格が大嫌いだった。

仕方ないやるか、この仕事は割が良いのだ欲しい物もあることだし。速攻で終らせようと気合を入れる。するとドアをノックする音がした。

出てみると海だった。

最近、お互い何かと忙しくすれ違いばかりだったからだろう。急ぎの仕事が入って構ってやれない事を告げ、部屋に入れた。

急いでパソコンに向かうまあロゴなんかは簡単な方である、いくつかのパターンを組み上げていく。

飽きてきたのか海が話しかけてきた。

『隆羅あのね、今、お姉ちゃんと……』

『ふうん、そうなんだ』

『でね、それでね……』

『うん、うん』

少し間があり。

『隆羅、話ちゃんと聞いてる?』

『聞いているだろ』

『本当に?』

『ああ』

『じゃあ、私の言った事覚えてる?』

『……………』

『ほら、聞いて無いじゃん、バカ。もういいよ』

聞き流していた。

剥れて俺のベッドの上で横になり向こうを向いて本を読み始めた。

『ああ、もう』

頭を掻きパソコンに向かう。

しばらくすると海の足が俺のイスに当たる。

『何だ？』

『別に』

無視する、たぶん構って欲しいのだろう。

でも先に構えないと言ってあるはずだ。

しばらくするとまた、足が当たった。

『何だ？』

『別に！』

今度は口調が少し強くなっていた。それでも無視して作業を進める
何枚かプリントアウトしてチェックする。

プリンタの音だけが部屋に響く。

海が立ち上がる気配がした。

『もう、隆羅の』

『しょうがねえ奴だなまったく』

海の言葉を遮り、イスをクルッと回転させて今プリントアウトした
ばかりのケント紙を海の前に突き出した。

そこには、円の中に斜め上を向いて泳いでいる人魚のシルエットが
あり。

その下に円に沿うようにK a i M i n a d u k iとネームの入っ
たロゴだった。

『お前に、やるよ』

そう言つとキョトンとした顔をしていた。

『ありがとう。おやすみ、隆羅』

すぐ笑顔になり嬉しそうにロゴを胸に抱きしめて帰っていった。

ほぼ徹夜の状態で次の日、仕事に行った事は言うまでも無い。

アパートに帰ってきてから泥の様に眠っていた。

凧とデート - 1

あの日、右腕の封印を解いてから少し変わった事がある。

力の使い方は未だに解らないのだが、感覚が研ぎ澄まされている。キルシュの気配なんかは目には見えていないけれど近くに居れば何処にいるか分かる位ではあるが。

そして、それ以外にも色々と感じられる様になって来ているのだが、どうも水無月家の連中の気配は集中しないと感じ取れない。水の力のせいなのだろうか。

その日曜の朝も、寝ているとぼんやりと気配を感じた。
誰だ？

トン・トン・トン・トン・トン軽い足音だった。
そしていきなり俺の腹の上に飛び乗ってきた。

『うげえ……』

変な呻き声をあげる。

目を開けるとそこにはマウントポジションを取っている凧の姿があった。

海は毎日のように俺の部屋に知らない間に入り浸っているのだが、この凧もちよくちよく俺の部屋に居る事がある。

こここの鍵ってどうなっているんだいったい。

『兄貴、おはよう。もうすぐお昼だよ、早く起きて』

『おやすみ』

『兄貴、起きてってば』

俺の上に乗ったまままで飛び跳ねる。

『うげ、ゲホゲホゲホ』

水無月家の人間はみな俺を殺そうとしているのじゃないかと疑いたくなってきた。

『何の样だ、日曜の朝ばらから』

『日曜の朝だからだよ、兄貴どうせ暇でしょ』

どうせ暇って失礼な奴だな、確かにする事と言えば掃除か洗濯くらいなものなんだが。

『デートしよう！』

『デート？』

『そう、デートしてあげる。兄貴と』

してあげるって、これまた失礼だなと思い『おやすみ』と言い布団に潜り込む。

『行ってみたい所があるの』

『何処に行きたいんだ』

『原宿』

『日曜の原宿なんて人間の行く所じゃない』

布団に潜り込んだまま言うと、今度は思いつき飛び跳ねた。

寸での所でベッドから転げ落ち逃げる「ゴン」と床にしたたか頭を打った。

『何で逃げるかなあ』

『そりゃ逃げるわ、殺す気か？』

『で行ってくれるの、一緒に』

『しょうがねえなあ、外で10分待っている準備するから』

『やった。兄貴ありがとう』

着替えを済ませ外に出るが風の姿はそこには無かった。

『まったく、何処に行ったんだ。風のやつ』

5分、10分、15分が過ぎる来ない、階段に座って空を見ている。

『ゴメン、兄貴。忘れ物しちゃって取りに行っていたの。てへへ』

『てへへって。しょうがねえなあ』

『原宿に何しに行くんだ』

『洋服を見に行きたいの、友達が可愛い洋服がいっぱいあるって言ったから』

『判った、じゃあ行くぞ』

歩いて小倉山の駅に向かうそして西横線で渋谷に向かう。

電車の中で凧がずっと学校や友達の話をするのを聞いていた。

渋谷に着き、ふっと思い出した。

『凧、洋服が見たいなら。渋谷にいい所あるぞ』

『えっ。じゃあ行つて見たい』

後悔先に立たずとはこの事を言うのだった。

ハチ公前に出る、恐ろしい程の人ゴミだった。

はぐれない様に凧の手を取って歩き出す。向かうは108だ。

とりあえず108のビルの中に入る。噂には聞いていたが見事に女の子だらけだった。

中に入るとすぐに感じる俺に突き刺さる視線があきらかに痛い。

『ねえ、あの子、凄く可愛いくない。でも横のは何あれ』

『可愛いモデルかなあ。あの冴えないのは付き人なの』

そう、凧はあの水無月家の人間なのである。

潮さんや海が誰から見ても途轍もなく綺麗な美人な訳だから、このちっこいのも途轍もないくらい可愛いくない筈が無いわけだ。

もう後の祭りである。

そしてもう1つ気が付いた視線がある。

アパートを出てからすぐに感じたものだった。

それは電車に乗った時に誰だかハッキリした。

電車は比較的にすいていた、隣の車両を見るとあきらかに怪しい人物が居た。

大きめの帽子を目深にかぶりにサングラスをかけてこちらをチラチラと伺う海がそこに居る。

凧はまったく気付いていない様子だった。

凧が屋敷に忘れ物を取りに行った時だった。

屋敷の廊下で潮さんと出会う。

『どうしたの凧、そんなに嬉しそうな顔しちゃって』

『えへへ、兄貴が原宿に連れて行ってくれるって。』

『あら、ターちゃんとデートなのそれは良かったわね。気を付けて行つてらっしゃい』

凧は忘れ物を取りに部屋に走って行った。

その後、潮さんは海に会った。

『あら、海そんな所でボヤボヤしていて良いの？』

『えっ？ 何のこと。お姉ちゃん』

『凧これからターちゃんとデートって言っていたわよ。凧に取られちゃうかも』

『そんな、訳無いじゃない』

『あら、ずいぶん余裕ね。凧の声はあれよそれでも余裕で居られるの』

潮さんは心配する振りをして面白がって煽ったのだろう。

それを真に受け俺達の尾行を始めたのが手に取るように判った。

しかし、これから向かう先はもの凄い人ごみの中だぞ。

すこし心配になった、潮さんが前に俺に言ったあの言葉を思い出したのだ『海はすぐ迷子になるから』。

『まったく、しょうがねえなあ』

渋谷の駅を出てからゆつくりと歩きだす。

そして気付かれない様に海の姿を確認しつつ、集中力を少し高め海の気配を感じられるようにする。

これがまたとてもキツイかった。

でも、しばらくすると体が慣れてきたせいかな常に海の事を頭でイメージすると海の気配を感じられるようになって来た。

それがどうしてなのはまったく理解できないのだが……

そして今は、108の中を痛い視線を浴びながら凧に引っ張り回されていた。

凧に手を引っ張られて動き回る度に海の姿を確認する。

海が違う方向に進もうとした時は俺が凧を引っ張りワザと海の視界に入るようにして気付かせた。

何故こんなまどろっこしい事をしているかと言えば、海が風を想いとても気を使っているのが分かるからだった。

そうしている内に、海も少し慣れてきて余裕が出来て来たのだろう。昼の飯時と言う事もあってか、少し店内は空いてきた。

俺は通路沿いのショップのショーウィンドウを背にして風が買った洋服の紙袋を持ち立っていた。

風は近くのショップで洋服を見ている。

反対側では海がこちらを伺いながらマネキンの前で立ち止まり洋服を見ていた。

とても気になるらしいサイズもちょうど良いのだろう迷っているようだった。

その時、風に呼ばれて風の方に向かう。

『何だ、風？』

海に聞こえる様に少し大きな声で答えた。

海を肩越しに見ると何度も振り向いてマネキンの洋服を見ていたが、諦めたのか少し残念そうな顔をして俺と風の後を着いて来た。

しばらく店内を見て周り108が出る。

俺の手には風が買った洋服の紙袋が数個とそれとは別の紙袋が1つあった。

人ごみをゆっくり抜けて駅の反対側に出る。

原宿までの大通りは比較の日曜でも人が少なくって、こ洒落た店もありウィンドーショッピングをしながら原宿に向かい2人で歩いた。

原宿が近づくに従い人が増え。もうこれ以上、海を確認しながらと言う状況は無理だと判断して海を見失う前に手を打つ事を考えた。

しかし、俺たちに見つかれば慌てて逃げ出す事が手に取るように分かった。

その為、原宿と言えば竹下通りなのだがそこへは向かわず歩道橋をわたって原宿の駅前に入る。

海は歩道橋を渡ると見つかると思ったのか通りの向こうで歩道橋の

陰からこちらを見ていた。

駅前の広場で凧に荷物を預け少し待たせて置く事にした。

『悪いが、ちょっとここで待っていてくれ。絶対に動くなよ、それと知らない日本人が声を掛けてきたら適当な英語で答える分かったな』

『えっ意味分らない兄貴、何処に行くの？』

『安心しろすぐに戻るから、そこに居ろよ』

若者が集まる所にはキャッチや怪しいスカウトが多過ぎるくらい多い。

駅に電車が入り改札から沢山の人が出て来るのを確認して人ゴミに紛れる。

海を見ると俺の事をロストした様でキョロキョロと探しているのが確認できた。

その隙を突いて歩道橋を駆け上がる。

もう一度、海を見ると凧の方を見ているようだった。

通りを越え歩道橋を降りて海の背後に立つ。

『コラッ！ 海』

海が慌てて振り返ると目の前に腰に手を当てて立っている隆羅が居る、驚いて少し顔を引きつらせた。

『海、お前ここでいったい何をしているんだ？』

『べ、べつに何も。その……』

わざと少しキツイ口調で言うと思われていると思い海がしゅんとする。

『たく、しょうがねえなあ』

海の頭をくしゅつと撫でてから、手を取り歩道橋を越える。

上から凧を見るとキョロキョロして俺の姿を探しているようだった。

『お待たせ』

海の手を引きながら凧の前に行く。

『な、なんでお姉ちゃんがここに居るの？』

凧が驚いていた当たり前だろう。屋敷に居ると思っていた海が原宿

に居るのだから。

『着いて来てたんだ、俺達の後をずっと』

『えっ、ずっとって何処から？』

『たぶん、屋敷からだろうな』

『で、兄貴は何処で気付いたの』

『小倉山だ』

海が啞然としていた。そして海に忠告する。

『今日は風に誘われた、だから風が主役だ。それに散々心配かけた罰だ、海の事は一切構わないからな』

『しょうがないな、お姉ちゃんは今もう。すぐ迷子になるくせに』

風と俺は顔をあわせて笑った。

風の荷物を左肩に掛けて歩き出した。

『さあ、飯でも食いに行くか』

『えっ、どうしたの急に？』

風が不思議そうな顔をして俺の顔を見上げた。

『誰かさんは、お腹が空いて今にも倒れそうだぞ』

海の動きが段々鈍くなって来ていたのだ、極めつけは食べ物屋の前でお腹を押さえしやがみ込んだのを俺は見逃さなかった。

『お腹が減ってるなんて見ただけじゃ分かんないじゃん』

風が聞くとその時、あの音が微かに聞えたのだ「クウ」と。

『ほらな、行くぞ』

『まあ、いいか』

右手で海の手を取る俺を見た風は俺達を微笑みながら見た。

近くのカフェに入り食事をする、そして食後のコーヒーを飲んでいると海がトイレにたった。

『風、今日はなんだか変な事になってゴメンな』

『えっ、兄貴が悪い訳じゃないし、お姉ちゃんは兄貴の事が心配だったんじゃないの』

『まあ、俺の方が心配だったけどな』

『でも、お互いに凄いな、これも愛の力だね』

カップに口をつけたとたん、風にそんな事を言われて思い切り咳き込んだ。

カフェを後にして、今日のメインディッシュ「竹下通り」に向かう。俺の左肩には幾つもの紙袋、そして右手は海の手を引いている。もちろん逸れない為だ。

『兄貴。少し荷物持とうか、大変そうだよ』

『いや、大丈夫だこれくらい、それに今日は風が主役だからな』
毎度の事ながら、竹下通りは、もの凄い事になっていた人の頭しか見えない。

人ゴミの中を流されながら、一応通り抜けると、風は目を回していた。

『海、ちよつと風を見ていてくれ』

その場を離れ、クレープの屋台に向かい、チョコレートとストロベリー
の二つを買い、二人の所に戻る。

『ほら、これでも食べながら一休みだ』

クレープを差し出すと、海がストロベリーを、風がチョコレートを取った。

風は放心状態で海はとても嬉しそうに食べていた。

『風、もう大丈夫か？』

『うん、ありがとう。もう平気』

『まだ、見るか？』

人ゴミを見ながら言う、風がブンブンと首を横に振った。

『兄貴、ここは毎日こんななの』

『そうだな、平日も人は多いけれど、やっぱり休日は凄いな』

『もう、洋服買えたからいいや』

『今日は、風が主役だ。他に行きたい所は無いか？』

まだ時間はたっぷり残っていたので、風に聞いてみた。

少し考えて何か思いついたのだろう。

『兄貴が子どもの頃住んでいた所に行ってみたい。ここから遠いの？』

『まあ、そんなには遠くないと思うが』

頭の片隅にはそこにはあまり行きたくないと言つ思いがあった。

『じゃあ、レッツ　ゴー!』

風が立ち上がった。

凧とデート - 2

原宿からいったん渋谷に戻り西京線に乗る。

戸部公園で降りそこから歩いて15分位の所に、昔住んでいた家はあった。

『ねえ、兄貴はいつもこの辺で遊んだりしたの？』

『ああ、そうだなこの辺かな』

『ねえ、あれは何』

『ああ、あれは戸部団地だ』

『兄貴、兄貴つてば。さっきから少し変だよ』

『えっ、何が？』

『なんか、生返事ばかりで』

『そんな事ないぞ、別に』

凧の言うとおりなんだった。何故なら、ここで遊んだ記憶なんてほとんど無いのだから。

海は「凧が主役」と言われたせいかもしれない。べらずについてくる。

顔を見るとなんだか嬉しそうに辺りを見回していた。

幼い頃住んでいた家に着く、今は誰かが住んでいるのだろう。

『兄貴、あれって学校だよな』

『そうだよ、中学校だ』

『行ってみよう』

凧が歩き出した。少し歩くと直ぐに戸部東中の正門にたどり着いた。中を覗きながら隣が気になるらしい。

『あっちは何？』

『あそこは戸部東小学校だ』

『じゃ、あっちも』

凧がスキップをしている何が楽しいのだろう。

小学校の正門は開いていた、まだ学童の子が残っているのだろう。
『中に入っても怒られないかなあ』

『大丈夫だろう、仮にも俺はこの卒業生だからな』

凧は校庭に入ると遊具や鉄棒などをしながら走り回っていた。俺は海と2人でそれを見ていた。

『相変わらず元気だな、凧は』

ひと通り遊ぶと、凧が満面の笑顔で俺達の方へ走って戻ってきた。

『あゝ楽しかった』

『そんなに何が嬉しいんだ』

『だって、兄貴が遊んだ校庭だよ』

『じゃ、そろそろ行くか』

駅と逆の方に歩き出す。

『兄貴、駅こつちじゃないよ』

『ここからだ、あっちの駅の方が近いんだ』

『少し歩くぞ』

正直言つと、戸部公園は誰かに会いそうで嫌だったのだ。

この辺りは住宅街で滅多にタクシーなど通らなかった。

『兄貴、お願いがあるんだけど』

『なんだ、今日は何でも聞いてやるぞ。凧』

『私も手繫ぎたいなあ』

海に目で合図を送り手を離し、凧の手を取る。

『これで、良いのか？』

『うん。ほら、お姉ちゃんも』

嬉しそうに言つて海の手を取った。

3人で並んで歩く、凧がとても楽しそうに手を振っていた。

しばらく歩き駅前に着くと凧が何かを見つけたのか子どもの様に手を振り解いて走り出した。

『凧、走ると危ないぞ』

『大丈夫だもん。キャア』

その時、角でスーツ姿の男の人とぶつかってしまった。

『だから、危ないと言ったのに。どうもすみませんでした』

『あれ、もしかして如月じゃねえか？』

驚いて顔を上げると、風とぶつかったスーツ姿の男は3バカトリオのスギこと杉田だった。

『久しぶりだな。まだ時間は大丈夫だよな。ちよつと黒崎を呼ぶから待っている』

杉田が携帯を取り出し電話し始めた。

こいつらは昔から全てにおいてこんな感じなのである、人の事情など一切無視して。

しかし決して悪い奴らじゃない事は確かなのである。俺が3年間も振り回されたのだから。

『悪いなこんな事になっちゃて、少し俺に付き合ってくれ』

『別に構わないよ。ね、お姉ちゃん』

海は頷いた。

『サンキューな』

携帯を取り出し潮さんに電話する。

知り合いに会い少し遅れる事、屋敷まできちんと送り届ける事を告げる。

『いいわよ。ターちゃんとなら安心だから、あまり遅くならないようにね』

とOKをもらった。

『潮お姉ちゃんに、電話してたの？ それなら風が説明したのに』

『いや、これは俺の都合だ。俺がきちんと言わなきゃいけない事なんだよ』

そこで杉田の電話も終わったようだった。

『じゃ行くか。あれ？ こちらの女の子達は』

そこで気付いたらしい。どう紹介するべきか考えたが答えは出てこなかった。ああ、野にも山にもなってしまう。

『えっと、こっちが彼女の水無月 海。こっちが彼女の妹の風だ』

海が後ろでイタリアの完熟トマトみたいに真っ赤になり俺のシャツを掴んだ。

『はじめまして、水無月 凧です。ほら、お姉ちゃんも』

凧は驚いた顔をして俺の顔を見上げていたが直ぐに自己紹介をした。そして凧に促されて海も自己紹介をする。

『は、はじめまして、海です』

それは今にも消えそうな声だった。

『ねえ、お義兄さん、こちらは？』

ちよつと違うニュアンスのお兄さんに聞えたが、そこはあえてスルーする。

『ああ、こいつは高校の時の友達の杉田だ』

『はじめまして。私、杉田と申します、スギと呼んで下さい』

何をこいつこんなに緊張してるんだ相変わらず変な奴だなと思った。

『で、何処に行くんだ。スギ』

『ああ、すまん。クロとの行きつけの居酒屋でいいな』

『ああ、構わないけど』

4人で駅前にあるチェーン店の居酒屋に入る。

飲み物も来ないうちにチノパンにポロシャツ姿の黒崎が走りこんできた。

『ハア、ハア、ハア。如月が帰ってきたって言うから飛んできたんだ』

『あつ居やがった。この野郎、連絡もしねえでこのバカが』

息が上がたまま黒崎がヘッドロックをしてきた。

『痛たたた、クロ痛いよ』

そこでクロが固まった、海と凧に気付いたのだ。

『スギ。こ、こちらのお2人は？』

『ああ、キサの彼女と彼女の妹だ』

『か、彼女だとお？』

クロが俺の頭を掴んだまま振り回す。

『クロ。痛いって言っているだろ』

クロの手を振り解くとクロが自己紹介を始めた。

『は、はじめまして。ぼ、僕は如月君と高校時代の友達の黒崎とい
います。クロと気軽に呼んで貰って構いませんので』
緊張しているクロを見てスギと大笑いした。

クロの飲み物が来て、乾杯して飲み会が始まった。

『キサ、お前。今まで何処にいたんだ』

『俺は、沖縄で仕事をしていたよ』

『沖縄ってすごいな』

『クロ、どこでも同じだよ。沖縄って言ってもさらに南にある小
な島だけだな』

『そんな島で何の仕事していたんだ？』

『そうだなあ、ホテルのウエイター・カクテルバー・パン屋・色々
だ。最後の方は居酒屋を任されていたけどな』

『お前、変わったなあ』

スギとクロが顔を見合わせて言った。

『そうか』

『ああ、変わったよ驚くくらいな』

スギとクロが話しに夢中になっているのを見てと凧と海に聞いた。

『ゴメンな、大丈夫か』

『うん、平気だよ。楽しいし、面白いし。ね、お姉ちゃん』

『うん』

今日は本当に海が何もしゃべらなかつた。

凧とデート - 3

トイレに向かうと俺を追いかける様に2人が次々にやってきた。

『キサ、お前あんなに綺麗で可愛い子と何処で知り合ったんだ』

『ああ、島だよ。俺が居た沖縄の離島』

『でも、あんなに綺麗で何処かのお嬢様みたいだと、なんだか凄い緊張するよな』

『やっぱりスギもなのか、ドキドキもんだよな流石に』

まあスギの言っている事は間違いじゃないけどな。

クロも緊張しっぱなしらしい。

残された凧と海は嬉しそうに話をしていた。

『兄貴、楽しそうだね。でも兄貴って学校の話してしゃべりたがらないよね』

『凧もそう思う、私も隆羅から聞いたこと無いんだ。高校の隆羅の友達かあ、どんな高校生だったんだろうね』

海も興味はあるらしい。

そこに3人が戻って来た。

ワイワイと仕事の話などしていると俺の携帯が鳴った。

お袋からだ、とりあえず後からと告げ電話を切った。

『悪い、ちよつと電話してくるわ』

俺は携帯を持って席を離れる。

しばらく沈黙が流れ凧が切り出した。

『あのう、スギさんとクロさんて、昔のお兄さんの事知っているんですよ、さつき変わったなって言っていたけれど。昔のお兄さんってどんなだったんですか？』

実は3バカトリオは、スギが頭脳系、クロがパワー系、俺が巻き込まれ系なのだ。

スギが話し始めた。

『あいつ、高校1年の1学期に俺らの高校に編入して来たんだよ』

『その、高校って何処なんですか？』

『ああ、埼玉の西陵って聞いたことあるかなあ』

『えっ、凄い進学校じゃないですか』

『まあ、そうなんだけど。キサは試験免除で編入してきたって噂だったんだ。それでクロと俺のクラスになって、はじめて見た時は無愛想でいけ好かない奴だと思たよ。キサの地元の奴ら探して聞いてみたんだ。如月ってどんな奴なんだて、そうしたら小中の9年間殆ど人と話をしなかったらしいんだ。それで小学校でついたあだ名が「鉄仮面」中学の時が「絶対零度」、そして成績はいつもトップクラスだったらしいんだ』

『あのう、信じられないんですけど。スギさん私たちの事からかっていますん？』

『いや本当だった。だから今のあいつを見て驚いたんだよ、なあク口』

『そうそう、アイツの変わりようは、俺らの方が信じられないって本当に』

『それで、そんなしゃべらないキサに興味を持ってキサを構うようになったんだけど、休みの日に何処かへ連れ出そうと計画したら、いつも親父と用事があるって言われてさ』

『えっ、それって、お父さんと車やバイクのレースに出たりしていたて言うやつでしょ。』

『はあ？ 車やバイクのレースに出場していたって事？ そんな事をキサの奴してたのかあ』

『えっ！ 知らなかったんですか今まで』

『ああ、キサはあまり自分からそんな話する奴じゃなからな。しかし酷い奴だな、俺らに何も言わないなんて。クロきつちりキサの事しめとけよ』

『スギ。了解したガツンとな』

クロが腕まくりをして笑った。

『しかたなく学校で3人で騒いでバカな事ばかりしていたんだ、そして付いた呼び名が3バカトリオ』

『クロで〜す』

『スギで〜す』

『キサで〜す、3人合わせて「3バカトリオ」で〜す』

クロとスギが肩を組みながら叫ぶと海と風がお腹を抱えて大笑いした。

『つかみはOKと』

『えっ何がですか？ スギさん』

『いや、こつちの話』

クロが即答した。

『面白い人たちだね、お姉ちゃん』

『そうね、変な人たち。でも楽しい』

『でも、変な時期に編入してきたんだね』

『そうそう、それは俺らも気になってキサに聞いてみたんだけど何も言わなかったんだ。しばらくしてキサが最初に入った高校の知り合いに会ったから聞いてみたんだ。そうしたら、何でも不良グループとトラブルがあつて学校に居ずらかったらしいんだ。キサは頭も良くてスポーツも卒なくこなすから直ぐに目を付けられたんだと思う。それ以上の事は俺にも分からないんだけど』

『本当にあの3年間は青春って感じで楽しかったなあ。3人でバカやって、でもキサはいつも俺らに振り回されていたと思ってるのかもしれないけど、嫌じゃなかったんだろうな。いつも一緒にいたし。それで卒業してからも3人でちよくちよく会っていたんだよ、だけど急にキサの奴居なくなっちゃって。なあ、スギあの時は大変だったんだよな』

『そうだったなあ。やつとのことでキサのバイト先見つけてその店長に聞いたら。親父さんが来て就職が決まったからここは辞めさせるって言ったらしんだ。そしたら次の日から来なくなっちゃって店

長が言つてたよ』

『で、今日久しぶりに会つたらあの笑顔だろうビックリだよなクロ』

『そうそう、キサつてその沖縄の島でどんなだったんだろうな』

『いつも笑つていて、優しくつて、凄くヘタレ』

海が真顔で言つた。

『キサがヘタレねえ、まだ信じられないやあ』

スギが答えた。

そんな所に電話を終えて席に戻つた。

『悪い、お待たせ』

『キサ遅いぞ』

『まあまあ、遅かつたけど何の電話だったんだ』

クロがスギを宥めて聞いてきた。

『ああ、お袋だよちよつと妹のことだな。で何の話をしていたんだ』

『お前が、俺らに内緒でレースに出ていた話をだなしていたわけだ』

『そうそう、しかしキサも酷い奴だよなあ一言も言わないなんて』

スギとクロに突つ込まれた。

『いやあ、でもあのな。好きで出ていた訳じゃなくだな。親父に出

ないと小遣なしだつて言われて無理矢理連れまわされたからで仕方

なくやつていただけだしな。俺にしてみれば、そう嫌々仕事やバイ

トをしていたのと同じ事かなんて。まあ昔の話だ、済んでしまつ

た事は良いじゃないか、なあスギ、クロ』

『そうだな今は今だけだからな、飲むか』

しばらく雑談をし、風が居るためにあまり遅くなる訳にもいかない

のと。当分の間、こつちに居ることを告げ連絡先だけを交換して別

れた。

風は小倉山に着く頃には疲れて眠つてしまった。

そりゃあれだけ動き回つたんだからしょうがないのかもしれない。

俺達ですらクタクタだからな。

仕方なく駅から風をおぶつて帰る。

海が荷物を持ってくれるというので半分だけ渡した。

辺りはすっかり夜になっていた。

『なあ、海。今日はやけに楽しそうだな。そんなに楽しかったか？』

『うん、隆羅の昔の話も聞けたしね。今までこうして出掛ける事なんて殆どなかったからね』

『そうか、スギとクロが俺の昔の話をね』

一瞬だった俺が遠い目をするとなんか海は見逃さなかった。

『隆羅は子どもの頃、何で誰とも話をしなかったの？ 辛くなかったの？』

『そうだなあ、何でだろうな。自分の力じゃどうしようもない事があつてな、それでかな』

『子どもの時の力なんて出来ない事ばかりじゃない』

『そうなんだが、どうしようもなかったんだよ、その時は』

『でも、スギとクロと出会えて良かったと思ってるんだ。俺が変わるきっかけを作ってくれた奴らだから感謝しても感謝しきれないよあいつらには』

『でも、島で逢った時の隆羅はそんな隆羅じゃなかったよ』

『そうだな、俺はあの島で変わったんだ。あの島が変えてくれたんだ。でもあの島でもどうしようもない悲しみにくれた事もあるけどな』

『隆羅なんだか辛いことばかり』
海がとても哀しそうな顔をした。

『ああ、もう、止め止め。湿っぽい話はおしまい。今は今なんだ。今は今しかないから過去の嫌な事なんて誰にでもあるはずだろみんな同じさ。それに島で海に出逢えたしな。俺は今に感謝してるんだぞ』

海の顔に笑顔が戻った。

駅前通りを抜け屋敷の近くの閑静な住宅街まで帰って来ていた。

『そう言えば、今日は全然しゃべらなかったな。どうしてだ』

『だって、隆羅が怒った顔で「今日は風が主役だから」って言う

から』

少し拗ねていた様だ。

『でも、今日はとっても良い事があったから許してあげる』

『え、そんな事あったか何のことだ？』

『内緒だよ』

『そうか。そうだ、その黒い紙袋は海のだからな』

その紙袋の中はあのマネキンが着ていた洋服だった。

あのフロアを回っている時に海は落ち着きがなくなりモジモジ始め急に何処かに走り出した。

俺は焦ったがすぐにその方向を見て気付いたトイレだろうと。

尻は洋服に釘付けだった。

その隙にあの店に行き洋服を購入したのだ。

まあそれなりの金額はしたが俺の財布の中には買っても少し余力を残す金額が入っていた。

実は今日は欲しいパソコンのソフトを買いに行く為に前もって銀行に行きおろしてあった。

その予定は全てキャンセルになったが、ソフトはまた今度買えば良い事だし。

それにこんな機会は滅多に無い事だしな。

『隆羅、何これ。見ても良いの？』

『ああ、良いぞ』

『えっ、これって隆羅？ 貰って良いの？』

見る見る海の瞳が輝きだした。

『それ欲しそうにしていただろ。それに、その似合うかって海に。なんて言うか、そう、お礼みたいなもんだ今日の』

自分で言っておいて恥ずかしくなり顔が赤くなるのを感じた。

『隆羅、ありがとう。チュッ』

『バ、バカ。何やってんだ』

海がとても嬉しそうな顔をして俺のほっぺにキスをした。

俺は尻をおんぶして手で紙袋を提げている為にまったく抵抗できな

かった。

『うふふ、いいんだもん、だって彼女なんですよ？ 彼女ならチュウしていいんだもん。それとも、あれは言葉の彩なのかなの？』
少し怒った様な、少し切ない様な顔をした。

『しょうがねえなあ。そうだ、海は俺の彼女だ。如月隆羅は水無月海の事が好きだ』

『私、水無月 海も如月隆羅の事が大好きです』

海の瞳から涙があふれていた。

『泣くなよ。な、これからもずっと一緒だ』

海が俺の胸に顔を埋めていた。

『うん』

そして綺麗な顔を俺にまっすぐに向けて目を閉じた。

海の唇に触れるあと数センチの所で背中中で声がしてパツと2人は離れた。

『兄貴、ありがとう』

凧の寝言だった。お互いの顔を見ながら笑った。

そしてお互いに『シー』と言い眠っている凧を見て微笑んだ。

『早く帰ろう。潮さんが待っているから』

『うん』

その日、微妙な2人の関係に終止符が打たれたのだった。

翌日、潮さんに呼ばれて屋敷に行くと。

『昨日は、楽しかったの？』

『まあ、色々ありましたけど楽しかったですよ疲れましたけど』

『そう言えば、海がずーとニコニコしているんだけどターちゃん知らない』

『知りませんよ。海も昨日は楽しそうでしたから。その事じゃないですか』

『色々ね。まあ、凧も楽しそうだからいいか。これからは海と凧の事宜しくね。それとこれは、この間、凧を長野に送ってくれたお礼

よ
『

『ありがとうございます』

包みを渡され受け取り、包みの中を見ると海の洋服を購入する為に
先送りしたソフトだった。

俺のプライバシーって思ったが、きちんと頭を下げた。

「礼には礼を尽くす」

如月家の家訓なのである。

誕生日 - 1

俺と海が微妙な関係に終止符を打ってからしばらくたった、ある日。俺は海に会う為に屋敷に向かっていた。

途中でキルシュと会う。

『お、珍しいなお前がこんな所で何しているのだ』

『ああ、ちよつと海に用事があつてな』

『じゃ、俺様が案内してやる』

『サンキュー助かるよ』

海が俺の部屋に来る事はあつても、俺が海の部屋に行く事は今までそんな機会は一度もが無かつたのだ。

よつて俺は海の部屋は知らなかつた。

屋敷の中に入り廊下を歩いていると潮さんに会つた。

『あら、珍しい事もあるもんね。ターちゃんが自分からここに来るなんて。ああ、愛しのラヴアーに会いにね。羨ましい私も彼でも探そうかしら。キルシュ何処かに良い人居ない』

『お前の、お眼鏡に適う様な奴はこの世に存在しない』

『キルシュずいぶんね。昔は居たのよ、可愛いお姫様に取られちゃったけど。それにここにも居るじゃない。優しくて、昔は根暗で、意気地なしで、ヘタレなターちゃんが』

『激しく拒否します』

『いたいどんな話を聞いたんだ？』

根暗つて風か？

『あら、いけず。お姉さんが優しく教えてあげる』

『断固拒絶します』

『そんなにはつきり言わなくてもいいじゃない。一途なのねターちゃんは』

『あまり時間が無いのでこれで』

これ以上は無意味である。

『キルシュちゃんと見張っていないと駄目よ。ターちゃんが襲い掛からないように』

『襲いません!』

海の部屋はそこからすぐの所にあった。

ドアをノックする、中から『ハイ』と返事がした。

ドアが開く中から顔を出した海は少し驚いた様な顔をした。

『えっ? 隆羅どうしたの?』

海の顔が少し赤くなる。

『ちよつと海に頼みたい事があつてな』

俺の手を取って部屋の中に入ろうとして、海が俺の足元のキルシュ気付き足で出て行けと合図をする。

そして『入って』と言い部屋に入れてくれた。

『俺はお邪魔虫か?』

キルシュは呟いた。

『あら、キルシュ追い出されちゃったの? 駄目ねもう』

海の部屋はとても広く綺麗で、そしてとてもシンプルだった。

海の人となりなのだろうと思った。

そして部屋の真ん中のラグの上で床に座った。

『ねえ、今日はどうしたの?』

『海、これから時間空いているか。ちよつと付き合っただけ欲しい所があるんだが』

『うん、大丈夫だよ。今日の用事は全部済んだから、それで何処に行くの?』

海は少し考えてから答えた。

『実は、妹の茉弥のプレゼントを買いに行きたいんだ』

『茉弥ちゃんのプレゼントってなんの?』

『もうすぐアイツ誕生日なんだ』

『じゃ私も茉弥ちゃんのプレゼント選びに行く』

『ありがとつな』

『素敵なことじゃない、でも凧は一緒じゃなくて良いの?』

『その事なんだが、実は……』

スギとクロ達と再会したあの日の居酒屋でお袋からの電話の内容を海に伝える。

『それは楽しそう。凧も喜ぶと思う、楽しみだね』

『ああ、じゃ行こうか』

凧には当日は俺の実家で食事会に呼ばれているから予定を空けておくようにと海に伝言を頼んだ。

そして俺は海と2人で池袋に居た。

何故ここかと言うところはデパートの集合体だから。

それ以上に、この辺の事を俺が熟知しているからである。

少しデパートの中を手を繋ぎながら歩く、そしてジュエリー売り場で目に留まったものがあつた。

それは、あの夜に見た光のようで、そして何よりあの島の海の色によく似ていたのである。

それを店員さんに見せてもらう。

『彼女へのプレゼントですか?』

海の手力が入り熱くなるのを感じた。

海は最近、彼女という言葉に敏感に反応するようになり困っていたのだ。

『いえ、妹へのプレゼントを探しに』

『優しい、お兄様なのですね』

プレゼントなんて言う物は最初のインスピレーションが大切なのだ、値段も良い感じだったので即決してラッピングしてもらった。

その後、デパートの中を見て回り。海は綺麗なオルゴール付きの宝石箱を選んでくれた。

そして2人とも、もう1つのプレゼントをそれぞれ買って帰った。

食事会の日がやってきた。

しかし、その日は朝からなんとなく不穏な空気を感じていた。

感覚が鈍すぎてハッキリと分からなかったのだ。

でも今日は大切な日なのである、気のせいだと思いやり過ごす事に
して屋敷に2人を向かえに行く。

アパートまで来てもらった方が早いのだが、これは如月家の招待な
のである。

つまり俺がホストなのだ、来てもらう訳には行かない。

屋敷の前に2人が立っていた。

そして「水の宮殿」のような屋敷のガラスと池に日の光が反射して
幻想的な光景だった。

『兄貴、遅いぞ』

凧が声を掛けてきた、我に返り2人に近づく。

凧はなんだかいつもと違いボーイッシュなのだがとても可愛い服を着
ていた。

海を見るとこの間、俺がプレゼントした洋服を着ていた。

『クラッ』と目眩がするそれくらい似合っていた。

キラキラと反射した太陽の光が瞬き、そうまるで女神のようだった。

『もう、兄貴は何をデレデレしてるかな』

海の姿を見とれていると凧に突っ込まれた。海はたまらず顔を真っ
赤にしていた。

『でも、お姉ちゃんその洋服どうしたの？ 見たこと無いけれど』

『えっ、えーと隆羅に買ってもらったの』

海がモジモジしながら話す。

『はあ？ 兄貴いつの間にこんな可愛い服を何処で買ったの？』

『えーとなんだ、この前の渋谷の108でちよつとな』

『信じられない、そんな事していたんだ。でもよくお姉ちゃんの好
みとか分かったね、それにサイズも』

『いや、そのなんだ。海を見ていた時にとて欲しそうな感じだっ
たし、とても迷っていたのでサイズも合うのだろうと、それで隙を
見てちよつとな』

『隙を見てちよっとつて。凧が主役だなんて言っていたくせにもう』
『いや、すまん。でもちゃんと凧の洋服もかえたい所に行きたい所に行きたい所に行きたい』

『まあ、いいけど。でも本当に、兄貴って鈍いのか鋭いのか分からないよね。ヘタレなのかと思えば車の運転めちゃくちゃ上手かったりケーキ作れたり。そんな所をお姉ちゃんは好きになったんだと思うけどね』

改めて凧に言われて恥ずかしくなりお互い顔を赤くしてうつむいた。
『もう、ラブラブで熱々なのも分かったから。ご馳走様でした。ほら行くよ、茉弥ちゃんが待っているんでしょ』

凧が歩き出した。俺は海の手を取り凧の後を追いかけた。

渋谷まで行き西京線に乗り小武蔵浦谷で乗り換え隣の西浦谷に向かう。

本当はこちらの方が実家に近いと教えてもらっていた。

何故、俺が小武蔵浦谷からの道しか知らなかったかと言うと俺が始めて実家に行った日、たまたま小武蔵浦谷に用事が会ったからとさうとお袋がぬかしやがったのだ。

駅からバイパス沿いに歩く凧はとても嬉しそうだった、茉弥に会うのが久しぶりだからだろう。

『兄貴。今日は何の食事会なの』

『今日は、誕生日会だよ。凧』

『えっ誰の？ 今、何て？』

凧が驚いたような顔をしている仕方なく少し説明をする、口を滑らせた海は気まずそうに鼻歌を歌っていた。

『今日は茉弥の誕生日会だ。凧は行くだけでいいからなあ』

『だって私、何もプレゼント用意していないのに。どうするのよ、兄貴とお姉ちゃんのバカあ』

一気に凧が不機嫌になったが実家のもう目の前まで来ていたのだ。ここから帰るわけにもいかず、俺らの後ろに隠れるようにして家に

入った。

『風ちゃんだ。風ちゃんだ。風ちゃんが来てくれた』

風の姿を見て茉弥は大喜びだった。

ダイニングに入るとそこには「風ちゃん・茉弥ちゃんお誕生日おめでとう」の文字があつた。

そう風にはサプライズパーティーだったのだ。

今日は茉弥の誕生日なのだが風の誕生日も近いと言う事もあってのお袋の提案だったのだ。

『お誕生日おめでとう！』

みんなから一斉にの掛け声が上がった。

まだ、風は状況が飲み込めずオロオロしていた。
席に着きジュースで乾杯をする。

実は風と茉弥は同じ年なのだ、風は飛び級をして高校生、茉弥は出席日数が足りずにダブっているから中学一年だけど。
そしてプレゼントを渡す。

俺から茉弥にはアクアマリンのシンプルなネックレス、そして風には同じデザインで石が淡いグリーンのパリドットのネックレスだ。
海から茉弥には綺麗な宝石箱、そして風には色違いの宝石箱だった。
そしてお袋から風には可愛いワンピースがプレゼントだった。

『あのう、ゴメンなさい私、プレゼントを……』

『風ちゃんいいのよ。私がタカちゃんや海ちゃんに内緒にしておいてって頼んだの、だって風ちゃんが茉弥に会いに来てくれるだけで十分なんですよ、これ以上のプレゼントは無いわ、また、いつでも遊びに来てね。本当に今日はありがとうね』

風が申し訳なさそうに言うとお袋が風に優しく言った。

『そうだな、風は頭がいいから1人でも来れるよな。西浦谷からバイパス沿いにまっすぐ来て郵便ポストの所を曲がるだけだもんな。
今度は1人でも茉弥に会いに来てやってくれ』

『そうそう、もう風ちゃんも私の子どもよ「沙羅ママ」じゃ変だか

らそう「如月ママ」って呼んでね。ママにも会いに来てくれたら嬉しいな』

お袋が凧に抱きついた。

あの居酒屋で電話があった時に俺が頼んでおいた事があった。

凧に内緒にする代わりに凧を甘えさせてやって欲しいと、凧はどんな事を言っても決して自分から甘えたりしないからお袋からスキンシップを取って欲しいと。

この事は海にも了承を取ってあった。

大きなお世話かも知れないが、凧は産まれてすぐに母親と別れている。

だから余計に母親の様な人の温もりを感じて欲しかったのである。

『じゃ、今日から茉弥と凧は双子の姉妹だな』

『嬉しいな、嬉しいな。凧ちゃんと双子』

俺が言っていると茉弥が嬉しそうに凧に抱きついた。

『凧も嬉しい』

凧がモジモジしながら恥ずかしそうに言った。

しばらくワイワイやっていたのだが、2階の茉弥の部屋で遊ぼうと言う事になり2人が上へあがって行った。

『隆羅、私もちよつと見て来るね』

しばらくして海が2階に上がって行く。

『お袋。凧の事、ありがとうな。これからも連れてくるから宜しく頼むわ』

『うん。そんな事、全然タカちゃんが気にしなくていいのよ。娘が増えたみたいで楽しいもの。それと海ちゃんの事、いつまでも中途半端じゃ駄目よちゃんとしないと』

『その事なら、もう大丈夫だ。俺の気持ちも伝えたい、海の気持ちも聞いたから』

『そうなんだ、おめでとう。ママも応援するからね。でもタカちゃん、いつも人の事ばかり優先するから、そんなの駄目よ優しいの』

は良い事だけだね。自分をもっと大切にしなさい。人を想う気持ち
はとても大切な事。人を守る勇氣はもっと大切な事。でも人だけじ
や駄目なの自分も守れないときつと哀しい思いをする人が出てくる
筈だから。もし万が一何か遭った時には、自分の力を信じなさい。
あなたの体の中にも退魔師の力が宿っている、その力がきつとあな
たを導き助けてくれるはずよ。それにお父さんがよく言ってたわよ
ね「熱くなったら負けだ、どんな時にもクールで居ろ」ってママも
そう想うの、どんな時にも冷静で居られれば大丈夫のはずよ」
その言葉は、親父がレースの時にいつも言っていた親父の口癖だった
『熱くなってもいい、だけど頭の中はいつもクールでいろ、そうす
ればかならず活路は見出せる』

と何故その時は、お袋がそんな事を、言ったのか分からなかった。

『タカちゃんと海ちゃん、ラブラブなんだ。LOVE IS POWERもパワーアップね』

なんて言いやがった、本当にお袋だけは訳分からなかった。

しばらくしてあまり遅くなる訳にもいかないので、海たちを呼んだ。

『おい、そろそろ帰るぞ』

3人ともとても嬉しそうに降りてきた。

茉弥が寂しそうな顔をしたがしょうがない、いつまでもここに居る
わけには行かないからな。

また遊びに来る事を約束して実家を後にした。

誕生日 - 2

外に出たとたん、朝感じた不穏な空気をハッキリと認識でき嫌な予感がした。

その空気は敵意を帯びていた。

そして何処からか見られている感覚も同時にハッキリと感じた。

来た道を歩いて駅に向かう。

2人に気付かれないように俺から話しかけた。

『茉弥の部屋で何をして遊んでいたんだ』

『最初は、トランプとかしていたんだけどね、お姉ちゃん』

『うん、隆羅の小さい頃の写真見た可愛いね、隆羅』

『それってアルバムを見たって事か、まあいいけど』

『兄貴って本当に茉弥ちゃんと仲が良いんだね2人の写真ばかりだったよ』

『そうだな、子どもの頃はいつも茉弥と遊んでいたからな』

その時、海は考えていた。

もしかして隆羅が学校で誰とも話さなかったのは茉弥ちゃんの事が関係しているのではないかと。

でも口には出さなかった。

それは、海が踏み込んではいけない領域の様に感じたからだった。

『どうした海？ 神妙な顔して悩み事か』

『んん、違うのちよつと考え事かなあ』

『それなら、いいけど』

それは突然訪れた。頭の中に鮮明に画像が現れたのだ。

「黒い影」

「しゃがみ込む海と風」

「土手に向かって走っている自分の姿」

嫌な感覚が増幅した。 辺りを見回す。

ここはバイパス沿いの歩道で今は大きな交差点に差し掛かっている
すぐ近くに歩道橋があった。

車が多いが人はあまり歩いていなかった。

海を見ると何かを感じたのか少し落ち着きが無く目が泳いでいた。
海では駄目だと判断して、 凧の肩を掴み凧の目を真っ直ぐ見て言っ
た。

『凧、落ち着いて良く聞けいいか。 すぐに海を連れて2人で先に帰
れ、この先の高架の右側が直ぐに駅だ判るな。 乗り継ぎが分からな
ければ駅員に聞いてくれ。 財布と携帯をお前に預けておくから何か
あればすぐに潮さんに連絡しろ分かったな』

『兄貴、いきなりどうしちゃったの、何があるの?』

凧が不安になり震えだした。

『何が起きてても大丈夫だ。 俺が言った事を信じてくれ、 お前だけが
頼りなんだいいな!』

その時、歩道橋の上で黒い何かが羽ばたいた。

黒い影がこちらに向かい急降下してくる。

『伏せる』

咄嗟に叫ぶ。

海と凧がしゃがみ込む。

右手で払いのけたが影の爪か何かが皮膚を切り裂き血が落ちた。

影は急上昇して、また襲ってこようとしていた。

信号が青なのを確認して凧に叫んだ。

『今だ、走れ!』

凧が俺の声ではっと気が付き海の手を力の限り引っ張って横断歩道
を走り出した。

海は心配そうに俺を見ていた。

その瞬間頭の上を影がかすめ、手を突き出し足のような物を掴む。
影が暴れる、凧たちが少し離れるのを確認して手を離し土手に向か
い走り出した。

影は上から俺を追いかけて来ている様だった。土手に向かい走り抜ける、土手の手前で何かが横から飛び出してきた。

咄嗟に腕を胸の前でクロスさせて直撃は何とか防いだが吹き飛ばされ、土手沿いの金網に激突した。

痛みを堪え土手を駆け上がるとすぐに犬の様なものが追いかけてきた。

河川敷の公園の遊具の影に隠れる。

『はあはあはあはあ』

既に息が上がっていた。

影はたぶん誰かの使い魔なのだろうこちらを伺っている様だがすぐに攻撃はして来なかった。

『どうする、どうすればいい』

誰も巻き込むわけに行かず河川敷まで逃げて来たが、俺には打つ手がまったく無かった。

上から急降下してくる。

転げ出て何とか防ぐが姿勢を立て直した瞬間、今度は犬の様なものが襲ってくる。

これを手で払いのけ走り出す。

キルシュといくらかの訓練はしていたが2匹の波状攻撃にはまったく役に立たなかった。

逃げ回るだけで精一杯で……

そして今度は犬が襲い掛かり逃げると鳥のようなものが襲ってくる。何回か同じ事を繰り返す。

『おかしい、簡単に止めを刺せるはずなのに、なぜそこまでしない。何かを伺うか、試しているのか？ それとも狩を楽しむように弄んでいるのか。ふざけるな』

しかし考えている余裕はなかった。

そして、体を休めます時間は与えてもらえなかった。

段々と体力が消耗してくるのを感じていた。

『はあはあはあはあはあ……』

呼吸を整えることすら出来ない。焦りだけが増えて行った。

どれだけ逃げ回ったのだろう体中傷だらけなのだがかすり傷程度で大きな怪我は無かった。

それも相手が本気にしていない為なのだろう。しかし俺の体は限りなく限界に近づいていた。

変だ、攻撃の間隔が少し長くなってきた。「はあはあはあ」と言う自分の息遣いだけが聞えていた。

物陰に隠れて辺りを見回すと何処にも影は見えなかった。

何処かに潜んでこちらを伺っているのだろうか、飛び出せば襲い掛かってくる事には代わりが無かった。

その時土手の上から声がした。

『隆羅！ 隆羅！ 何処に居るの？』

海だった何故ここに。もしかして俺を追いかけて来たのか？

隆羅が凧たちの離れるのを確認して橋に向って走り出した後に、凧は海の手を握り締めて駅に向って走っていた。

駅はすぐ目の前だった。

『凧、駄目離して！ 隆羅が隆羅が死んじゃう！』

凧の手を振り解いて、海は来た道を走りだしたのだ。

『お姉ちゃん。行っちゃ駄目！』

凧が叫んだが海には届かなかった。

海の姿が見えなくなり凧はパニックになった。

『どうしよう。どうしよう。そうだ』

そこで隆羅の言葉を思い出した、潮さんに連絡しろと。すぐに隆羅の携帯で潮に連絡を取る。

『お姉ちゃん、どうしよう兄貴が兄貴が！』

『凧、何があったの？ 落ち着きなさい』

『兄貴とお姉ちゃんが死んじゃうよ……』

凧が泣きじゃくる。

『助けて、早く助けて！』

『凧、良く聞きなさい。あなたも水無月の人間でしょう！』

潮の凧とした力強い声だった。そこで凧は何とか落ち着きを取り戻した。

『凧、いい事。慌てないでゆっくりと状況を説明しなさい。隆羅と海は大丈夫だから』

それは凧を落ち着かせる為に言った言葉だった。

『真っ黒な鳥見たいのに襲われて。兄貴が囨になつて走っていつて。兄貴にお姉ちゃんと逃げろって言われて、駅に向ったけど途中でお姉ちゃんが兄貴を追いかけていちゃったの。どうしよう』

『凧はそこから動いちゃ駄目よ。今、何処に居るの周りには何があるの言いなさい』

『えーと西浦谷駅の近くで大きな道、兄貴はバイパスって言った』
『判ったわ、すぐに行くから決して動いちゃ駄目よ。何かあったらすぐに連絡しなさい判ったわね』

『うん』

そう返事をして近くの街灯の下で凧は立ち尽くしていた。

状況は最悪だった。

海を巻き込む訳にはいかないがあのままでは、海が危険だ。

『クソ！ どうすればいいんだ』

ただただ焦っていた。

すぐ近くの土手の上で声がした。

『隆羅、そこに居るの？』

その時、影が動く気配を感じた。

『ヤバイ、海が襲われる』

瞬時に海に向かい全力で走っていった。

全身の筋肉が悲鳴を上げる。影が向ってくるのが見えた。

頭の中が真っ白になり体の中で何かが燃えたぎった。

その瞬間、右腕からパリパリと電気が走り文様が薄く浮かび上がる。その時、頭の中で声がした『隆羅いけない』文様と電気がスウーと消えてしまった。

影が海に飛び掛る、それを裏拳でなんとか払い飛ばす。

その瞬間今度は上から鳥が襲い掛かって来た。

避け切れない、海を抱きしめて土手を転げ落ち直ぐに起き上がる影は確認できない。

しかし気配はビンビンに感じていた。

海はガタガタと震えている、開けた所では分が悪すぎる辺りを見て橋脚まで海の手を掴んで走り出す。

橋脚までたどり着き橋脚を背に海の前に立った。

ザワザワと周りの空気が震え気配が増えている事に気が付いた一氣にカタを付ける氣だ。

ジワジワ間合いを詰めてくる気配だけを感じた。

『どうする、どうにかして海だけでも……』

その時、お袋の言葉が脳裏に蘇えた。

『人だけじゃ駄目なの自分も守れないと、きつと哀しい思いをする人が出てくる筈だから。もし万が一何か遭った時には、自分の力を信じなさい。あなたの体の中にも退魔師の力が宿っている、その力がきつとあなたを導き助けてくれるはずよ』

『でもどうすればいいんだ』

『熱くなってもいい、だけど頭の中はいつもクールでいろ、そうすればかならず活路は見出せる』

親父の言葉だった。

後ろで海はガタガタ震えながら泣いている。

『隆羅、隆羅……』

俺の名前を呼びながら。

何も守れない自分に怒りがこみ上げてきた。

そして、深く静かに深呼吸をする体が段々熱くなって来るのを感じる。

しかし頭の中はとても冷静になってきた。

そうあの峠の時のように、しかし今は少し違う感覚だった。

そして、俺にも退魔師の血が、鬼の血が流れていることをイメージした。

上から急降下して影が襲ってくる。

『うおおおお！』

右腕に集中して力を込めて影を払いのける。

炸裂音と共に影が消し飛んだ。

体に力が湧き上がってくるのを感じる。

右腕には形の違う文様がハッキリ浮き出していた。

今までの文様は直線的だったが今は違う曲線と言つか、そうフレイム。

炎の様な形だった。

これが俺達の退魔師の力、そして潮さんが言っていた鬼の力を吸収すると言ったこと理解した。

犬の様なものが飛び掛ってくる拳を叩きつけるが消えなかった。

おかしい、もしかして。

また上から襲い掛かって来る今度は叩き落すように払いのける。

再び消し飛んだ。

掌だ掌で触らないといけないのだ。

行ける所まで行くしか無かった。

覚悟を決める。

そこから遠く離れたビルの上に人の少年が立っていた。

『ほお、覚醒したか、やはり退魔師の者か。すこし特殊のようだが、たいした事は無いな。まあこんなもんだろ、後はあのガキの運しだい死んでもよし、生き延びるもよし』

闇夜に溶け込むように少年は笑いながら消えた。

数が多い多すぎる。海を背にして戦うのは限界だった。

『クソ、目が霞んで来やがった。はあはあはあはあ……』

それでも向ってくるものには手を向けて消し飛ばした。

苦しくって胸に手を当てシャツを握る何かが手に当たった。

『何だこれ、そうだ「羅閃」だ』

鼓動が跳ね上がる。

何処からか声が聞える。

『炎、爆』

その瞬間、正面から一斉に飛び掛ってきた。

右腕に力を込めて掌を開き一番近くまで来た影を掴もうとして叫んだ。

『炎。爆！』

声と同じ言葉を叫んだ。

オレンジ色の光、いや炎の様なものが掌から広がり辺り一面を包んだ。

そして、全ての影が燃え尽きた。

何だったんだろう炎では無い、実体が無かったのだ。

透けるような炎と言ったほうが良いのだろうか。

ハッ和我に振り返るを振り返る。

『もう、大丈夫だからゴメンな』

海の肩に手を置いた瞬間、俺の意識がフェードアウトした。

風は恐怖と孤独に堪えながら立っていた。

兄貴はどうしているのだろうお姉ちゃんは無事なのだろうか。

どのくらい待ったのだろう目の前の道路に車が止まり潮が降りてきた。

『お姉ちゃん！』

風が走り出し潮さんに抱きついた。

『もう大丈夫よ、安心しなさい。隆羅はどっちに走っていったの？』

『あの、交差点を右に』

体を小刻みに震わせながらしゃくりあげていた。

『隆羅の事だから、きつと河川敷に居るはずよ、私達も行きましょう』

凧の肩を抱きながら車に乗せ、車をＵターンさせ隆羅達が居るであろう河川敷に車を走らせた。

隆羅が気を失い海に持たれかかり崩れ落ちる、そこで海が我に返った。

『隆羅。隆羅どうしたの。ねえ』

そこに潮さんの声が響いた。

『海！ 隆羅！ 何処なの？ 返事をなさい！』

『お姉ちゃん、こつち、隆羅が！ 隆羅が！』

潮と凧が駆けつける。隆羅は気を失っているだけの様だった。

『たぶん力を解放しすぎて一時的に気を失っているだけよ。安心なさい、車に運ぶのを手伝いなさい、早く』

目を開けるとそこは、屋敷の中だった。

『ぶっ倒れて、また、ここか。ふりだしに戻った気分だな』

起き上がり枕元にあった携帯を見て日付を確認する。

『まだ、翌日か』

右手を見て意識を集中する、文様が浮かび上がってきた。

『今度は、大丈夫みたいだな』

横を見ると海がベッドにもたれて寝ていた。

『ゴメンな、いつもいつも』

起き上がりそつと海を抱き上げ、今まで自分が寝ていたベッドに寝かせる。

顔にかかった前髪を指で優しくはらう。

今は意識を集中しなくても何処に誰が居るかハッキリ感じる事が出

来た

。隣に居るのは潮さんか？

隣に続くドアを見つめ近づく中から声がした。

『そんな事は判っているわ。今さらそんな事言われなくても。でも、封印を解いてしまったらあの子の命は。もう時間があまり無い事も分かってる、でももう少しだけ待ってちょうだい。最悪の場合は回収後、海の記憶から彼の記憶を消すわ、私の手で……』
まだ話は続いていたが、隆羅は静かに部屋を出て屋敷の庭に向かった。

『やっぱり、そうだな。もう覚悟は出来ている訳だし。俺の命で海や周りの人達、島の人を守るならしょうがねえかあ』

隆羅の覚悟は今、決まった事ではなかった。

それは幼い頃、茉弥が初めて倒れた時に決めた事だった。

子どもの頃2人で遊んでいると急に茉弥が気分が悪くなり倒れた。

『ママ、ママ、茉弥が茉弥が』

すぐに2階に沙羅が駆けつけてベッドに寝かせる。

沙羅はこうなる事を知っていたようだ。幼い隆羅ながらなんとなく思った。

『茉弥は心配しなくても大丈夫だから』

とだけ言い。すぐに電話をしに下に降りて行ってしまったのだ。

『茉弥、大丈夫？』

顔を覗きこむとても苦しそうだ。

どうしたらいいんだろうと泣きたいのを我慢して必死に考えた。

頭の中におでこをくっつけている場面が浮かんできたのだ。

そして同じことを茉弥にした、するとスーと痛みが引くように寝てしまったのだ。

しばらくすると茉弥が目を覚ました。

『アニしゃま、ありがとう』

とても優しい笑顔だった。

その茉弥の笑顔を見た時に願ったのだ。

『この笑顔を守らなくちゃ、僕が。神様、もし僕の命で茉弥が助かるなら助けてあげてください』

自分にはどうする事も出来ない、それなら自分の命と引き換えでその願いが叶うのなら、それはどうしようも無い事なのだと。

潮は、電話の途中で気配に気付いた誰かそこに居る。

『ちよつと待って』

ドアを開け隆羅が寝ている部屋を見る、海がない。

『あの子、何処に行ったのかしら』

ベッドで寝ているのが海だとは気付かなかった。

『変ね、確かに誰か居た気がしたんだけども気のせいかしら』

『しょうがねえなあ』

隆羅は庭で呟いた。しばらくするとキルシュがやって来た。

『お前、もう体は大丈夫なのか？』

『ああ、大丈夫だボコボコにされたが、跡形も無く消してやったぞ』
『お前だけに話して……いや、俺の独り言だと思って聞いてくれ。』

俺は子どもの頃から大切なものを守るためには、この命と引き換えで良いと思っていた。それは今も変わらない。でもお袋に言われたよ。人を守るだけじゃ駄目なんだって自分も守れないと必ず悲しむ人がいるからって。でもさあ、世の中にはどうしようもない事ってやっぱりある訳だ。辛い事だけれど俺は海を命がけで守りたいと思っている。もし、それが俺の力で出来ないのなら、俺はこの命を潮さんに差し出すつもりだ。このヘタレの命で世界の平和が買えるなら安いもんだろ』

キルシュは思った。

隆羅がいつもあんな無茶苦茶な事が出来るのは、愛する者を守る為なら自分の事などどうなっても構わないと思っている事を。

『お前が居なくなったら海はどうするのだ？』

『判ってくれとは言えないが。今の俺じゃどうする事も出来ないんだ。俺だっけとずっと海と一緒に居たい。でも、どちらかを選ばなければいけない時、お前ならどちらを選ぶ』

ギョツと握り締めた隆羅の拳が震えていた。

『そうだな、判った』

キルシュはそれ以上何も言わなかった、隆羅が死を覚悟している事が痛いほど良く判ったからだ。

海が目を覚ました、とても優しく温かい物に包まれていたような気がする。

起き上がると隆羅が寝ていたベッドだった、ほのかに隆羅の匂いがした。

『隆羅、隆羅どこに？』

慌てて部屋を見渡す誰も居なかった。

潮さんが隣の部屋から入ってきた。

『海、どうしたの？ 何故あなたがそこに寝ているの？』

『分からない。私、隆羅を探してくる』

海が部屋を出て外を見ると窓から、隆羅とキルシュが笑って話しているのが見えた。

『タあ・力あ・ラあ』

『よう、海。怖い顔してどうした』

『隆羅の大バカ野郎！！』

海の渾身の右ストレートが顔にヒットした。

『痛いって、何するんだよ』

海の顔を見ると今にも泣き出しそうだった。

茉弥にしてやるようにおでこにおでこをくっ付ける。

『何、泣きそうな顔をしてやがるんだ海は』

少しおでこを離しそのままぶつけると鈍い音がする。

『痛いよ』

『さっきのお返しだ』

海のおでこにキスをして抱きしめた。

『ゴメンな。いつも、いつも心配かけて』

『うん』

海が俺に跳び付いてきてバランスを崩し2人は芝の上に倒れた。

『ねえ、隆羅、洋服汚れちゃった。ゴメンね』

『いいさ、洗って駄目なら、また今度一緒に買いに行こう』

『うん』

2人は大の字になって手を握り、空を見上げていた。

『綺麗だな。海』

『うん、それに気持ち良いね』

『ああ』

冷たい風が2人の頬を撫でた。

キルシュも空を見上げた。

その光景を潮は哀しそうな顔で2人を見つめていた。

2人共、助けられる方法は無いか。

もし、あの話を隆羅に聞かれたとしたら隆羅がどうするかも分かっていた。

隆羅にとってはどちらを選択しても死の宣告と同じ事なのだと。

クリスマス - 1

今年も、もう残すところ僅かだったが、五月先輩と俺は忙殺されていた。

『先輩。そろそろ俺達ヤバく無いですか』

『如月もそう思うか』

『ええ、かなり来ていると……』

『そうだな。俺も来ていると思うが、そろそろなのかあ』

『多少は、何か出るんでしょうね』

『ああ、考えておくよ。売り上げはウナギ登りだしな』

『ウナギと言うより、龍みたいですね』

『ああ、そうだな。あの看板のお陰だな』

『でも、あの看板でか過ぎじゃないですか、今に押し潰されますよ』

『如月そんな事言つてると殴られるぞ』

『だって、あのやたらデカイ看板のせいで、俺達潰れそうなんです
よ』

『それもそうだな』

『オーダー入ります』

透通るような声がする。看板の声だった。

『ハイ』

『あいよ』

それは、冬が近づく11月の中ごろの1本の電話から始まった。

『キサカ、お前、今どこで仕事しているんだ？』

『浜木町から、4、5分の所だけどなんの用だ、スギ』

『今から、そっちに行くから詳しい場所を教えてくれ』

スギこと3バカの杉田は外回りの仕事をしていた。しばらくしてスギが店に入ってきた。

『キサ、すまんが何か、とりあえず食わしてくれ、忙しくって飯食う暇も無いんだよ』

ランチ終了間際だったが快く了承した。

『本当に、お前ナイスな場所で働いているな、これはきつと神の思し召しだなきつと。俺、この先の会社で仕事しているんだが、ここが終ってから仕事手伝ってくれ。2週間限定・週2〜3日・1日1〜2時間・帰りはタク送、いいな』

本当に昔から変わらない奴だった。

『しかし、お前の会社、今どきタク送なんて景気が良いなあ』

『おうよ、なんてったってあの、天下の「水神コンツェルン」の傘下だからな』

今、聞き覚えのある会社名が出てきたが気のせいか、何で俺の周りってこんななんだ。

多少と言うか、かなり強引だがこれからの時期は何かと必要かと思いを承した。

何でも簡単な仕分け作業と聞いていたのだが、いざ始まってみるととんでもない代物だった。

仕分けは簡単なのだが、仕分ける荷物が過激なくらい重いのだ。とんでもなくキツイ仕事だったのだ。

アパートへ戻ると体を動かす事さえ出来なかった。

そして、水無月邸でも大変な事が起きていた。

『潮お姉ちゃん。もう嫌、何とかして』

『あら、風。そんなに怒ってどうしたの』

『だって、お姉ちゃんが兄貴に会えないせいでイライラしてすぐ怒るんだもん』

『困ったものね、海もどうしたものかしら』

『大体、兄貴がいけないんだよ。すぐになんでも安請け合いするかへタレのくせに。それに、お姉ちゃんもお姉ちゃんよ、そんなに会いたいのなら兄貴の店にでも行って会ってくれば良いんだよ』

『あら、風。良い事言うじゃない、その手があったわね』

スギの手伝いも残り半分という所で、その日もフラフラで仕事に向かった。

『ちわーす』

『如月、ちゃんと挨拶をしろ！』

『おはようす』

『仕方の無い奴だなまったく。紹介しよう、新しいバイトの海さんだ。ホールを担当してもらう宜しくな。今日からうちの看板娘だ』
自分の目を疑った。

そこに立っているのは白いスニーカーにキャメル色のキュロットを履き、お店ロゴ入りの黒いＴシャツを着てデニムのショートエプロンをつけて、頭にバンダナを巻いている紛れも無く海本人なのだ。

『先輩、何かのもの凄い嫌がらせですか？』

『いや、年末に向けてバイトが欲しいと思っていたら、ちょうど働きたいと電話があつてな管理人さんなら大歓迎だよな。如月』

『はあー。すいません、先輩ちよつといいですか。海、ちよつとここに来い』

海の手を引っ張り店の外に出る。

『いいか、潮さんの仕事関係の話は絶対にするなよ、大騒ぎになるから。いいな』

『えっ？ 何でどうして？』

『どうしてもだ、いいな』

海に念を押す。

『うん、分かった』

『先輩、分かりましたバイトの件、OKです』

店内に戻り言う和海が『ありがとっ、隆羅』と腕に抱きついてきた。

『海、それもここでは禁止だ。いいな』

少し強い口調で言う和海が膨れっ面をした。

『もっ、隆羅のバカ、あれも駄目、これも駄目って嫌！』

海が怒って殴りかってくる。その腕を掴み海の目を見る。

『いいか海、ここは職場だ。OFFじゃなくてONだ。今は俺がお前の先輩だ。それが嫌なら仕事に来なくていい。それと俺の事は「さん」付けか「先輩」を付けて呼ぶ事。分かったな』

『分かりました、隆羅先輩』

俺のことを海が恨めしそうに睨みつける。

『如月、お前達って本当は……』

『先輩の思っている通りです。海と付き合っていますですが何か問題でも？』

『いや、別に。まあ如月なら、そういう所は大丈夫なのはよく知っているから。でも少し言い過ぎじゃないか？ もうちょっと優しくな』

『いいえ。ONはON、OFFはOFFですから』

『しかし、如月のそんな所は昔から変わらないな。まあ、だから俺はお前をここに呼んだんだけどな。海ちゃんに仕事の段取り教えるから、如月は先に準備してくれ』

『はい』

先輩に言われて俺はキッチンに向かい仕込みと準備を始める。

『海ちゃんゴメンな。如月って仕事になるとあんな風になっちゃうんだよ。普段はヘナチヨコのくせに。そうそう、アイツとは島のホテルで1年くらい一緒に仕事していたんだが。そこで、アイツまだ若いのにバイトのまとめ役みたいな事していたんだよ。かなり人気者だったんだぞアイツはOFFでは皆を連れて海に行ったり、部屋に呼んで飲み会したりしてな。でもONでは厳しかった。恋人同士でイチャついていると怒鳴りとばしていたからな。バイトのシフト表はアイツに任せてあったんだ。他の奴じゃ絶対に嫌だと皆が言うてな。何でだと思う？ 恋人未満の奴らもアイツのシフトだと恋人同士になれるんだよ。どんなに秘密にしてもね。もちろん恋人同士は出来るだけ同じ休みだったけどな。皆の事をよく見てるんだ』

俺なんか何回驚かされたか。厳しくって辞めて行く奴もいたけどそれ以上に人気者だった。恋人同士になり結婚した奴なんて何組いた事か。でも自分の事はいつも後回しで、自分の事となると全然二ブチンで。後から聞いた話なんだが如月と結婚したいと言っていた女の子もいたくらいだ。海ちゃんもここでは我慢してくれ。あれがアイツのスタンダードなんだ」

『先輩、準備出来ましたよ』

『おお、サンキュー今、行く。仕事はいたって簡単、お客さんを案内して水を出してオーダーを聞いて、料理を運ぶだけ。レジは俺がやるから分らない事は聞いてくれるかな。それと、挨拶は笑顔で元気良くOKかな。俺の事は、そうオーダーでいいや』

『はい、分かりました宜しくお願いします』

海は少し恥ずかしかった、隆羅と一緒に仕事が出来るのが嬉しくって浮かれていた事を。

『ランチオープンするぞ』

『はいよ』

『ハイ』

海は自然に笑顔になっていた。

それは今までこんな隆羅を見た事が無かったからだ。

『オーダー入ります』

『はいよ』

オーダーを見てとても手際よく料理を作り始める。

綺麗に盛り付けをして『5番ヨロシク』とカウンターに出す。

それを海がテーブルに運ぶ。

『いらつしゃいませ』

『ありがとうございます』

大きな声と笑顔で挨拶をする。

それはごく当たり前な事をしているだけかもしれないのだけれど、とても新鮮で隆羅が凄く大人に見えたのだ。

そしてランチタイムが終わり休憩時間に入る。

隆羅が3人分の賄を有り合せの物で作り食べる。

その賄いは有り合わせの物で作ったのに店で出せるくらいの美味しい食事だった。

隆羅は、あつという間に食べ終わり店内のイスで横になり寝てしまった。

『オーナー。隆羅っていつもこんな感じなんですか』

『んん、最近は何んだか疲れているみたいだな。どうせまたやらないでもいい仕事でも引き受けたんだろう、こいつ断るといふ事知らない奴だからな』

そこには海がまだ知らない隆羅がいつぱい居たのだ。

夜の居酒屋タイムが始まる。隆羅も海も目まぐるしく動いていた。しかし隆羅の海への指示はいつもの的確ですばやかだった。

そして海が失敗をするとすぐに来てくれてフオローしてくれる。

自分が何の作業をしている時も店内を常に見回して、いつも見守っていてくれるている。

とても優しいだけどころかりした目で、それはとても安心できた。

隆羅が厳しいけれど人氣が有った理由が分かる気がした。

そして1日の仕事が終わった。

『お先す』

『お先に失礼します』

店から出て狭い階段を下りる。

階段から降りると『じゃあ、帰るか』と言って手を出すいつもの隆羅がそこに居た。

『うん』

海の手を握り歩きだした。

『今日は疲れたか』

『うん、少しだけ』

『そうか、無理しないで頑張れよ』

『隆羅。隆羅って凄いんだね』

『何が凄いんだ』

『仕事、大人って感じかな』

『大人って、俺は大人だぞ』

『違う。違う大人』

『はあ？ 俺は普通の事を普通にしているだけだ』

『ほら、やっぱり大人じゃん』

『だから、俺は大人だって』

『もう、バカ・バカ・バカ隆羅』

『バカ言うな』

こんなお馬鹿な会話をしながら山野線で渋谷に向かう。

乗り換えて西横線に乗る、西横線は渋谷が始発の為に席に座れた。

席に着き電車が動き出すとすぐに隆羅は腕を組んで頭を海の肩に乗せて眠ってしまった。

『隆羅って毎日こんな事していたんだ。こんなに大変なのに私たちにいつも休みの日は付き合ってくれる。凄いな隆羅って。ありがとう』

隆羅の可愛い寝顔を見て微笑んだ。

隆羅が目を覚ますと海も疲れて寝ていて終着の横浜だった、慌てて海を起こし折り返しの電車に乗る。
戻りの電車では大喧嘩だった。

クリスマス - 2

水無月家で今度は不穏な動きが……

『潮お姉ちゃん。お姉ちゃん機嫌が直ったのは良いけれど、毎日、気持ち悪いくらいにご機嫌なんだけどそんなに仕事って楽しいのかなあ』

『それは、だつて風。朝から晩まで大好きな大好きなターちゃんと一緒に居られるのよ。楽しくない訳ないじゃない』

『でもさあ、初出勤の翌日は、怒っている様にしか見えなかったけど「お姉ちゃんの仕事の話しちゃ駄目、隆羅にさわっちゃ駄目。あれもこれも駄目って隆羅のバカ」てぶつぶつ言ってたよ』

『そうね、海の仕事振りも一度見てみたいし、今度覗きに行ってみましょうか。ターちゃんの仕事している姿もついでに見にね』
そして、別の所でも……

この看板娘の噂は瞬く間に広がっていった。

スギの仕事の手伝いも終わり、体力的にも余裕が出来ている。

海もだいぶ仕事に慣れてきているようだった。

しかし、その日はいつに無く暇だった。

カウンターで海と先輩と3人で雑談をしていると、入り口の自動ドアが開く。

『いらつしやいませ』

そこに立っていたのは、ニコニコ顔の茉弥とお袋がこちらを見て手を振っていた。

近づいていき茉弥の頭を撫でながら『いらつしやい、良く来たな』と声を掛けた。

『兄さま。兄さま』

相変わらず茉弥が腕にしがみついていた。席に案内する。

『先輩、紹介します。うちの母と妹の茉弥です。で、お袋。こちら

が島でお世話になった五月先輩だ』

『隆羅の母です。隆羅の事を宜しくお願いします』

お袋が立ち上がって挨拶をした。海も茉弥の所に言っではしゃいでいた。

海がふつと俺の視線に気付き俺の顔を伺う笑顔で頷いた。

オーダーを受け料理を作る、ずーと茉弥がこちらを嬉しそうに見ていた。

海が料理を出すと美味しそうに食べている。

また、自動ドアが開いた。

『いらつしゃいま……』

入り口を見て俺は固まった。

入り口には大きいツインテールと小さいツインテールが立っていたのだ。

『お姉ちゃん、風、どうしたの？』

海が駆け寄った。そう小さなツインテールは風で、大きなツインテールはメガネをしていない潮さんだった。

潮さんは変装のつもりなのだろうか。

お袋と茉弥の方を見た時にお袋と目が合った。

俺は人差し指を口に当てて合図を送った。

お袋が判ってるわと言う顔をする。天然でボケボケのお袋だが一応常識人だった。

『潮さん、お久しぶりです』

お袋は潮さんと会うのは夏休みの海以来なのだ。

『風ちゃん、こっちこっち』

茉弥が手招きをしていた。

『如月さん、お久しぶりです』

潮さんも挨拶をした。風は照れながら茉弥の隣に座って楽しそうにおしゃべりを始めていた。

『オーナー、私のお姉ちゃんと妹の風です。お姉ちゃん、こちらが

オーナーの五月さんよ』

海が紹介すると、潮さんは微笑みながら軽く会釈するだけだった。俺は何の厄日だと思ったが取りあえず胸を撫でおろした。

潮さんもお袋の隣に座り何かを楽しそうに話始めた。

海がオーダーを取ってくる。

『オーダー入ります』

『はいよ』

俺が返事をした。そこへ先輩が寄ってきてた。

『おい如月。あの海ちゃんのお姉さんって、何処かで見た事がある気がするのだが』

『先輩、気のせいですよ、気のせい。それより邪魔です、仕事。仕事』

誤魔化した。いつもの様に料理を作り始めると今度は4人の視線が突き刺さった。

いやあ参った。

『料理あがったよ。ヨロシク』

潮さんたちと話していた海に声を掛ける。

『はい』

海が返事をして嬉しそうにテーブルに運んでいた。

照れ臭くってしょうがなかったのだ。

親しい人に仕事場を見られる事が今まで無かったからだ。

カウンターの中で片付けをする事にした。

皿がいつにもまして輝いた目で隆羅を見ていた。

それは嬉しさじゃなくそう憧れの眼差しだった。

『あらあら、困ったものね。ターちゃんは、また旗立てちゃって』

皿の顔を見た潮さんが心の中で呟いていた。

4人はしばらく話をしていたが他のお客が入りだしたので席をたった。

『ご馳走様でした』

そして潮さんがカウンターにやって来て俺に小声で言った。

『ターちゃん、あんまり旗立てちゃ駄目よ。このへ・タ・レ君』

訳のわからない事を言ってきた。

『旗ってナンの事ですか？』

『もう、ターちゃんはニブチンなんだから』

先輩と同じような事を言い出て行った。

『ありがとうございました』

そしてこの4人の出合いが俺をとんでもない事に巻き込む事など知るはずも無かった。

看板娘の客寄せ効果は絶大だった。

100人の男がいれば100人ともが振り返るであろう綺麗で可愛い海の事だ。

そして俺と先輩は本当に殺されかけない忙殺に飲み込まれて行った。

街はクリスマスカラーに包まれ始める、あちらこちらではイルミネーションが輝きクリスマスソングが流れ恋人達は楽しそうに歩き、街全体がこうウキウキと浮かれているようであった。

そんな日曜日、俺は1人で都内をブラブラしていた。

海と風は、この頃暇さえあれば部屋にこもって何かをしているらしいと潮さんが言っていた。

今日も誘ったのだが用事があるからといそいそと部屋に戻ってしまった。

まあある意味、毎日朝から晩まで一緒に居る訳だから日曜くらいは1人でゆっくりも良いかと思い出て来たのだ。

実家に居る時から暇さえあれば何をするでもなく都内をぶらついていたので、渋谷・原宿・新宿・池袋、若者が集まる所なら大体案内できる程度に知り尽くしていた。

1人だったので少し裏道をぶらつく事にする、しばらく歩くとそこ

だけ昔のヨーロッパにタイムスリップしたかのような小さな店があった。

アンティーク風の木の看板に「Lune^{ルナ}」と書いてある、ショーウインドウから中を覗くと小物やジュエリーの店らしかった。

ショーウインドーの中を見てみるとペアのブレスレットに目が留まったシルバーで出来ていて細身のプレートに小さなブルーダイヤが埋め込まれている。

煩くないチェーンがついてネームオーダー受けますの札がついていた。

海がこのブレスレットをしているイメージが浮かんできた。

実はクリスマスプレゼントを何にするか考えながら歩いていたのだ。

数日前、仕事が終わった後に先輩に呼ばれた。

海が来てからと言うもの毎日のようにお客が押し寄せ、忙殺どころじゃない忙しさが続いていた。

『これは、ボーナスと言うか中身は寸志程度だが受け取ってくれ売り上げも上々だしな。それとクリスマスイヴは休んでいいぞ2人でゆっくり過ごすといい。俺からのクリスマスプレゼントだと思つてな。店の方はうちの奥さんに頼んであるから大丈夫だ。夜も常連のお客の予約だけだしな』

ボーナスは有り難く頂き、休みも遠慮なく取らせて貰うことにした。俺が来る前までは先輩と奥さんの2人で回していたのだから大丈夫なのだろう。

そして、今日の目的のプレゼント探しに出てきた。

まあ探すと言ってもただブラブラするだけなだけど。

茉弥と凧への誕生日プレゼントと同じでインスピレーションが大切で。

ペアのブレスレットを頼みネームをオーダーして店から出ようとして、もう1つ目に付いた物があった。

それはペンダントにもなるグラスホルダーなのだがとてもシックで落ち着いている、これを潮さんにどうかと思った。

まあ潮さんなら何でも持っている気はするのだがようは心だろう。

綺麗にラッピングしてもらいブレスレットと一緒に取りに来る事を告げて店を後にした。

その後はデパート周りをしていた。

つばがゆるくウエーブした可愛らしい白い帽子が目にとまった、茉弥に似合いそうだと思い即決し。

その向こうには俺が長野の時に被っていた派手なオレンジ色のキャップに良く似たキャップがあった。

それを風のプレゼントに選んだ。

お袋には何を送るか悩んでいた。お袋の趣味は親父以外には分からない。しばらく歩いていると暖かそうなベージュのストールが目に入ってきた、カシミア入りでいい感じだったので購入し包んでもらう。

だいぶ財布の方は飛んで行きそうなくらい軽くなったがこの為にスギの仕事の手伝いもしたのだから。

そして残るのは、海と2人でどう過ごすかという事だけだったのだが、俺達の知らない所でかなり前に有無を言わず決定されてしまっていた。

それは浜木町の俺と海の仕事先にあの4人が鉢合わせした日に……

『母様、もうすぐクリスマスですね』

茉弥が楽しそうにお袋に言った。

『そうね茉弥、今年はタカちゃんにケーキ作ってもらってパーティーしようね』

『うん、母様。茉弥、大、大賛成！』

茉弥が嬉しそうにバンザイをして飛び跳ねた。

『それなら、もし良ければ私達とみんなでクリスマスパーティーをしませんか？』

潮さんの提案だった。

『でも、うちは狭いから大人数は無理ですし一般ピープルの家なんてそんなものである。』

『それなら、風達の家でやればいいじゃん』

『それもそうね』

『えっ？ お邪魔していいんですか。まあ私もお屋敷は見てみたいですね』

お袋も中流家庭だった。

『じゃあ、潮お姉ちゃん決定ね』

『それじゃ、ターちゃんにケーキを作ってもらって、ターちゃんに料理準備してもらって、ターちゃんに頑張ってもらう。それでいいかしら』

『大賛成！！』

声がそろったのである。

それを知ったのはプレゼントを買って帰った後の事だった。

クリスマス - 3

俺は海とイヴの予定を決めるべく海の部屋に向かっていた。

ドアをノックして『海。居るか、開けるぞ』と言うとドタン、バタン、ガタンと凄い音がする。

『駄目、今開けちゃ駄目！』

心配になりノブに手を掛けると海が顔を出した、とても慌てている様子だった。

『凄い音がしたが大丈夫なのか？』

『だ、大丈夫だから。何の用なの？』

『いや、イヴの予定を話したくてな』

なんだか自分自身がとても悪い事をしている様な気分になっていた。

『じゃ、あつちで話しをしよう』

手を引っ張られて応接間に連れていかれた。

何だったんだろう、年末だしまあ部屋の大掃除でもしていたのだらうと思った。

しばらく海と他愛のない話をしていると潮さんが現れた。

『あら、ちょうど良い所に居るじゃない。ラブラブカップルが』

『バカッブルみたいな言い方やめて下さい』

嫌な予感がした。

『ターちゃんと海はイヴの日は仕事なの？』

『いえ、先輩に海とゆっくりする様にと休みを頂きました』

『2人でゆっくりね。でもゴメンなさいターちゃんにお願いがあるの』

『何ですかそのお願いって？ 俺に出来る事なら出来る限りはしますけど』

『ターちゃんにしか出来ないお願いなの。実はイヴの日にうちでパーティーをする事になってケーキや料理を準備してもらいたい』『無理ですね』

『でも、そのパーティーには、沙羅さんや茉弥ちゃんも参加するんだけれど。ね、お願い。この間、4人であつた時に決定しちゃったの。お願いよ』

『それはお願いと言っくんじゃなくて、命令か強制と言っくんじゃないですか？』

『それは違っわ。お願いと言っ事後承諾よ』

『馬鹿馬鹿しい』

『海も、愛しいターちゃんの美味しいケーキや美味しい料理食べたいわよね』

『うん』

キラキラとした嬉しそうな目で俺を見る。

『ああ。もう、しょうがねえなあ。やりますやらせて頂きます』

『じゃ決まりね、ヨロシク。ターちゃん大好きよ』

『それは、結構ですから』

毎年クリスマスは、茉弥とお袋と俺の3人だけでしていた。

俺が居ないここ数年は2人でしていたのだろう。

そんな事を考える、茉弥もみんなとパーティーは楽しみにしている筈だ。

俺と海の2人の都合だけで、無下に断る事など決して出来る筈も無いわけ。

茉弥や皿の事を考えればこそだった。

それに海にあんなに嬉しそうな顔をされて断る事の出来る男など居ないだろう。

イヴの前夜、仕事が終わってから俺は翌日の仕込みの為、水無月家のキッチンに居た。

メニューは頭の中で大体決まっている、レシピさえ解ればどんな料理でも作りはするが料理を基本から覚えた訳ではないので殆どがオリジナル料理だった。

それにクリスマスの料理と言っても茉弥の為に お袋と相談しながら

作っていたのでお子様メニューばかりなのだが、だからと言って決して手抜きではない。

取りあえずケーキとサンドイッチの仕込みだけ前日に終わらす予定でキッチンに立っていた。

ケーキは2種類。

1つはココアのスポンジでラズベリーのムースをサンドしてチョコレートコーティングしたもの、後で粉砂糖でデコレーションをする。そしてもう1つは定番のブッシュドゥノエル作り方は色々あるがこちらチョコレートクリームで、茉弥と凧はチョコレート系がお好みらしい。その為のチョイスである。

サンドイッチは、卵やハム、キュウリなどの定番中の定番だ。

予定通り3時間弱くらいで仕込が終わった、家のキッチンではこうは行かない。

ここはちよつとしたレストラン並みの設備がある、水無月家のキッチンならではだった。

そしてここは、あの日どんな事をしてでも海を守ると決めた2人でリゾットを食べた場所でもあった。

あの時と同じようにキッチンの床に座り壁にもたれて何も考えずに休んでいると、誰かがキッチンに入ってくる気配がした。

見上げると海だった。

『どうした海？ こんな時間に』

『コーヒーが飲みたくなつて部屋から出たらキッチンに明かりが点いていたから、まだ隆羅がいるのかなあって』

手には温かいコーヒーが入ったカップが2つあった。

海が俺の横に座り『コーヒー飲む？』とカップを出した。

『ああ、サンキューな。なあ、海。憶えているか？ あの時もこんな感じだったなあ。海がグシュグシュでリゾット食べてたよな』

『だってしょうがないじゃん、あれは、だって隆羅が』

『そうだな、ゴメンな変な事言つて』

しばらく沈黙が流れた。

俺は、あの潮さんの電話の言葉を考えていた。

あと、どれ位こうして海と一緒に居られるのだろう時間ほどの位残されているのだろう。

俺が居なくなつた時、海は今までの俺との思い出を全て忘れてしまふのだろうか。

すると海が切なそうな声で話しかけてきた。

『隆羅、何でそんな哀しそうな目をしているの？ そんな目をお願いだからしないで。悩みがあるのなら話してくれないかなあ、2人でなんとかしよう。お願い』

海の表情はとても揺れていた。

『大丈夫だ、俺は海とこれからもずーと一緒にだ』
笑って答えた。

『うん、私も隆羅とずーと一緒にだよ』

『そうだな、明日も朝から準備だ、もう寝るぞ』

立ち上がり2人でキツチンを後にした。

玄関まで送ると言われたが1人で大丈夫だと断り、海のおでこに軽くキッスをして『おやすみ』と別れた。

今さら悩んでも仕方が無い、俺は全力で海を守る。

どうしようもない事にも全力でぶつかるしか今の俺には出来ないのだから。

覚悟は出来ている筈だった。

翌朝は準備に追われていた。

大根を半分くらいに切りアルミホイルを巻いて皿に立てる。

そこにピックにさしたミートボールやプチトマト、チーズなどをさしてツリーに見立て周りには鶏のから揚げを盛り付ける。

あとは、鶏の骨付きも肉のロースト・トマトソース煮、パスタを数種類、明太子とクリームチーズのディップをクラッカーにのせる。ケーキの丸型にカレーピラフを敷き詰めそこに型と同じ大きさに焼いたハンバーグを入れ、またカレーピラフを敷き少し押し固め落ち

着かしてから皿に型から外し、ケーキの様に錦糸 玉子やニンジンのグラッセやグリーンピースなどでデコレーションする。

あとは一口おにぎりなのだがこれは海が手伝うと言ってくれたのでやっってもらっている。

小さめのラップにふりかけなどで色々な味を付けたご飯を巾着の様に絞りボンをするいたって簡単なのだが数があると結構見栄えがする、それに手を汚さずに食べられる。

サラダ系も思っていたら、お袋から電話がありタカちゃんだけじゃ大変だろうから何か作って持っていくと言ったので打ち合わせをしてサラダ系をお願いをした。

サラダならかさ張るが重たくは無いはずだし、潮さんが車で迎えに行くと言ってくれたので問題は無いだろう。

凧と潮さんは会場のセッティングをしている様だった。

パーティーは夕方からだった。

それにあわせて準備していたが少し時間が余ったので一人で庭を散歩していた。

そしてキルシュに会った。

『お前これからどうするのだ?』

『どうするって何がだよ』

『お前には、覚悟が出来ているのだろう』

『ああ、でも誰にもこれからの事なんて分からないじゃないか』

『そうなんだが』

『なあ、キルシュ。誰しも先が見えず不安になったり、未来に期待したりして悩みながら生きているんだ。でも、たぶん何とかなるもんなんだ、どんな事でもな。ナンクルナイサーさ気楽に行こうぜ』

『そんなものなのか?』

『そんなもんだろ人生ってやつは、今まで何とかならなかった事なんて無いじゃないか。そうだろ』

『そうだな』

『でも、ニライカナイやパイパティローマ・ハイドナンが在ったらしいのになあ』

『なんなんだそれ』

『沖縄の昔からの言い伝えで何処かにあると言われている理想郷が楽園みたいなものかな』

『そうか、楽園かそうだな』

『ああ、ヤバイ時間だ。また後からな』

クリスマス - 4

クリスマスパーティーが始まった。

まずは乾杯から、大人はシャンパン子どもはシャンメリーで乾杯をする。

『乾杯！』

『メリークリスマス！』

パン、パン、パン、パン。クラッカーがなった。

楽しいクリスマスパーティーになりそうだ。

プレゼント交換がはじまった。

最初は凧と茉弥だった。

凧から茉弥へは手編みの綺麗なブルーのマフラー、なにやら内緒話をしているが。茉弥から凧にはちよつと不恰好の手編みのミトン手袋だ。

凧から俺には茉弥とおそろいのマフラーだった。

『兄さまとお揃い』と喜んで茉弥がマフラーをして走り回っていた。そして俺から凧にはあの派手なオレンジのキャップだ。

兄貴とお揃いみたいで格好良いと大喜びして被って『どう似合う』と皆に見せた。

凧からお袋へは、とても暖かそうな手袋だ、海と一緒に買ったらしい。

お袋から凧と海へはおそろいの黒のタートルネックのセーターだった。

茉弥から海へは、凧とおそろいのちよつと不恰好な手編みの手袋だ。『とても、暖かそう茉弥ちゃんありがとうね』

海が茉弥の頭を撫でていた。茉弥から俺には黒の皮の手袋だった。何でも海と凧に編んでいたら俺のを編む時間がなくなってしまったらしい。

お袋から俺には、コートタイプの膝位まである大きな目のダウンのコ

ートだった。

俺からお袋にはカシミア入りのベージュのストールを、お袋と茉弥は家で交換して来たらしい。

何を交換したのかは秘密と教えてくれなかった。

水無月家の面々は毎年恒例で皆で後から買いに行くとの事だった。

俺から潮さんにはグラスホルダーをプレゼントする。

『あら、ターちゃん。中々のセンスしているわね』

潮さんから俺には、黒いパスカードの様な物だった。

『潮さんこれって？』

『そのカードがあれば日本中のテーマパークや遊園地なんかに入れるわよ。海といっぱいデートしてきてね』

とウインクした。

『ついでだからこつちもあげちゃうと』

シルバーのカードを出した。

『有料道路フリーパスよ。またどこか遠くに行ってもらう事あるかもしれないし、今日は大盤振る舞いよ』

いや遠くってありえないし。

俺は日本中が水神コンツェルンに乗っ取られている気がして仕方が無かった。

潮さんから茉弥には、クリスタルで彩られた蝶の形のブローチだった。

そしてもう一つ潮さんに預けたプレゼントがあった。

『これをあの子に？』

潮さんは笑っていた。

『似合いますよたぶん』

『ターちゃんそんな事を聞かれたらあの子怒るわよ』

それはキルシュへのクリスマスプレゼントで中身は赤い首輪だった。

そして今日のメインイベントばりに、みんなの視線が俺と海に集ま

った。

『兄貴とお姉ちゃんってどこまで進んだの？』

なんて事いきなり凧の奴が聞いてきやがった。

潮さんとお袋が『全部吐け』やら『A・B・C』などと囃し立てる、
茉弥は意味も分からずはしゃいでいた。

顔を見合わせて真っ赤になっていると『もう、イチャつくのは後で
ね、夜はまだこれからだからね』と凧が言つと『ママも詳しく聞
きたいなあ』などとお袋までもが言いやがった。

『まあ、今日は強引に2人を巻き込んだし、後でいくらでもラブラ
ブしてね。チュッ』

潮さんは投げキッスをしていた。

こうなる事は分かりきっていたが流石に恥ずかしかった。

『ああ、もう料理が冷めるだろう。早く食べる』

苦し紛れに言つたが効果はなかった。

実は海が準備の手伝いをしている時に『隆羅。少しだけ時間を作
つてね、2人だけの時に渡したいから』と言ってきたのだ。

それは願っても無い事だった、俺としても2人だけの時に渡したか
つたからだ。

パーティーは大盛況だった。

凧と茉弥ははしゃぎ回っているし。

潮さんとお袋は楽しそうに会話をしていた。

2人が悪巧みを考えていない事を祈るばかりだった。

海はとても嬉しそうな顔でみんなを見ていた。

しばらくすると茉弥が耳元で『兄さま、お膝抱っこ』と言ってきた。
『ん、いいぞ』

茉弥を抱き上げ左膝に乗せ後ろから抱える。

『えへへ、兄さまのお膝』

嬉しそうに体を預けてきた。

凧が羨ましそうに見ていたが恥ずかしくって自分もとは言えないの

だろう。

『風もか？ ドンと来い』

右膝を叩く。風が嬉しそうに走ってきた。

風を抱き上げて右膝に乗せる。

『ふふ、温かいね』と茉弥と顔を合わせる。

2人の温もりが伝わってきた。

『あら、本当の双子ちゃんみたいだね』

お袋が嬉しそうに見ていた。

『ターちゃんはモテモテね。海、ターちゃん取られちゃうわよ』

潮さんが冗談を言うが海は何も言わずにただ微笑んでいた。

それから盛り上がったが茉弥は眠そうにしていた。風に頼んで隣の部屋で寝かせてもらう事にする。

お袋が風の案内で茉弥を連れて出て行った。

しばらくするとお袋だけが戻ってきた。

『あれ、風はどうした？』

風がまだ寝るような時間じゃなかったたので聞いてみた。

『うふふ、茉弥と一緒にベッドに入って、お話していたら2人とも寝ちゃったわ』

はしやぎ回って疲れたのだろう。

しばらく4人で話していた、話の内容は殆ど俺と海の事で酒の肴にされているだけだった。

そのうち潮さんとお袋が2人で話しこみだした。

『なあ、海。楽しいなこんなパーティー』

『うん、そうだね。来年も一緒にパーティーしようね』

『ああ、そうだな』

少し心が痛かった。ドアがスーと開きキルシュが入ってきた、腹でも減ったのだろう。

潮さんに鶏肉をほぐして貰い食べてだした。

『大きな猫ちゃんね、可愛い。あら、この子使い魔ちゃんね』
沙羅がキルシュを撫でながら言った。

『えっ？ 判るんですか』

海が驚いていた。

『ええ、これくらいならね。海ちゃんも知っているとと思うけれど、私も退魔師の一族の端くれだからね。あまり力は無いけれど。この子の名前はなんて言うの』

『キルシュです』

『キルシュちゃんかケーキみたいな名前ね。なんだか懐かしい匂いがするわ。もしかしてキルシュちゃんは母に会った事あるのかしら母の匂いがする』

『良かったわね、新しい生き方を掴んだのね。海ちゃん達のお陰かしら』

沙羅がキルシュに話しかけるように言った。

『沙羅さん、それはどう言う事なのかしら、教えてもらいたいんだけど』

潮さんの目が真剣になった。

『潮さんは知っているとと思うけれど、私の母、綺羅の力は日本でも5本の指に入るくらい強かったわ。でもね、鬼や妖しは別として、全ての使い魔を滅していた訳じゃないのよ。余程の悪さをしない限りはね。ダメージを与えて弱った所を封印して契約を断ち切るの。力は使う側によって悪くも良くもなるだから使う側の問題で、この子たちは決して悪くないって。でも自分には救う事も出来ない。後はこの子たちの生きたいと思う気持ちと運に頼るしかないんだって言うていたわ。でも殆どの使い魔は契約が切れた為に消えてしまった。でもこうして生きていくれる子がいるのね私は嬉しいわ。母は間違っていないかったんだって』

海は隆羅の島でのあの言葉を思い出していた。

『人間が作り出した物は、殆ど便利な道具だと思う。でも、悲しい事にその殆どの物が凶器にもなってしまう。それは道具を使う人の心によって便利な物にも凶器にもなってしまう。道具に責任は無いんだ』

そう全て人間側の問題。

そしてその思いはきちんと受け継がれている事に驚いた。

海が気付くと部屋に隆羅は居なかった。

さつきキルシュが部屋に入ってきたのは隆羅が部屋からでた直ぐ後の事だったのだ。

おそらくキルシュの気配を感じていたのだろう。

『お前、どこに行くんだ？』

『キルシュ、悪いが少し独りにさせてくれ』

『そうか、判った』

キルシュは入れ違いで部屋に入っていた。

屋敷の廊下の電気は消えていたが月明かりが差し込んでとても明るかった。

茉弥と凧が寝ている部屋の先まで歩き廊下の床に座り壁に寄りかかり庭の方を見ると池の水面に月の光が反射してとても綺麗だった。

隆羅は、あの河川敷での出来事の説明を潮に求められた時の事を考えていた。

『隆羅、あそこでいったい何があったの教えてちょうだい。お願いよ』

『あの日は、朝から嫌な空気を感じていたんですでも気のせいだと思つて。そして実家に行き誕生日会をして実家を出た時に朝感じた嫌な空気をハッキリ感じたんです。それでも取りあえず海と凧に心配を掛けまいと駅に向かい、その途中で頭の中にスライドの様に画像が浮かんできたんです。「上から襲い掛かる影」「驚いてしゃがみ込む2人の姿」「河川敷に向かい走っている自分の姿」それで凧に海を連れて先に帰るように言いました。その時に影に襲われて画像と同じ事が起きたんです。2人が俺から離れるのを確認して河川敷へ、その手前で違う影に襲われて河川敷では2匹から襲われて弄ばれているようでした。逃げ回っていたら海が現れてしまい橋脚を

背にしてどうにかしなきゃと思っていた時に、周りをかなりの数の影に囲まれて峠の時と似た状況で覚醒してしばらくは応戦したんですが、方を付けようと一気に襲い掛かれた時に手から透けたオレンジ色の炎のようなものが当たり一面に広がって影が跡形も無く消えて海の無事を確認した後の事は覚えていません」

『使い魔は全部で何匹居たの？』

『15くらいかと』

『覚醒のきっかけは何？』

『何かと言われればお袋の言葉かも「自分の退魔師の力を信じる」常にクールでいろ」と言われて』

『何故、沙羅さんはそんな事を』

『分かりませんが、お袋も何か感じていたのかもしれませんが』

『使い魔のマスターは居たの？』

『いえ、見られている気配だけでした』

『それだけの使い魔を従えると言う事は、かなりの力の持ち主でかなりの使い手だわ。もしかしたら「逢魔の闇」まさか……』

『逢う魔の時の事ですか、黄昏時や百鬼夜行が現れるって言う』

『本当にあなたは変な事に詳しいわね』

『逢魔の闇は、昔から私達の鍵を狙っている者の事よ。闇を操る者、闇は百鬼夜行を従える者。ありえるわね、鍵は今、私達の手を離れている。そして強い力は強い力を引き寄せてしまうから』

『それは、どんな姿なのですか』

『大体人型ね、容姿不明、年齢不明、性別不明、時によって色々よ。でも子どもの形が一番最悪ね理由は分からないのだけど昼間でも活動可能だわ』

『昼間でもですか？』

『そうね、でも危険を冒してまで動き回らないと思うけど。使い魔は元が生きた動物だから昼でも関係ないけれど闇は違う、子ども以外の形なら太陽の光を浴びれば消えてしまう』

『吸血鬼みたいですね』

『吸血鬼の方が可愛いものよ、もし闇なら勝ち目は無いわ。100%じゃないけれど力が桁違いなのよ』

『何故、100%じゃないんですか？』

『それは、正直に話すから良く聞きなさい。あなたの封印が完全に解ければ何とかなるかもしれない。自分の力をフルに使いこなせると言っ条件付でよ、それでもどうなるか全く分からない』

『封印が解ければですか？』

『そう、だけど今は解き方も分からないし、解いた右腕だけでさえ使い方はまだ分からない事ばかりなんですよ。あまりにも危険すぎるわ』

屋敷の廊下で窓の外を見て遠い目をしていた。

『正ただし、本当に何とかなるのか、気楽な気分じゃねえぞ、まったく』

『隆羅、見つけたあ』

海の声に少し驚いて見上げると、そこにはとても綺麗で可愛い顔つきの海が微笑んで立っていた。

『どうした、海？』

『ああ、忘れているでしょ』

『えっ何がだよ』

『約束、忘れているでしょ』

『悪いそうだったな』

『そうだったじゃなくて』

俺の耳を海が引っ張った。

『痛いって、だからゴメン』

『もう。はい、メリークリスマス』

海が笑って紙袋を出した。

『ありがとうな、開けてもいいか』

『うん』

『凄いな、海が編んだのか、とても暖かそうだな。ありがとう大事

にするよ』

それはざっくりとした白い手編みのセーターで左腕のところに青いラインが一本入っていた。

『ちよっと、難しかったけどね』

『そうか、俺からもクリスマスプレゼントだ。メリークリスマス』
小さな包みを渡す。中はあのペアのブレスレットだ。

『ありがとう。開けていい』

『ああ、いいぞ』

『これって、隆羅ありがとう』

海が包みを開けて抱きついてきた。甘い匂いがする。

『ねえ、名前が彫ってあるよ』

『そうだな』

『じゃあ、ん、ん』

海が俺の目の前に手首を突き出した。優しく手を取り着けてやる。

彫られているネームは「Takara Kisaragi」

『じゃ、隆羅も。ほら、手』

『ああ』

手首を出す。海が手首に着けてくれた。ネームはもちろん「Kai

Minaduki」

『なんだか、結婚式みたいだね』

『そうだな、でもあれは指輪だぞ』

『いいんだもん。凄く嬉しいんだもん』

『そうか俺もだ』

『隆羅とどんな時も一緒だね』

『そうだな、俺も海とどんな時も一緒だ』

お互いのブレスレットを見つめた。

『ねえ、隆羅の昔の話聞きたいな』

『この間、スギとクロに聞いただろう』

『そうじゃ無くて。じゃあ島のお話し、私と出会っ前の』

『そうだな、あまり話す機会なかったもんね』

『うん。聞きたい、お願い』

『親父ともめて、地元から居なくなり横浜で仕事をしていたのは知
っているよな』

『うん、聞いたよ』

『その後、船で沖縄本島に向かいそこからまた船で石神島へ向かつ
たんだ。島には着いたけれど仕事も見つからず、金は無くなつて来
るし小さな漁港で途方に暮れたたんだ。そこで漁師をしている睦月
正つまり睦月美夢の兄貴に会ったんだ。』

『へえ、じゃあ美夢ちゃんとは付き合い長いんだ』

『ああ、3年くらいになるかな。それでその漁港で正が一方的に
話しかけてきて行く所が無いのなら家に来いって連れて行かれてし
ばらく世話になっていたんだ。魚を運んだり、漁具の手入れの手伝
いをしたりしながらな。俺には友達なんてスギとクロしか居なかつ
たから凄く戸惑ったんだけど、あいつらとお袋さんはそんなのお
構いなしだった。驚いたよ見ず知らずの人間にそこまでしてくれる
なんて、この島もこの島の人も皆、温かいんだって思った。そして
正達に出会った事で俺も変わって行っただ。そして島で生活をす
る事を決めたんだ。ホテルで仕事して最初は寮に入ってそのホテ
ルで五月先輩と出会って一緒に仕事して、落ち着いてきてアパート
探してあのアパートに住み始めたんだ。でもホテルで仕事を始めて
1年くらいの時にトラブルを起こしてホテルを辞めて。その後はい
ろんな仕事をしたぞカクテルバーやイタリアンのお店の調理、コン
ビニ、最後に居酒屋とパン屋。それで、空から光の玉が振ってきた
り、知らない女の子が部屋に居て殴られたりだな水の精だの影だの
鬼だの信じられないものがいっぱい出てきた。俺も退魔師の一族の
末裔だったり。でも、海に出会えた事、凧に出会えた事、潮さんに
出会えた事、感謝しているんだ。そして初めてこんなにもひとりの
人を好きになれた、ありがとうな海』

『私もだよ、ありがとう隆羅。でも美夢ちゃんにお兄さんがいるん
だ』

『いや、今はもういない。海で亡くなっただんだ』

海が知らない隆羅の心の傷を少しだけ見た気がした。

『あのね、私にも私を変えてくれた人が居るの。笑顔を忘れてしまった私に笑顔をくれた人。子どもの頃に、どこかの池の周りで大切な物を失くしてしまつて泣いていたの。そうしたらひとりの男の子が「どうした、何をそんなに泣いているんだ」つて「探し物が見付からない」つて言つたら一緒に探して見つけてくれたの顔も覚えていないし、名前も分らない。でも、凄く優しくつて温かい男の子だった。それで、私の秘密を教えてあげたの絶対に内緒だよつてまた、会いたいな。きつといつか会えるよね』

『そうだな、きつと会えるさ。海がそんなに思っているのならな。

海にもそんな事があつただんだ』

『うん、だけど最近とても怖い』

『怖いって何がだ？』

海がとても不安そうな顔をして俺の顔を見ていた。

『幸せすぎて怖いのかんなに幸せで良いのになつて。風やお姉ちゃんも隆羅に会つてから毎日、とても楽しそうだし、隆羅のお母さんや茉弥ちゃんはとても優しくしてくれる。それに、こんなにも大好きな隆羅がいつも傍にいてくれる。でも隆羅ばかりが危ない目に遭つて、私は何も出来なくて。子どもの頃とても幸せだった。そしたらママが突然、居なくなつちゃたの』

『大丈夫だ、心配ないから。俺はどこにも行かないから』

『嫌あ、嫌だあ。ママも隆羅と同じように「大丈夫、心配ない」つて言つて死んじやつたんだもん』

号泣だった隆羅のシャツを掴み隆羅の胸に顔を埋めて。

『隆羅が、隆羅がどこかへ行っちゃう！ 隆羅が居なくなったら私、私どうしたらいいの？ 隆羅、お願いだからどこにも行かないで！』

私を置いて行かないで。どこにも……』

何も言えず、ただ力いっぱい抱きしめた。

それしか出来なかった。

どれだけ泣いたのだろう少し落ち着いてきたようだった。

『海、大丈夫か？』

『うん』

しばらく沈黙が流れた、海のしゃくり上げる息遣いだけが聞こえた。

『隆羅、キスして。お願い』

海が顔をまっすぐこちらに向けて目を閉じた。

優しく海の頬に両手を当てて顔を近づける海の息遣いがとても近く感じる。

「キイイイ」ドアが開く音がして慌てて離れた。

茉弥が寝ぼけて出てきたのだ。

海の肩が震えている、俺の肩も震えていた。

笑いを堪えて。

2人で顔を見合わせて大笑いした。

『あはははは』

『うふふふふふ』

『大変だな、ヘタレの彼氏って言うのも』

『うん、でもそんなヘタレが大好きなの』

『そうか、めちゃくちや綺麗な彼女が居るのも大変なんだぞ』

『そうなの？』

『そうさ、でも大好きだからな。しょうがねえなあ』

『そうだね、しょうがねえなあだね』

俺と海は立ち上がり茉弥の所に歩み寄った。

『おい、茉弥どうしたんだ？』

『兄さま、海姉さま。おトイレどこ？』

『じゃあ、一緒に行こう。茉弥ちゃん』

『兄さまも一緒に』

『ああ、分かった』

3人で手を繋いだ。

クリスマス - 5

翌日、俺と海は拉致された。

朝、海と凧は2人で朝食を食べていた。

その頃、潮さんは書斎で調べ物をしていらした。

凧が目聡く海の左手首に光る物を見つけた。

『お姉ちゃん、これはなにかなあ』

海の左手からスリも真つ青なくらい目にも止まらぬ速さでブレスレットをすばやく外す。

『駄目。それだけは駄目。凧！ 返しなさい！』

『やだもん』

凧が食堂から飛び出した。

『お願い。返して！ 凧！』

凧を追いかける。

凧が潮さんの書斎に逃げ込んだ。

『朝から騒がしいわね。何なのいったい』

『凧。返しなさい！』

そこに海が走り込んで来た。

『2人ともいい加減にしなさい。朝ばらから』

『海、一体何の騒ぎなの？』

『凧が私の大切な物取ったの』

『凧、何なの貸しなさい。あら素敵なブレスじゃない。ネーム入りでラブラブね。凧、返してあげなさい』

潮さんが凧から受け取りブレスレットをまじまじと見ていた。

『ええ、だって』

『だってじゃありません。ターちゃんから貰ったものを誰かに取られたら凧は嬉しいの。違うでしょ』

『判った。その代わりこれを着けてここに居てね』

ブレスレットを凧が海に返すと、海はホッとして左手にブレスレッ

トを嵌める。

すると、ガチャリと海の右手に玩具の手錠を風が嵌めた。それにはロープが着いていて書斎のソファアの足に縛り付けられていた。

そして風は書斎から飛び出して行った。

『お姉ちゃん、お願い外して』

『あらあら、でも鍵は風しか持っていないわよ』

『仕事に遅れちゃうよ』

俺はまだ夢の中だった。

俺の左手首にもブレスが光っていた。しばらくするとガチャリと音がした。

『ガチャリってなんだ』

左手首を見ると厳つい手錠の様な物が、そこにはロープが付いていてその先にツインテールが居た。

『確保成功。これより護送いたします。来い』

風に引つ張られた。

『あのう風さん？ 引つ張るのはいいんですけど。俺、今Tシャツにパンツ1枚なんですけれど』

俺が立ち上がると風の顔が真っ赤になった。

『ば、バカ兄貴、早く何か穿いて』

イスに掛けてあったGパンを穿く、手錠とロープが邪魔でバランスを崩し風に覆いかぶさった。

『ど、どいて、早くバカ、バカ、バカ』

『おっ悪りい悪りい』

立ち上がりGパンを穿きシャツを羽織る。

『バカ兄貴、こっちに来い』

思い切り引つ張られた。何かの変なプレイみたいだ。

連れて行かれたのは潮さんの書斎だった。

書斎に入ると海が手錠とロープで繋がれていてしょげていた。

『海、何してるんだ。お前？』

『凧に嵌められた』

『兄貴もここに座れ』

言われ手錠を外されて、海がされていた手錠に繋がれた。

『潮所長、隆羅及び海を拘留いたしました』

凧が俺達に背を向けて訳の分からない事をしゃべり始めた。

俺は凧に聞えなえない様に海に話しかけた。

『海、こつちに手を出せ』

海の手錠をヘアピンで外す。

『隆羅、それどうしたの？』

『しいー』

指で口を塞ぐ。そして自分の手錠を外した。

潮さんは楽しそうにこちらを見ていた。

『これから、2人にはじつくりとペアのブレスレットについて尋問させてもらいます』

ガチャリと凧の足首に手錠を嵌める。

『えっ？』

凧が驚いて振り返った。

『海、走れ』

『仕事に行つて来まーす』

手を繋いだまま走りだした。

『待つてえー！ ギャアン！』

潮さんがお腹を抱えて笑っていた。

凧が追いかけ様として手錠についていたロープがピンと張り倒れたのだ。

『凧、あなたの負けよ。ターちゃんもやるようになったわね。うふふ』

俺と海は笑いながら走り仕事に向かった。

あのヘアピンは凧に覆いかぶさった時に1本だけ凧の頭から抜いて

おいた。

玩具の手錠など子どもの頃によく親父にされて拉致られたので外す事などお茶漬けサラサラだった。

除夜の鐘が鳴っている。

俺は実家でお袋と茉弥と大晦日を過ごしていた。
久しぶりの実家の風呂で湯船にのんびりつかる。

海達はと言うと何でも大晦日に定例の集まりがあるらしく年明けに
しか戻らないらしい。

そんなわけで実家でゆっくりとしている訳だ。

『あら、茉弥。何をしているの？』

『あのね、兄さまにお年玉あげるの』

クリスマスプレゼントの隆羅のダウンのコートに茉弥が板チョコや
クッキーなどをポケットに入れていた。

『茉弥のお菓子なのに良いの？』

『うん、でも内緒だよ』

『分かったわ、茉弥は優しいのね』

『えへへ、茉弥。兄さま大好きだもん、内緒ね』

『2人だけの秘密ね』

『茉弥はそろそろもう寝なさいね。2階に行きましょう』

『うん、分かった』

2人は茉弥の部屋がある2階に上がった。

『ああ、気持ちよかった。あれ、お袋は。2階かなあ』

お袋が2階から降りてきた。

『茉弥はもう寝たのか？』

『ええ、今寝かせたわ。年越しそばでも食べる』

『あ、うん。少しだけな』

2人でコタツに入りながらそばを食べながら話していた。

『今年も、いろんな事があったわね』

『そうだな』

『去年の1番の出来事は。タカちゃんが帰ってきてくれた事かなあ』

『そうか、居ても居なくても同じだろ』

『違うわよ、茉弥だってあんなに喜んでるのに』

『そうだな』

『それに、タカちゃんに彼女が出来て。海に行ったり、一緒に遊んだり、クリスマスを楽しんだり。とても楽しかったわ』

『俺も、楽しかった。大変な事ばかりだったけどな、今はその幸せだしな』

『このこの。惚気ているの？』

『違うよ、みんなの笑顔がだよ』

『そうね、みんなの笑顔が1番ね』

お袋が少し寂しげな顔をした。

『タカちゃん、茉弥と風ちゃんの誕生日会の帰りに襲われたって聞いたけど大丈夫なの？』

『大丈夫だった、としか言えないな。潮さんが封印を解いてくれた右腕しか退魔師の力は使えないし、自分自身でさえ自分の力がどれ程のものかも判らない。婆ちゃんみたいに百戦錬磨ならいいけれど俺が自分の力を知って使える様になったのはつい最近だ。それに潮さんの話じゃ、この前襲ってきた相手は俺の封印を全部解いても危険な相手だと言っていたしな』

『そうか、ママはタカちゃんを信じているわ。でもその相手ってそんなに凄いの？』

『そうらしい、「逢魔の闇」かもって潮さんは言っていた』

『そ、そうなんだ。そっか』

沙羅の表情が強張った。

『お袋は何か知っているのか？』

『お婆ちゃんから、少しだけね。何回か対峙したけど勝てなかったって言っていたわ』

『婆ちゃんでも敵わない奴にどうすればいいんだろうな』

『そうね、でもタカちゃんは今決めているんですよ。絶対に守るって』

『ああ、だけど……』

『けど何なの、タカちゃんが不安になってしまったら、海ちゃんはどうすれば良いの。しっかりしなさい』

『そうだな』

『タカちゃんは、不器用で真っ直ぐで。とても頑固で一度決めた事は絶対に譲らなかった。でもちゃんとやり抜いて来ているじゃない。茉弥が元気なのもタカちゃんのお蔭よ』

『でも、治った訳じゃ……』

『仕方が無いの、原因が解らないのだから、タカちゃんが悪いんじゃないの』

『でも、その原因って』

『はい、そこまで。今、タカちゃんを守るべきは海ちゃんですよ。』

『茉弥の事はパパとママに任せておきなさい。いい分かった』

『その時玄関から声がした。』

『おーい、今年は帰ったぞ』

『あ、パパお帰りなさい』

『おっクソ坊主。いたのか珍しいな』

『クソ親父に珍しいなんて言われたくねえよ。それにここは俺の家だ』

『バカ。ここは俺の家で坊主の物じゃねえ』

『いちいち、うるせえんだよ。人の揚げ足ばかりとりやがって』

『2人が睨み合い一触即発の雰囲気になった。』

『もう、新年早々。2人とも止めて下さい。パパもタカちゃんも判った』

『了解です、ふんクソ親父が』

『タカちゃん、怒るわよ』

『3人でコタツに入りテレビを黙って見る。』

『これが俺と親父がいる時のスタイルだが、今年は少し違っていた。』

『おい、坊主。お前生意気にも彼女が出来たんだって』

『あん？ 悪いか』

『どんな子なんだ。お前の事だ写真でも持ち歩いているんだろ。見せてみる』

『そんなもの、持ってねえよ』

『けっ、しみたれてるなあ。ちゃんと紹介しろよ』

『ふん、いつもブラブラして、家に居ない人間にどうやって紹介するんだよ』

『携帯とかあるだろう。今時のガキがナマ言ってるんじゃないぞ』

『クソ親父の番号なんか知らねえもん』

『はあ？ この親不孝者が。そんな風に育てた覚えねえぞ』

『俺はお袋に育てられたんだ。クソ親父じゃねえだろ』

『しかし、正月早々。時化た面しやがって。またどうしようもない事ウジウジと考えてるんだろう』

『うるせえ、クソ親父に何が分かる！』

『お前の面見ていたら、何でもお見通しだ。このガキが！』
ヒートアップしてテーブル越しに方膝を立てて睨み合った。

『2人ともいい加減にしなさい！』

茉弥が起きて来てしまった、俺と親父の大きな声で目が覚めたのだろっ。

『母さま、どうしたの？ あっ父さまだ、また兄さまと喧嘩。茉弥、喧嘩嫌い』

『茉弥、こっちにおいで。喧嘩していた訳じゃ無いんだ。起こして悪かったな』

『うん、父さま』

『坊主、少し頭でも冷やして来い』

そう言いながらヘルメットを隆羅に投げ付けた。

隆羅が受け取るとヘルメットの中には鍵が入っていた。

『ああ、そうするよ。茉弥ゴメンな』

『明日には返せよ。明後日は使うからな』

『ああ、判ったよ』

『タカちゃん。出掛けるの？ それなら10分だけ待って。お願い』
『それじゃ外にいるから』

隆羅は玄関から外に出た。

『パパお願い、隆羅の気持ち分かってあげて。もう何回もあの子は危険な目に遭っているの。命懸けなのよ。今のままじゃ2度と帰って来れなくなってしまうかもしれないの』

沙羅が不安交じりの顔で仁を見つめて言った。

『そ、そうだったのか。何も知らないでつい、いつも通りやつちまっただ悪かったな』

しばらくするとお袋が外に出てきた。

手にはお袋用のヘルメットとステンレス製の細身のボトルを持っていた。

『はい、ヘルメット。海ちゃんの分、それとこれ』

『海の分って、海は今日は居ないぞ』

『備えあれば何とやらよ。これは熱々のコーヒー沙羅スペシャルよ、寒いから気をつけて行ってらっしゃい』

『お袋、いつもこんなで悪いな』

『大丈夫よ、パパもきつと分かってくれるわ。似たもの同士だから2人とも』

『似ているかそんなに。じゃ、行ってくるわ』

親父のスペシャル・ヤンチャ仕様のバイクのエンジンを掛ける。

いつもながら心地よい音がしてエンジンが吹け上がる。

俺の格好はスペシャル・クリスマス仕様だった。

海のセーターにお袋のダウンのコート、尻のマフラーに茉弥の手袋。それにお袋スペシャルの熱々コーヒーが右ポケットの中に入っている。

バイクを走らせる。

そして島で俺の事を変えてくれたアイツの事を何故か思い出していた。

島に着いたのはいいが仕事も見つからず途方に暮れていた。

『おい、お前こんな所で何しているんだ』

『別に、関係ないだろ』

『そんな暗い顔していたら来るもんも逃げていくぞ』

『構うなつて』

『生憎、俺はお節介なんだ。何があつたかは知らないけれどなあ。

世の中は、全てナンクルナイサーだ』

『ナンクルナイサー？』

『そうだ、楽しい事も嬉しい事も全てOK。哀しい事も辛い事も全てOK。何とかなるから気楽に行こうつて意味だ』

『どうせ、その面じゃ行く当ても無いんだろ。だったら俺の家に来い。お袋と妹が居るが大歓迎だ。ほら、行くぞ』

それが始まりだった。

そいつの名前は正^{ただし}と言って。

親父を早くに海で亡くし親父の跡を継いで海人^{うみんちゅう}（沖縄の漁師）をしていた。

年は俺の1つ上だった。

正の家には、お袋さんと妹が居たが見ず知らずの俺を快く受け入れてくれた。

俺はその家にしばらく身を寄せた。舟は苦手だがなるべく一緒に海に出て手伝いをした。

正が獲って来た魚をお袋さんが店で売って生計を立てていた。

何でもやった店番、正のもう1つのダイビングの仕事の手伝い。そしていろいろな事を教わった。

島の事、島の言葉、しきたり。そして正の強さ、お袋さんの優しさでっかい包容力、妹の純粹さ元氣、そのお蔭で笑えるようになり心を開く事が出来た。

そして1ヶ月が過ぎた時に決めたんだ。

『正。俺、この島で生活しようと思うんだ自分の力だけで』

『そうか、そろそろいい時期かもしれないな。お前もいい顔になったしな。生きているって感じがするだろ』

『ああ、そうだな。とりあえずホテルの寮にでも入って、そこから始めようと思う』

『そうだな、何かあれば相談にも乗るし力にもなるからな。それと時々でいいから顔出してくれ。妹はお前の事、気に入っているみたいだしな』

『ああ、分かった約束するよ』

『ナンクルナイサーだぞ、怒ったら負けだ』

『ナンクルナイサーだな』

そして、隆羅の島での生活がスタートした。自分の力で生きる為の。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6033t/>

アクアマリンの瞳に抱かれて

2011年10月16日23時44分発行